は其骨髄の性脈には互に相通ずる所のあるにも拘らず、其作の形式に於ても内容に於ても著しく相反對したる特質を現してゐるのが面白い。蓋しダンテはルネサンスの先驅者とも豫言者とも稱すべき人、シェークスピヤは其殿將とも集大成者とも稱すべき人である。（以下ボーザンケー氏の美學史に見えたる評論の意を取りて敷衍す。）

ダンテは十三世紀の政治、歴史、道德の活畫圖である、よく時代の精神を代表してゐる。その荒唐奇異なる事蹟を喜ぶ點に於て、その未來世に重きを措ける點に於て、その作の寓意的、標示的なる點に於て、その常に宗教的、信仰的なる點に於て、その拉典詩人ヴージルを一代の詩宗と尊崇する點等に於て、彼れは明かに中世的人格と評すべきである。併しながら時勢の然らしむる所、その未來世を語る間に現在を語り、自己を語るうちに人間全體を語り、現象界の中に就いて實體を認むるが如き諸點は明かにルネサンスに一足を踏みかけたる神祕論者たるの本領を發露し、特に作者としての資格より觀れば、その鋭く主觀的、抒情的で、毎に自家の胸懷を語り、時としては更に一歩を進めて個性的、獨立的ともなり、作の體式などに關しては聊かも在來のに拘束せらるゝ所無きが如き、若しくは其詩中に用ふる語を英斷して專ら近世語中に取れるが如きは明かに第一期のルネサンス卽ち名づけて「ロマンチック・ルネサンス」或ひは「創作的ルネサンス」と言ふものを代表して居ると評すべきである。

之れに比べるとシェークスピヤは其爲人から言つても其作の内容や外形から言つても著しく異つたものである。是れ將た時勢の然らしめた所であらう。シェークスピヤの頃には、未來世に對する信仰などは殆ど全く亡び去らんとしてゐた。人心を支配するものは主として宿命說（フェータリズム）、人間の禍福吉凶は畢竟ずるに運命の司る所で人力にては如何ともしがたいといふ信念が流布してゐた。就中星占（アストロ）術（ロジー）といつて、個人の一生の事は其出生を司る星の作用次第だといふ謬信が盛んであつた。シェークスピヤの作『リヤ王』中のエドモンドといふ惡少年の獨語などが斯樣な思想の適當な一例。此如き謬信に對して他の一方には剛情我慢にして一へに自分の力を恃み、世の中の事は要するに智慧次第、意志次第であるから、冷靜に考案し大膽に實行して、人情や義務なぞは些も眼中におかず、臨機應變に權謀術數をも用ひ、殘忍酷薄をも敢てして我利是れ求めるのが立身の極意であると絶對個人主義を主張するイヤゴ一流の人物も輩出してゐた。かゝる有樣であつたから、シェークスピヤの如きも其作に就いて其思想を察すると、明かに希臘的で、現世的で、ヒブルー的、基督教的の信仰は頗る微薄で、どちらかと言へば無宗教家の態度を取つてゐるものと評して當然である。三十七篇の脚本に寫し出した所は主として現世の事でもあり、自然の世態でもある。神祕的な臭ひは殆ど無い。無論荒唐奇怪な事變もあれば空想に耽る人物や神祕めいた事蹟も處々に挿まつてはゐるが、何れかといへば劇の潤色として用ひられた氣味で、作意の精髄となつてゐるのは主（おも）に現實界の事件や

人物。又ダンテの主觀的、個性的であるのとは反對に客觀的、沒個性的であつて、殆ど悉く自己の影を沒し去つて現はさない。是れもまた時勢の相違を示してゐる。若しくはまた其作の體式に就いて言ふと、其晩年に近づきての作の如きは著しく希臘古劇の作法に倣はんと欲したかとも思はるゝ影を見せてゐる。中年までは喜劇と悲劇とを錯綜して綴るといふが彼れの慣手段であつたのだが、晩年になつては、或ひは此區別を明かにせんと欲したかとも疑はれる氣味がある。『シムベリン』中にクローテンといふ人物一人の外は命を落すものゝ無いなどは彼れの中年には例の無い事。又『テムペスト』の如きは希臘古劇の原則たる時と處との一致をさへ保つてゐる。是等の諸點から觀てシェークスピヤはあくまでも最終のルネサンス卽ちおひ〳〵常套(トラデシヨン)となり來つたルネサンス、名づけて「擬古式ルネサンス」と言ふものを代表してゐると言つてよい。按ふに彼れは寓意譚(アレゴリー)に偏するを中世式街耀(ルネサンスベダントリー)として斥け、擬古學風に拘するを古學式街耀(クラシカルベダントリー)として斥け、二者の弊を去りて其利を併せた所に立脚しようと欲したのでもあらう。

之れを要するにダンテはルネサンスの旭日にしてシェークスピヤはその燦爛たる夕陽である、云云。

（以上ポーザンケー氏の評の大要なれど、所々敷衍し自評を交へたれば原文其儘にあらず。讀者之れを諒せよ。）

ルネサンスの流弊及び其反動

ルネサンスの功績は粗上(ほゞ)に述べて來た如くであつたが、何事も利弊相半するは言ふまでも無い事で、其利益の莫大であつたのに相應して其流弊もまた頗る大なるものであつた。而して其過失、其弊害は主として其餘りに現世主義的、個人主義的であつたのと餘りに感情的、本能的に流れたのと現在の人智を恃み過ぎた邊から生じた。彼の天性中庸の德に富んでゐたらしい上代希臘人すら、其末路に及んでは其現世主義や個人主義や重智主義に偏したが爲に國を誤つたと言つてよい位ゐだから、似て非なる希臘主義(ヘレニズム)が弊を生じたのに不思議は無い。すなはち先づ餘りに現世主義的傾向が熾んな爲、何事も實驗を第一と立てた結果、世を擧つて物質主義の一點に墮落せしめんとしたるが如き、或ひは個人主義が極端に流れて、それが爲に偉大な人格も現れた代りに敗風亂俗も殆ど絶顚に達したるが如き、感情主義が放肆蕩迭を是認して狂妄を募らしめたるが如き、科學的討究に端を發いた重智主義がおひ〳〵に墮落して、遂に只常識的となり、如何にせば現世に於て成功すべきか、如何にせば立身出世すべきかなどいふ處世策の研究にのみ浮身をやつすに至りたるが如き、これが先づ一般の傾向。果(はて)は精神界を擧つて殆ど無政府の有樣となつた。こゝに於てか不羈卓落、忌憚なく自家の所信を披瀝する識見家、或ひは獨立勇往、天下を敵としても自家の抱負を實現せんとする

實行家も出づれば、信仰も無く操持も無く只管目前の嗜欲是れ貪る野卑な唯物主義に生死する者も群り出でた。頑冥な我執、猛烈な煩惱に自他を殘害して悔ゆることを知らざる者も群り出でた。彼のフロレンスの學者ポッヂオが貴族の天賦權を非認して萬人の同權を主張したは第十五世紀の中葉。同じくフロレンスのマキヤベリ（一四六九生、一五二七死）が『君主論』を著して專制政治の有力な辯護を試みたのも此頃。要するに現世主義と極端に流れたる個人主義とに伴隨する諸惡德が——放埒、狂妄、奢侈、驕慢、邪淫、耽溺、殘忍、横暴、貪婪、陰險、譎詐等——が到る處にはびこつた。彼の英國の劇詩人マーローやシェークスピヤの作中に寫された種々の惡德は、ルネサンスの末路に於て其本源たる伊太利では勿論の事、大陸到る處で目擊されたものに相違ない。例へば、マーローの作『モルタの猶太人』の主人公たる守錢奴の如き者、シェークスピヤの作『オセロ』中の惡漢イヤゴの如き者も、必ずしも作者の誇張虛構でなく、或ひは實際に見出されたかも知れない。彼の伊太利の淸盛とも言ふべきシーザル・ボルジヤ乃至リミニの虐主シヂスモネロ・マラテスタ等の亂行に關する事蹟を參照すれば必ずしも有り得まじき事とも思はれ無い。とりわけルネサンスの本場たる伊太利に於ては是等の傾向が極端に達し、個人主義、平等主義の最も猛烈に唱へられた當時には、其頃は尙ほ封建時代であつたにも拘らず、貴紳と町人との間に何等服裝上の區別が無い程になつたこともあり、一時は男女同等も實行せられ、有夫姦とか、紳士の博奕とか、殺人とか、復

讐とか、毒殺とか、暗殺とかは、ふんだんの事であつた。つまり一世を擧つて無宗敎、無道德の有樣。學藝の方面を觀ても、餘りに尙古熟の熾んであつた結果、學者も詩人も一へに古へのに擬することにのみ力を勞し、それがため創作の才はおひ〳〵萎靡するやうになつた。たま〳〵新作に從事する者があつても、强弩の末魯縞をも穿たずで、最早大きな想像力は涸れ、只何かなしに新奇な物をとばかり覘ふ所から、寄怪な不自然な空想を逞うし、牽强附會な比喩を弄んで詞華言葉の小細工に全力を傾くるか、でなくば博覽强記を第一の務めとして古典の知識を衒售するに忙しく、十七八世紀に所謂 *Pseudo-classicism* 擬古文學の俑を作つた手合ばかり、最初の中は拉典のよりも希臘のを重んずる習ひであつたが、衒學の傾向の甚しくなつたにつれて、いつしか拉典の方を偏重するやうになつた。蓋し希臘語には何となく輕淺浮靡の失があるが、拉典語には是れが無く、如何にも莊重にして崇嚴だといふのが彼等の主張する所であつた。

されば十四世紀以後には古羅馬の名文家シセロは伊太利文學の軌範となつて、苟も文章に志す者はシセロを師とせねばならなかつたのみならず、甚しきに至つてはシセロ集中に無い文字は使用してはならぬといふ規則を立つる者さへ出たといふ。當時は必ず拉典文で著述せざれば學者とは見做されなかつたのである。恰も我が德川時代に學者は必ず漢文で著述をしたと東西同揆。姓名までも拉典式に改めることが流行つた。遊女の名までがポオシヤとかリュークレシヤとかヴーヂニヤとか羅

馬史上有名な佳人淑女のを用ひた程である。況んや學者氣取の男子は其姓名の *Pietro* を *Petreius* と變へて見たり、*Luca, Grasso* を *Lucius, Crassus* なぞと改めて見た。十七世紀になつて英のミルトンの卓拔なる見識を以てすら、尙ほ拉典文を綴つてはミルトニウスと署したのを思ふと、擬古風潮の如何に凄まじかつたかが分る。我が物茂卿と東西同日の一話柄である。

流弊斯くの如くであつたればこそルーテルの宗敎革新の運動が一段必要にも感ぜられたのである。彼の運動は、一面から觀ればルネサンスの一部たるに過ぎぬともいへるが、又一面から觀ればルネサンスが精神界に及ぼした惡感化に反動した者と言つてよい。卽ち無宗敎、無道德の思潮、未來を無視する現世主義、靈を忘れたる肉の生活に反動したのだ。奢侈とか淫逸とか放埒とか驕慢とかいふ惡德を掃蕩することに力めた運動と見てよい。就中英國に於ける新敎徒（ピューリタン）の活動の如きは言ふ迄も無くそれであつた。クロムウェルの政府が甚しき峻嚴主義、中古時代の枯禪主義（モナスチシズム）へ逆戻りするのかとも思はるゝ程の禁慾主義に立脚してあらゆる奢侈風流を嚴禁し、國內のあらゆる遊戲娛樂を禁じたのは、頽濤の樣な時弊を救ふ策としては蓋し止むを得なかつたのであらう。我が水野越前以上の大英斷であつたのである。併しながら退いて考ふれば、宗敎改革運動（リホーメーション）もまた一種の狂熱で、破壞的であると共に建設的な、智的であると共に感情的な、勇往直前の猛烈な革命的特質を具へた點に

於ては慥にルネサンスの血統であるから、是れにも種々の怖るべき弊害が伴つた。其動機は利他濟衆に他ならぬだけに、自ら省みて疚しうないのを後援に、思ひ切つた殘忍をも敢てすることがある習ひ、彼の三十年亂のやうな慘烈を極めた戰爭は純粹な政治上の爭ひや個人の功名心だけでは先づ起らないと言つてよい。で、宗敎革新の紛擾と戰亂とが釀し出した弊害も頗る夥しく且つ猛烈であつたので、世人は宗敎的利他主義の狂熱の、其弊に於ては無宗敎的利己主義の狂熱と大して異ならぬものといふことを悟り、ルネサンスの放肆狂妄を憎むと同時にリホーメーションの餘弊をも恐れた。とりわけ英國は宗敎家（ピューリタン）の政治的活動によつて苦（にが）い手嚴しい革命を經驗したので、本來が堅氣な國民だけに、感情的に事を行ふの危險を覺え、總て狂熱とか放肆とか極端とか奇矯とか言ふ樣なことを呪詛し、何事を行ふにつけても思慮分別を用ひて精確に周密に考へ拔いた上で其中正を誤らぬ樣にするが第一と信じ始めた。ルネサンスの諸種の思潮のうち智を重んずるといふ一思潮が他の諸思潮を壓倒して前に幾倍する幅の廣い、底の深い、勢ひの凄まじい流れとなつて漲つた。大陸では佛國が此新時代精神の中心であつた。何よりも先づ *good sense* を卽ち事物の中正を看取する明識或ひは烱眼或ひは優秀なる常識とでも名づくべき者を尊重するといふ事が一代の氣風となつた。個人々々の考へは一時の出來心、當座の感情、氣分、衝動等に基くことが多く、隨つて事の中正を誤まる例が多い、併し乍ら所謂輿論とか輿情とか先例とか模範とか習慣とか格式とか言ふ者は、要するに長い間

の廣い經驗の結果に成つた者で、言はゞ最も穩當な優秀な常識の結晶に外ならぬ者と見て然るべきだから、事に臨んでは先づ是等の者に依據した方が安全であるといふのが當時の輿論。文學の方面へも之れと同じ精神が波及し、ルネサンス全盛當時の不羈奔放な縱横自在な創作の自由は拒否せられ、外形に關しても內容に關しても周到な批判、綿密な穿鑿の結果に成つた規律や法格が定められ、苟も之れを破れば破格と名づけて貶斥することとなり、こゝに所謂擬古文學全盛時代を招致するの端を發いた。換言すれば、政治上に於ても社會上に於ても文學上に於ても團體、輿論、習慣、規律、常識が第一の勢力となつて個人の自由や各自の意思や感情や嗜好やは之れが爲に壓伏せられねばならぬことゝなつた。以上が大體の上より觀た歐洲十八世紀の思潮なのである。

十八世紀の大勢

こゝに十八世紀と言ふのは主として十七世紀の末頃より十八世紀の末頃までを指す。政治、宗教、社交、文藝何れの方面にも習慣、先例、典據、儀式といふやうなものが重んぜられ、何事を爲すにつけても先づ輿論を斟酌し、時尙に鑑み、之れと衝突せぬやうにせねばならぬといふ窮屈の時勢。たま〳〵敢て自我を立して直言直往せんと試むる者があれば、人々皆目を欹てゝ之れを狂人扱ひにするといふ有樣ゆゑ、依從、模倣自ら風を爲し、循俗（コンホーミチー）といふ事を理想とするの結果は、阿附

迎合をも惡德とは思はぬほどになつた。當時の識者先覺は口を揃へて良俗に循（コンフホーム）從する事の必要なる所以を訓誡し、忘れても懷疑、不信、破格、狂妄に流るゝ勿れと說いた。卽ち國家本位、團體本位の時代である。個人の自由は、ルネサンス時代の反動で、全く度外視されることゝなつた。服飾が時の流行に支配されるといふ事は遠き昔からもあることだが、十八世紀ほどに甚しいとは、少くとも前代には無かつたであらう。佛王ルイ十四世の朝廷は當代の理想と見做されてゐたので、そこにて行はれる服裝なり嗜好なり風習なり文學なりは殆ど全歐洲の上中流を忽ちのうちに席卷する習ひであつたと稱しても誇張でない。一事が萬事で、當代の人間は何事につけても流行の奴たるに外ならなんだ。隨つて人は皆繁文褥禮の間に窮屈な思ひをして交際上の小智慧ばかり働かせ一年三百六十日を送るといふ次第ゆゑ、辭令には巧みに、行儀體裁は立派に、如何にも士君子らしい顏はしてゐれど、實は本性を曲げてゐるので、必然の結果として僞善者、矯飾者夥しく、それに獨創の氣とか熱心とか感激とかいふことは一代の禁物ゆゑ、上中流にも下等社會にも生動の氣が微々として、天眞流露の趣きなどいふものは更らに見ることが出來なんだ。當時最も重んぜられたものは名譽（アノ）であつた。名譽のためには命を棄てることも辭せなんだといふと、そこに如何にも熱烈な氣概が見えるやうであるが、その所謂名譽は今の所謂虛榮に類し、ひとへに輿論を恐れ憚かる心に基いたもので、自發的では無く、むしろ餘儀無くせられた結果であつた。つまり、個人の眞我が輿論の壓

力に押し附けられて殆ど其存在を亡失してゐた時代である。

之れをロマンチシズムの卒先者とも見做すべき英國文壇の十八世紀に徴するに、同じ思潮の貫流してゐたことが歴然として見える。英の十八世紀思潮は、一面はルネサンス時代の蹠くことを知らぬ向上心、際限のない想像力、熾烈なる詩人的狂熱に反流し、又一面は彼のピューリタン宗徒專權時代に盛んであつた普通の感覺を超越した靈界に關する直覺や、ヒブルー詩想さながらの狂烈な宗教的信仰や現世肉體のあらゆる樂欲を厭離して他界靈性の幸福をのみ夢想する底の神祕的狂熱に反流した者である。すなはち一は前代に於ける二種の狂熱――ルネサンスの無宗教的狂熱とピューリタンの宗教的狂熱と――の流弊に寒心したるの結果、二は舊教派と新教派との間の長き激しき爭論によつて双方の弱所や弊害が暴露されて、譬へば本尊佛の金箔が剝落し、有難味が減じ、それがために民心が懷疑に傾いた結果、何事につけても極端はよくないものといふ觀念が強くなり、穩健とか中庸とか折衷とか調和とかいふことが一代の理想となり、例の *good sense* の名の下に優秀なる常識が何よりも尊重せらるゝことゝなつたに外ならぬ。

純文學の上を觀ると最もよく此傾向が解る。ルネサンスの初期には古文學復興とは名宣つたものの、其實は之れを世を威す假面にかぶつて自我を發揮しようといふのが半無意識の動機であつたので、詩でも文でも形式は二の町で、先づ第一は新思想、新感情の表白に力を盡すといふ風であつ

たのだが、十七世紀の中頃よりは、それが丁度逆になつて、詩でも文でも先づ第一は形式の完備といふと、一定の法格に合ふか合はぬかといふ事が主な問題となり、よし內容は秀でゝゐても形式の破格なのは取らぬといふことになつた。その斯くの如く成り來つた直接の原因は十八世紀文學の淵源たる佛蘭西宮廷文學の影響である。當時佛文壇にオーソリチーと崇められてゐたはニコラス・ブアロー（一六三六年生、一七一一年死）といふ批評家で、これは詩人としても諷刺家としても多少の名聲があつた作家だが、一代の論客として最大の權力を有し、希臘のアリストートルや羅馬のホレースの詩論を祖述して有名な "*Art Poetique*" といふ律語で綴つた詩論を著したので當代の文壇には殆ど神託の如く尊重されたものであつたが、此詩論は啻に佛蘭西一國のみならず他の國々の詩人にも奉體され、一時は犯すべからざる金科玉條のやうに持囃された。英國文壇の如きも殆ど奴隷的にブアローの詩法を奉じた。其說の要旨は、形式內容双つながら誇張を嫌ひ、過巧を忌み、牽强附會の比喩や要領を得ぬ曖昧な虛辭や浮華の句や荒唐無稽な不自然な想像を排斥して專ら明晰と整頓とを推奬するにあつた。さて斯樣に形式にばかり腐心するの結果、作の力とか深みとかをば自然第二位に置くことゝなつた。

又狂熱は勢ひ荒唐無稽な思想や蕪雜破格の作法に流るゝの基だと見做されて、自然とか中正とか典雅とか整齊とか穩健とか合理とかいふ名目の下に、專ら常識的な作意を推稱し、所謂古文學――

希臘羅馬の古文學――は取りも直さず是等諸長所を具備したものゆゑ、長へに師表とすべきものだと唱へた。蓋し一代の人心が彼の狂妄に懲りて深く常識を重んずるの餘り、宗教上に於て神祕主義を嫌惡したと同じに、文學上に於ても荒唐を嫌ひ曖昧を忌んだのである。第一に明晰を主張したは是れが爲である。併しながら彼等の所謂明晰は露骨といふことでは無い。元來古文學を崇拜するといふが、現代の有りのまゝを好まず霞隱れの花を觀るを好むといふ心より生じたのであるから、彼等は露骨を忌むこと甚しく、自然を詠ずるにも人間を寫すにも毎に必ず古文學化することを力めたものだ。例へば、只「女」といつても濟む所を、必ずのやうに「女神」と言ひ、「鋤」と言つて澤山の場合にも「畑鋤く調度」なぞと物々しく言つたものだ。或ひは女といふ代りに故と只一語 *fair*（美）と言つたり、「英雄」と言ふ代りに *brave*（豪）と言つたり、「魚」といはずして *scaly tribe*（鱗族）と氣取つて言つたり、（是等皆古文學の模倣であるが、取りも直さず支那文學式）更に念の入つたのになると、只「長靴」と書いても濟む所を *the shiving leather that encased the limb*（脚を包める燦めく柔革）なぞと物體ぶり、「月昇る」と言へば直分るものを *Cynthia is lifting her silver horn*（嫦娥今將に其銀角を擡げんとす）・なぞと嚇かしたものだ。譬へば今の口語詩ならば「火事だ火事だ」とでも言ふらしい所を「祝融怒、祝融怒」なぞと詠じ始めるが今尙ほ漢詩の式であるのと全く同一轍。十八世紀文學の特質は和漢文學の前縦に照らして考ふれば多く辯ずるの要は無いと思ふ。古格や形式に拘泥する漢詩人や舊派歌人の作風に比べて見て類推せられたがよい。

又ルネサンス時代の作物を評して荒唐と難じ、不自然と罵り、毎に「自然に率へ」と言ふことを主張してゐたが、其實、彼等の唱へた「自然」は今の所謂自然では無い。彼等は當時の上流風俗を以て人間不易の眞態に稱つたものと自負しきつてゐた故に、之れに依從したる言動を自然と見做し、之れに違背した者を不自然だと獨斷的に定めてゐたのである。つまり十八世紀は甚しい自惚時代、自負時代なのである。中世紀の神祕主義に對する反動もありて例の人智を重んずる餘り、おひ〳〵獨斷に安んずるやうになり、其狹い經驗と學殖とを標準として事物を批判し、其結果、當代の社會を以て比較上最善最美の社會と斷じ、或者は眞にしか信じて樂觀し、自負し、或者は輿論に强ひられるので止むを得ずして依從し迎合するといふ時勢。何れにもせよ自負自慢といふ臭ひは此時代の作物の內容にも形式にも附纏つてゐる。彼等は古文學の眞髓を傳へるのを使命としてゐたのだが、決してそれを能くせなんだのみならず此自負自慢の臭ひが紛々としてゐるのが疵である。其一端をいはうに、眞の古文學（クラッシシズム）卽ち上古希臘の作物は第一に不自意識（アンコンシャスネス）といふ特質――どんな立派な作をしても作者みづからはそれを心附かずにゐるのかと思はれる美趣――があるが、擬古文學（シュードクラッシシズム）卽ち十八世紀の作物に至つては、殆ど痛ましい程に自意識的で、作者の苦心と自負とが見え透き、斧鑿の痕が歷々として、彫琢に過ぎ修飾に過ぎてゐる。此點は後のロマンチシズムの作物とも違ふところであ

る。ロマンチシズムもおそろしく自意識的ではあるが、不羈奔放で、時々は興に乘じてツイ自分を忘れることがある、少くともかやうな窮屈な、こせ〳〵した細工の跡は見えぬ。

之れを要するに、十八世紀の英國其他に謂ふ所の古文學は、希臘式といふよりも拉典式といつたはうが當り、拉典式といふよりも佛蘭西式といつた方が當つてゐる。決してアセンス全盛時代などの希臘文學の眞髄を傳へ得た者では無い。當時の文學者は思想を排して常識を取り、直覺を喜ばずして推理を尊び、詩を案ずるに當つても分析し概括するを最も肝要の手段とした。通理とか通情とか輿論とか一般の世態とかを第一のものと重んじたが爲、自然に自家獨得の觀察や見解は之れを作中に現はすことを憚り、毎に主觀を抑壓して出來るだけ客觀的ならんことを力めた。其結果、誰れの作る所もさまで著しくは違はぬものとなり、千篇一律、模倣又模倣、熱も無ければ生氣もなく、陳々腐々、譬へば造り花と一般、技巧の末にのみ全力を注ぐの文學と墮落してしまつた。此反動として起つたのがロマンチシズムの文學である。

ロマンチシズムの語義

ロマンチシズムとは、其儘に直譯すればロマンス主義といふことで、此一語のうちに隱然彼のクラッシ、ズムが風俗をも人情をも制度をも需要をも異にしてゐた古代の希臘文學や拉典文學を模範

として擬似を事とするのを傍ら痛く思ひ、近代國民は近代國民らしく、間近く中古時代の人情風俗から生れいでた文學、卽ちロマンス語で綴られた歌謠や小說に依據すべきであると主張してゐる趣きが見える。本來をいへばロマンスとは羅馬語で綴つた小說風の歌謠もしくは稀には散文體の物語などの總稱である。又羅馬語とは羅馬帝國末路の拉典語に各地の蠻族の方言が混淆して出來た中古語のことで、言はゞ訛つた拉典語、羅馬語訛りなどゝ譯すべきもの。後の伊太利語や葡萄牙語や西班牙語や佛蘭西語やルーマニヤ語はこれから進化して出來た。隨つてロマンスといふのは主として第十二世紀の頃より第十三、十四、兩世紀へ掛けて行はれた武俠的冒險譚を指すのである。荒唐無稽な妖怪譚や薄倖數奇の戀愛譚などが其附屬物である。後には當時の俚歌童謠のたぐひまでもロマンス文學の一部と見做すやうになつた。つまり、拉典文學とは全く離れて、ゴッス民族の天性、本能、嗜好、習慣、傳說、需要等にもとづいて自然に成り出でたたぐひのものを總稱したのだと言つてよい。又基督敎全盛以後に成り出でた者といふ所からロマンチシズムといへば反異敎的(アンチペガニズム)卽ち基督敎的卽ち希臘羅馬の文物制度に反對したものといふ義になることもある。併し所謂ロマンチシズムの意義は迚もこれだけの因緣話では說き盡されない。今日文藝史上の科語として用ひらるゝロマンチシズムは更に遙かに複雜な意義を含んでゐる。總じて文學上の用語は科學、哲學のなぞとは違つて、先づは偶然に名が附いて、曖昧多義の間に因襲し來つたと言ふやうなのが多いから、迚も

適當な譯語なぞは附かない。「ルネサンス」なぞが其一例。「デガダン」とか「フイリスチン」とか「センチメンタリズム」とか「ボヘミヤニズム」とか「トランセンデンタリズム」とか「イムプレッショニズム」とか「リヤリズム」とか「ナチュラリズム」とか「シムボリズム」とか「アイデヤリズム」とか何れも同例である。普通に文藝上に謂ふロマンチシズムの意義に就いて十八、十九兩世紀に於けるロマンチシズムの歷史の著者ビーヤス氏なぞが算へ擧げてゐる點は凡そ五ヶ條である。その第一に曰く、ロマンチシズムとは中古主義の義である。即ち前にも言つた如く希臘羅馬の古文藝に反對したる者の義。此意味から言へば中世式又はゴシック式などゝ譯してもよい。希臘羅馬の文藝即ちクラッシ、ズムが明晰（クリヤネス）や、單純（シムプリシチー）や、制限（レストレイント）や、統一（ユニチー）や、均齊（シムメトリー）や、部分よりも全分を重んずることを代表するに對して、ロマンチシズムは不羈とか、放縱とか、荒唐とか、激烈な感情とか、絢爛な色彩とか、濃厚繁褥な形容とか、全分の破綻を思はずして部分の技巧に流るゝとか、總じて形式の整備を等閑に附することを代表する。換言すれば、クラッシ、ズムは體式や格律や技巧や工夫を重んずる文藝、ロマンチシズムは沒規律の、本能的の、自然に近い文藝といふことになる。

然るに自然のまゝ野生のまゝなものは勢ひ粗笨野俗に流れるといふ傾向のある所から、ロマンチシズムの第二義が生ずる。即ち、クラッシ、ズムが高雅、穩健、純正、入格、合理、有典據などい

ふ資格を具へてゐるのに對して、ロマンチシズムは野卑、陋俗、蕪雜、破格、荒唐、無稽、狂妄などいふ資格を具へてゐることになる。彼れは雅、之れは俗。德川時代に於ける我が雅文學と俗文學との關係を思ひ合はせると解る。此意義のロマンチシズムは貶稱である。言はゞ草雙紙的とか子供だましとか戲作者的とか言ふ語が貶稱であると同じ道理。ゲーテがクラシックを健全と解し、ロマンチックを病的と評し、シルレルがクラシックを純樸（ナイーヴ）と評し、ロマンチックを感傷的（センチメンタル）と言つたのなぞも多少此貶意を含んでゐると言へる。

併し以上は主として形式上の話。其内容に就いて觀ると、ロマンチシズムには更に別の意味がある。舊い文藝に慊らないで新たに勃興した文藝といふ點がそれで、在來の窮屈な規律や法格や模範や先例や標準や習慣に反動して起つた新奇を好むの念、自由の創始を希ふの念、破天荒の事業を喜ぶの念、自家の機軸を出さんと欲するの念等を代表してゐる。舊式の美に對して新式の美を興さんとするの念、即ち反動的精神（リアクショナリー・スピリット）である。尤も此義より見ればロマンチシズムは何時（いつ）の世、如何なる國にも絶えず循環し來るべき現象の名たるに外ならぬ。刷新の氣脈を帶んだ文藝は悉くロマンチシズムになつてしまふ。エスキラスに對してソホークリスが起つたのもそれ、『イリヤッド』に對して『オデッシー』が出來たのもそれと言はねばならぬ。さすれば元祿享保頃に勃興した我が文藝もそれ、明治の元祿文學復興もそれ、寫實主義や自然主義の活動もそれ。即ち陳套、爛熟に對する

斬新、破天荒、新機軸の義になる。で佛のスタンダルといふ文學者はロマンチシズムを改進、自由、創意及び未來の精神の義に解し、クラッシ、ズムを保守、典據、模倣、過去の精神等の義に解したといふ。さうも見られる。

さて然らば、主として如何なる點に向つて刷新を試みようとしたかと問ふに及んで、玆にロマンチシズムの第四義が生ずる。卽ちクラッシ、ズムは平明を主とする故に凡近に見え、淺膚に流れ易い。之れに對してロマンチシズムは奇怪、神祕、すべて平生見馴れざれが如き美を主とする。クラッシ、ズムは又通理を重んじ、輿情を專としたが爲に作家の自我を沒却し、一へに制抑と蘊蓄とに力めた。之れに對してロマンチシズムは不羈放縱、獨立特行の自我を表現することに力めた。卽ち客觀的に對する主觀的——冷淡、沈靜、無色透明に對する狂熱、激昂、燃ゆるが如き色彩——知足安立に對する不滿、不安、惝怳、憧憬。クラッシ、ズムの本領は判然、瞭然、截然、畫然、現はさゞる所無しである。之れに對してロマンチシズムは漠然、茫然、朦朧、縹渺、暗示的、標示的。クラッシ、ズムは圓滿完成、ロマンチシズムは粗造品的。一は彫像の如く、他は油繪のやう。

右の如く一種の主張たり主義たるの實質を具ふるに及んで、ロマンチシズムに更に第五の意義が加はる。卽ち常識主義とか合理主義（ラショナリズム）とかいふ者に對する感情主義（センチメンタリズム）、客觀主義（オブジエクチヤズム）に對する主觀主義（サブジエクチヤズム）、團體本位主義（ルレクチヤズム）に對する個人本位主義（インデヤヂユアリズム）、現實主義に對する理想主義、樂觀主義に對する悲觀主義の義になる。ロマンチシズムを奉ずる文學者が政治や宗敎や社會や道德に容喙するやうになる所以は、主として是等の態度にもとづくのである。

以上は主として內質の上から觀たロマンチシズムである。

併しながら尙ほ是れだけではロマンチシズムの眞義を剖析し得て周到だとは言ひ難い。其由來もまだ是れだけでは明かで無く、其利弊に至つては尙ほ更分らぬ。且つ英、佛、獨と三國に分れておのおの其ロマンチシズムの色を異にした鹽梅が分らぬ。又同じ一國に就いて見ても、內容の上はロマンチシズム的でありながら、形式の上はクラッシ、ズムに止まつてゐたと彼のバイロンのやうなものもあれば、主義は明かに保守的であり、其作の形式にもクラシック風の聯句（カプレット）などを用ひてゐながら、尙ほ其材料の點から見てロマンチシズムの一驍將と見做さるゝウォルター・スコットのやうなのもある。かと思へば、右の二家とも全く其色を異にしてゐるワーズワースのやうな詩人もやッぱり立派なロマンチシスト。或ひは又それらとも違ふ獨逸のゲーテ、シルレル、シュレーゲル、ノーファリス等もまたロマンチシスト。ヘーゲル、フィヒテ、シェリング、ショーペンハウエル等の如き獨逸の哲學者もさう。佛蘭西のユゴーもさう、ラマルチーヌもさうと、斯う算へはじめて來ると事相が甚だ混雜して、迚も以上の說明だけでは足らない。是れ予が改めて一法を工夫し、分析式に下に講說を試みんとする所以である。

ロマンチシズムの分析

不自覺的ロマンチシズム

前にルネサンスの功績を總評した時分に、それは世界の發見と人間の發見であると言つておいた。これはルネサンスの事蹟に關しての最も卓越せる大家（オーソリチー）と推さるゝアーサー・サイモンヅ氏の名評を借用したのであつたが、今もしそれに倣つてロマンチシズムの事業を概評せんとしたなら、そもそも何と言つたら適當であらうか？　ロマンチシズムは如何にも複雜を極めた活動であつて、到底之れを單に文藝上のみに關するものと見做すとの出來んのは恰も彼のルネサンスが文藝復興などいふ譯語で以て蔽ひ切れないのと一般である。約言すれば、ロマンチシズムはルネサンスが廣く人間の解脱を媒介したのに對して、特に個人の解脱を啓導したものと言つてよい。ロマンチシズムの古い解釋に隨つて、專ら文藝上に留まる革新的精神とするのでは物足らない。然らば何と解したらよいか？　先づは之れを釋して、

社會の壓抑に反撥する個人の自覺が、主として文藝上、理論上及び私德上に發揮したるものにして、其影響は頗る廣く、或ひは直接に、或ひは間接に、政治、社會、宗教、道德等の各方面にも交渉する所淺からざる歐洲十八世紀末より十九世紀前半に至りて熾んなりし革新的活動、

などゝしたら、ほゞその全內容を包括することが出來ようかと思ふ。要するに「文藝上、理論上、私德上に於ける革新活動」といふが眼目で、その間接の影響上は別として、その直接の活動から言ふと、政治や社會や宗教の實際には、先づ公然とは觸れてゐないのが特色。隨分過激な革命的分子を含んでゐるのであるが、主として、思想、感情、趣味、好尙の範圍內に留まり、それが實行的意志となつて現はるゝ場合には限界があつて、概して著作か、評論か、タカヾ自分一個の生活、交遊間又はそれに比すべき私的（プライベート）の關係に現はるゝぐらゐ。之れを噴火山の火氣に譬へたなら、まだ決して外に向つて爆發するには至らなんだ若しくは徒（ほん）の文藝谷、私德谷などいふ山麓だけで折々硫黃の氣を吹出してゐた革命的精神。蓋し十八世紀の末に及んで斯樣な精神が勃興したのは、彼のルネサンスに始まつた人間の自覺がおひ〳〵に發達した自然の結果である。ふと考へると、十八世紀の間は輿論とか國家とか社會とか團體とかいふ事にのみ重きを置き、全般の利害や平等の得失を第一と立てたとあるから、博愛心や愛國心が盛んで身を殺して仁を成すやうな人民が多かつたかとも思はれるが、其實は反對で、當時の所謂平等の利害とか全般の得失とかは全くの假面で、內實は甚しい利己的個人主義。國家、社會の美名を假りて上流もしくは中流に立つて時の權柄を握つてゐる輩が、政治、社會、宗教、文藝、何にまれ、めい〳〵の繩張內に於て、暗に同臭味の團體を組織し、其小さい團體の爲に大多數の國民を犧牲にしようと力めたのであつた。そこで、その初めの程はあ

れ、弊の漸く著しくなるにつれて之れを慨する識者も出る、公明卓落の士が默つてゐぬ。それにルネサンス以來必然の時勢でおひ〳〵敎育が普及しつゝあつたゆゑ、中流以下として排斥せられてゐた新代國民中に自覺の著しく進んだ年少氣鋭の徒もあらうといふもの。それらが不平に堪へかねて或ひは猶ほ半無意識ながら、何だかムシヤクシヤしてたまらぬので、何とかして鬱憤を晴らす法を得たいと願ふ。所が國家萬能、輿論全盛の時代だ、うつかり手どころか口でも出すが最後、どんな目に逢はうも知れぬ。ルイ十四世の朝には王を弑した夢を見たので終身獄屋に下された者さへあつた。同感者が尠いから手も足も出ない。到底社會や政治や宗敎や風俗やの實際へは反抗の端を發きかねると思ふので、無論大概は半無意識ながら、比較的迫害の激烈で無い少くとも生命に關するやうな危險のない方面へと鬱憤を向ける。是れがロマンチシズムの由來である。既に眞先き驅けて政治上の革命を經驗してゐて比較的自由な制度を有してをり、隨つて今は保守的な英國にては、純然たる文藝上のロマンチシズムが先づ起り、長い間專制政治の下に呻吟してゐて、切に社會上、政治上の自由に渴してゐた佛蘭西では、英國の自由な政治思想に鼓吹せられて、政治上、社會上、敎育上の革新を憧憬する底の著述が、所謂ロマンチシズムの色彩を帶んで、殆ど右の英國の活動と相前後して起つた所以のものは、蓋し此理に原づくのである。かく最初の活動に於て、佛國のは政治的、社會的臭味を帶んだ實生活觀上卽ち人生觀上のロマンチシズムであつただけに、純然たる文藝上の

ロマンチシズムに名宣りを揚げたのは、他國よりも遙かに後れた。獨逸は英國に次いで活動したが、これは一面は英國に倣つた文藝上のロマンチシズムであり、一面は佛國の政治的、社會的、敎育的の革命思想をも攝取した人生觀上のロマンチシズムでもあつた。といふやうな譯で、ロマンチシズムといふ反抗的精神乃至革新的活動は、之れを分解して見と、其根本義に於ておのづから二大別を爲してゐる。卽ち純文藝的と人生觀的とである、更にくはしく言へば、主として趣味好尙に關する者としてのロマンチシズムと、直接もしくは間接に死生問題に關すべき者としてのロマンチシズム。前者は比較的閑問題であつて幾らかの遊翫的態度と餘裕とを備へ、後者は頭から生眞面目で、多少心持が逼迫してをり、態度が嚴格でもあり、激切でもある。便宜上、前者を不自覺的と呼び、後者を自覺反抗的と名づける。最初に英國で起つたロマンチシズムは無論悉くとは言へないが、先づ主として此不自覺的ロマンチシズムであつた。彼等英國のロマンチシズムは最初は專ら文壇の單調子、文學上の專制政治、擬古文學の陳腐爛熟に堪へかねて自然と反撥し崛起したので、結果は著しき文學世界の革新運動ともなつたのだが、最初は一種の *dilettantism* 好事家的事業たるに過ぎぬ。評家がロマンチシズムの一側面を名づけて好奇的 *curiosity-lauding* といふ所以は玆にある。ところが尙ほ精しく檢べて見ると、此不自覺的ロマンチシズムの內容がまた中々複雜である。同じく好奇といふうちに就いて、單に陳きに厭き新しきに渴する心に基いたものと、現時代、現在地と隔絕した事物

なる爲に面白く感じたものとに分つ必要がある。何となれば此二者は其後のロマンチシズムの發展に影響する所同一でないからである。さて茲に到ると説明が如何にも複雜になつて、迚も此事に關する素養の無い讀者には明解されさうにも無い。是非無く、以下自製の圖表を用ひ、それに由つて如何に不自覺的ロマンチシズムだけでも複雜であるか、また如何にそれが變遷したかを粗々ながら説明を試みて見よう。先づ別紙の圖表を御覽なさい。後の參照の便宜の爲に故と英語を用ひたものゝ、こんな圖表が西洋の著述にあるのでは無い、自分がロマンチシズムに關する著書に依つて得た知識を自分の心覺えまでに並べたに過ぎぬからさう思つて見て下さい。中には到底圖表にて示し難い部分もあるを、多少無理をして編入れた場合もあるから、それらは説明の方で斷る積り。不自覺的の部分は是れだけだが、自覺反抗的の方は此三四倍ともなる程に複雜であるから、彌〻以て圖表の必要を感じたのである。參考した書籍も甚だ乏しく、殊に先年匆卒の製作、誤謬もあらうし、杜撰の箇所も嘸多からうとも思るゝが、尙ほ幾らか諸君の參考用位ゐにはならうと思つて掲げる。

不自覺的ロマンチシズムの傾向は、要するに、十七八世紀の趣味上、風俗上の單調子に嫌き果て、何にてもよし人心を爽快にするものが欲しいと悶え憧るゝ所より起つたとで、見慣れ聞慣れぬものでありさへすれば渴者の水に赴くように相競つて歡迎しようとしたのである。これには政治的の意味は少しも交つてゐない。譬へば今日の我々が舊い文藝に厭いて、殆ど巧拙を論ずるの餘裕も無く、新しくさへあれば爭つて迎へて、やれ、象徴詩の、口語詩の、やれ、浪花節の、やれ活動寫眞のと取換へ引換へ玩賞を試みるのに多少相似た趣きがあつた。名づけて厭陳需奇の精神とでも言はうか？　此精神が自ら三樣に分れて働き、文學者の性癖次第で無論三樣とも兼ね備へた者もあつたが、中には其中の何れかを最も深く代表して其方面から此意味のロマンチシズムの音頭を取つたのもある。(圖表を見よ。)例へば、自然の儘の溫い活きた油畫の如き風景の美を愛好し、之れを詩に寫して、彼のクラッシ、ズム風の冷たい彫刻のやうな、整ひ過ぎ、拵へ過ぎた千篇一律の田園詩や僞善矯飾に充ちた都會生活の清涼劑としようとしたのもある。例へば、彼の「四季の歌」の作者トムソン（一七〇〇生、一七四八死）は尙ほ甚だ微弱ではあつたが、英國ロマンチシズムの先驅であつたには相違ない。之れと同時に虛榮、驕奢、嫉妬、偏執の活修羅を厭惡するの餘り、粗野ながらにも敦厚なる、不整備ながらも質實なる田舍生活、若しくは之れに準ずべき作らず飾らぬ有りのまゝの情趣を憧憬するの傾向が著しくなつた。彼のゴールドスミスの「廢村落」、「遊子」、「ギカー・オブ・ウェークフィールド」の如きも、一面は確かに此傾向に適してゐたが爲に歡迎され、クーパーの「ザ・タスク」の如きも其内容形式ともに十八世紀式とは大いに趣を異にしてゐたので歡迎された。是等は何れも自分で意識して文學の革新を試みたといふでは無く、隨つて表向きにロマンチシストと名づくべき作家ではないのだが、技巧を抑へて自然を揚ぐる新傾向に對して若干の功績を成して

ゐることは事實だ。續いては有名なロバート・バーンス、これも普通謂ふ所のロマンチシストでは無い。併し其自然天眞を寫すことを主として、當人自身は殆ど無意識ながらに、詩壇革新の一音頭取となつた事は爭はれない。

以上、自然な美しさを愛求する大體二樣の傾向、是れが第一には野趣橫溢、如何にも寫生的山水畫と言つたやうな趣味を以てロマンチシズムの一要素とならしめた緣であり、第二には天眞爛漫の as as を以て少くともロマンチシストの感情に伴ふ必要なる特質たらしめた所以である。また是れがロマンチシズムをして後の寫實主義や自然主義に聯絡せしめる所以である。

それから異常な事卽ち普通日常に見聞しないやうな珍奇な事蹟、超自然の事蹟、俗に所謂怪談奇瑞などを愛好するの精神も、第十八世紀の常識本位の自然論や合理主義（ラシヨナリズム）の反動として自然美を愛好するの念と同時に勃興して來た。一寸考へると、自然の美を愛するのと荒唐奇怪な超自然の美を愛するのとでは殆ど相反對するものゝやうにも思はれるが、其實は只もう新奇な美でさへあればよかつたのである故、同一人の文學者にして間〻此三者を兼ね備へてゐるのである。要するに、時代精神の平板と陳腐と爛熟に倦み果てゝゐた結果、何でもかまはず、只もう目ざましく著しく想像を激動さする樣なものが欲しかつたのである。一七六四年に出たホレース・ウォルポールの *Castle of Otranto* などが此怪談脈の著しき代表と言つてもよい。

此怪奇荒唐を愛好する精神が、他の後に說明する遠き時代や遠き國土の灰色がゝつたる風景や風俗や夢の如き事蹟を歡び迎ふる精神と相待ち相助けて、十八世紀末に於ける英國詩壇の大波瀾を捲起した。マックファーソンの『オッシャン』といふ一著が時の英國の詩文人を狂奔せしめたばかりでなく、延いて歐洲大陸の詞林をも震動したのは全く此機運に乘じたからである。狂熱を呪ひ、謬信を嘲り、理智と常識とのみで人生を律し去らうとした十八世紀の輿論も、玆に於てか先づ詩壇の方面から崩れはじめて、不自然、不可思議、不條理の事物が盛んに詩や歌に上るやうになつた。之れを名づけて「不思議の復活」又は「荒唐の復活」といふ。謬信に充ちた中古時代の民謠類乃至中古時代の妖怪譚などは丁度この傾向に適するから蒐集せられ、翻刻せられ擬作せられた。英國ロマンチシズムの一派の驍將と崇めらるゝコールリッヂがウァーズワースと共に有名な『リ、カル・バラッヅ』を公にして詞壇革新軍の宣戰布告をなしたのは一七九八年だが、此篇中の彼れが名作「老水夫（アンシエント　マリナー）」の如きは最も能く此「荒唐の復活」といふ傾向を代表してゐるものである。ウァーズワースは內容も形式も自然で無くては不可（いけぬ）と主張し、コールリッヂは荒唐奇怪を如何にも自然らしく感ぜしめるのが己れの目的だと主張し、それで相提携して革新の旗揚げをした處に、不自覺的な遊戯的なロマンチシズムの本色が歷然としてゐる。彼等は飽迄も文學上だけを本領としてゐる、詩界の陳套を破り其腐爛を掃蕩して淸新の波瀾を揚げさへすれば、それで彼等の志は遂げらるゝのであつた。

手段は彼等の問ふ所で無い。自然と不自然とは彼等の眼目とする點ではなくて一に新と陳とが敵身方の袖標（そでじるし）であつたのである。俚歌、童謠、傳說、神話、お伽話、古き小說等が持囃さるゝやうになつたのも主として此際からである。此荒唐を喜び怪奇を愛するの精神は十九世紀に入つて次第に變遷し、最初は單に話柄其物の奇を喜ぶに過ぎなかつたものが、中ごろに至つては專ら其情趣に重きを置くことゝもなり、後には何等か意味深き象徵を其話柄中に發見し若しくは寓托することに感興を覺ゆるに至つたなど、作者により、時代により、大ぶ態度を異にしたが、兎に角此精神が十九世紀も餘程末つかたまでつゞいたことは事實である。話柄其物に重きを置いた怪談はといへば、獨のチーク（一七七三生、一八五三死）の仙話、同じく獨のグリム（一七八五生、一八六三死）の童話のたぐひがそれ。又主として情趣の方面から俚歌、民謠乃至神話、古傳說の怪奇を取り入れたのは英のバーシーが集めた古謠集、獨のビュルゲル（一七四七生、一七九四死）の作の「レノール」、コールリッチの「老水夫」、「クリスタベル」、其他算ふるに遑が無い。象徵的ともいふべきは、これにも幾多の派分（わけ）があるが、おしならして言へば、獨のゲーテの『ファウスト』も其一、テニスンの作、例へば「シャロットの妖姫」の如きがそれ。ロゼッチやモリスやスキンバーンの作中にも其例があれば、ワグネルやイブセンや、ずつと降つてはハウプトマンの作などにもそれがある。かう見て來ると、ロマンチシズムの系圖の絲は時に太くなり、時に細くなり、又强くもなり又弱くもなつて、今

日に至るまで尙ほ依然としてつながつてゐると言つてよい。

斯樣に一方に於て自然的と異常的と超自然的との三樣の要素が歡迎されて、新詩壇を賑はしつゝあつた時に當り、同時に他方に於て好古、觀風の感興とも名づくべき者が盛んになつた。是れは十八世紀以來世の文明がおひ〳〵に進み各國との交通が比較的便宜になり、且つ頻繁にもなつたところから自然に起つた現象であるが、最初十八世紀流の純然たる好事家風の古實調べなどが導火であつた。前に言つたホレース・ウォルポールのやうな貴族的な好事家、半分道樂に古い文學や史蹟を考究し、言はゞ「通」を言ひたさに名所古蹟へ漫遊を試みるといふやうな連中が音頭取。つまり、是れも畢竟は現代の平板と陳套と無聊とに饜き果てたところから何等か變つた珍らしい物をと渴望するの餘りに始まつたとで、是れ將た圖表中に示した通り、自ら二方面に働いてゐる。一は主に現代とは隔絕してゐる過去の時代、就中歐洲の中古時代、ルネサンス以前の風俗や事蹟中に就いて新奇な現象を求め、他は專ら現住地とは掛離れてゐる外國、例へば北歐諸國とか、南方は伊太利、希臘とか、乃至東洋卽ち土耳古、ペルシャ、進んでは印度、支那、ずつと離れては日本といふやうな風に、次第々々に手を延して世界中に向つて新奇なものを搜し求めた。中に就いて中古時代の史蹟や風俗を回顧追懷して之れを現代の無趣味なのに比べて、宛然（さながら）理想的に美なものであつたかのやうに想像し、ゴッス風俗の純樸、貴族生活の富麗、騎士制度の詩趣、或ひは枯禪宗派（モナスチシズム）の山院生活、或ひ

は羅馬正統宗本山（ローマカトリック）の莊嚴などを古詩や古小説（ロマンス）が誇張して寫したまゝ又はそれ以上に受入れて、それを白日（まひる）の夢に見て、叶ふべくんば再びその如き世の中となすよしもがなとばかりに憧憬したのが時の詩人や文學者の心的態度。ロマンスその儘を喜んだればこそロマンチシズムといひ、中古を崇拜したればこそロマンチシズムの事を或ひは呼んでメヂーヴリズム（中古主義）などゝも言ふのである。中世崇拜の一代の傾向は蓋し斯くの如くして呼起されたのである。彼の英のエドモンド・バークが佛國革命の當時に長歎して「あゝさりながら騎士道の世は既に逝（さ）りぬ。詭辯家、理財家、計算家のみの時代となりにけり。歐洲の榮光は長へ（とこしな）に滅び了んぬ」云々と言つたのも畢竟此中古時代追慕尊崇の聲たるに外ならぬ。又彼の佛のスタエル女史が其著『ゼルマニー』の中で「あゝ古代の高貴なる元氣は失はれたり。現代には、噫、信（フエース）も無し、又愛（ラヴ）も無し」と歎じたのも同じく是れ過去を慕ふの叫びである。尤も此中古崇拜の傾向に少くとも二大別があつたと思ふ。一は純然たる詩人的もしくは觀賞的態度よりする者、卽ち中古の事蹟や風物を單に詩材として取扱ふ者。二は多少道德的の又は宗教的の傾向を加味して單に追懷思慕して之れを其吟咏作するに止まらず、叶ふべくんば中古の風俗習慣の幾分を實際に引戻し來つて現代の缺陷を補充したし、少くとも自分だけは之れを實現したしと企圖せんとする程の度合に達したる者。前者の例は主として英國のロマンチシズムに見るべく、例へばキーツ（一七九五生、一八二一死）の諸作、ロゼッチ（一八二八生、一八八二

死）の諸作、古くはウォルター・スコット（一七七一生、一八三二死）の詩及び小説がそれ。中古のロマンスが爭つて玩讀せられ、ロマンス式の作が一世を風靡したのは此時代。シェークスピヤ熱の猛烈となつたも此時代。又後者の例は專ら獨逸のロマンチシストに於て之れを見るべく、シュレーゲルやチイクやノーファリスやヴェルネルがそれ。尙ほ此實踐的ロマンチシズムに就いては後に自覺反抗的のロマンチシズムを語る折に再說する積りであるが、此傾向の最も著しい結果は、放縱に墜き懷疑に憊れて却つて一種の信仰に入り、中古時代其儘の舊宗教を奉ぜんとするに至つたことである。彼の英國のカーヂナル・ニューマン（一八〇一生、一八九〇死）が音頭を取つたオックスフォード派の宗教活動の如きも、遠く其源流に遡れば、隱然として此時代精神から溢れ出でたのだと言つてよいであらう。

翻つて他の遠隔地方の風俗や景勝に對する感興に重きを置いたものは如何（どう）なつたかといふに、これはまた是れで四方八面に發展した。先づ北歐に關するものでは、彼のケルト民族の中古風俗を寫したマックファーソンの『オッシャン』が音頭取であつたことは前にも言つたが、それが第一の刺戟となつて、バイロン（一七八八生、一八二四死）の『チャイルド・ハロルド漫遊記』其他が出來、佛のロマンチシズムの太祖と呼ばるゝシャトーブリヤン（一七六八生、一八四八死）の『北米遊記』の如きも出で、人間に關する知識、見聞が加はるにつれて十八世紀風の偏狹な鄕土思想は大きに減

じ、少くとも詩人文學者の頭だけは萬國一如（コスモポリタニズム）觀に住することゝなり、其觀念がまた丁度此時追ひ追ひ盛んになりかゝつてゐた自由平等の思想や個人本位の主義、感情と相助長して、次第に自覺反抗的のロマンチシズムを激勵した。蓋しコスモポリタニズムといふ者は十八世紀の中頃から萌芽してゐたには相違ないが、ロマンチシズムの全盛期に至つてはじめて立派に生長し、枝を張り葉を茂らせ花を着け實を結んだと言つてよい。西洋詩人が極東（日本、支那等）の風俗研究に心を注いだのも此傾向の自然の成行であつたのである。尙ほ玆に一の面白き現象と見るべきは新尙古主義（ネオ・クラッシ、ズム）の興隆である。本來ロマンチシズムは尙古主義（クラッシ、ズム）の反動として起つた者であるから、ふと考へると、到底尙古主義とは兩立すべき者で無い樣にも思はれるが、其實、ロマンチシズム勃興の當時からして新尙古（ネオ・クラッシ、ズム）主義の端緒は發かれつゝあつたと言つてよい。按ふに十八世紀の尙古主義は、古文學と言つても、何れかといへば希臘よりも拉典に傾き、且つアリストートルの詩論を尊奉しながらも勝手な主觀的な解釋を下して大きに本義に遠ざかつてゐた氣味。之れに對して眞面目な新研究が起つたのである。英に於ては彼のグレーやクーパーの古文學研鑽が明かにそれ。彼等は一面から言へば十八世紀風の尙古主義に平かならずして新研究を希臘古文學に試みた手合であると同時に、他面はロマンチシズムの殆ど自らは豫期せざる先驅でもあつたのだ。獨に於ても彼のギンケルマンやヘルデルやレッシングなどがそれ。レッシングは曰はく「アリストートルの詩論は一にアリストートルに依據して解釋せざるべからず」と。是れ彼の十八世紀の佛蘭西學者らが唱へた間違つた尙古主義を破らん爲に揚げた鬨聲であつたのである。後にゲーテやシルレルが一種の新しい擬古文學を試みたのも、畢竟ずるに此新尙古主義、更に正當に言へば希臘主義の所產たるに外ならぬ。猶の名を附ける落し話と同じやうに、斯うでもないあゝでもないと廻り廻つた結果、又もや希臘文學へ戻つて來るところが歐洲文藝の特質といはゞ言ふべく、玆に深い〳〵面白味がある。ルネサンスの歷史と對照して一考せられたい。

さて此新尙古主義卽ち希臘主義も、細かに調べて見ると、凡そ三樣程に分れる。一を文藝的（又は美學的）とも名づくべく、二を人生觀的（又は實踐的）とも呼ぶべく、三を歷史的とも呼ぶべきである。文藝的と言ふのは單に文藝の方面より觀て、古代希臘のは、美を觀賞乃至製作する上に、後代のとは斯樣々々云々の相違があつた、と主として學究的又は批評家的に種々の古製作を證として評論記述すること彼のギンケルマンやヘルデルやレッシング一流の如きをいふ。實踐的とは古代希臘人の人生觀に深く同感するの餘り何卒之れを今の世に實現したいとまで追慕し憧憬するに至るを言ふ。此氣脈は其最初にはタカヾ詩歌評論の上に發露せらるゝに止まるか、又は其人の書齋內位ゐに實現せらるゝに過ぎなかつたものだが、十九世紀の末に近づくに及んでは、追々大膽に發表せらることとなつた。併しこれは自覺反抗的ロマンチシズムの一部として說くべきものであるから今は省

く。それから歴史的といふのは史家的立脚地から廣く希臘や羅馬の文明や生活狀態を研究するに止まる者を言ふ。隨つてこれをロマンチシズムの中に攝するは不當のやうであるが、古代文明史の研究が盛んになつたのは、要するにロマンチシズムの餘波もしくは影響には相違ないから、それで故と列記しておくのである。

自覺反抗のロマンチシズム

感情本位と智見本位——感情本位の二大別

前に擧げた不自覺的ロマンチシズムの、其實は同じく反抗の精神を藏しながらも其表面に現れたところには何となく餘裕があつて多少遊玩的であるのとは違ひ、自覺反抗的と概稱する部門に屬するロマンチシズムは、其派分の色々なるに拘らず、何れも多少慷慨の氣を含んで、喧嘩腰で、言ふことに多少歴とした主義、根柢があり、隨つて偏屈でもあり、極端にも流れ易く、破壞的でもある。個人の解放を目的としたロマンチシズムの本願から言へば此方が本領であるべきだから、そこで之れを自覺的と名づけたのである。苟も此中に屬する者も其度合にこそ相違はあれ、何れも比較的眞面目である。皆多少不平である。狹隘頑冥な死法格や、虚儀式や、愚傳説や、俗慣例や、惡好尚や、

廢典據等に對して何等かの憤懣、幾分の怨嗟を感じてゐぬものは無い。彼等は是等のものに對して挑戰の態度を取り、種々の方面から、種々の口實の下に謀叛の旗擧をしたのだと評してよい。他の不自覺派が半無意識の間に或ひは半遊玩的に實行しつゝあつた事を、自覺的に且つ眞面目に口に筆に主張しつゝ實行した。何事に關しても讓歩や調和を排斥し、あらゆる在來の獨斷説を撥無し、出來るだけ自我を押通さうと試みたのである。要するに社會に對する個人の自立、輿論に對する個我の主張がロマンチシズムの本領である。普通に謂ふ所の狹義のロマンチシズムは主として文藝に限らるゝものゆゑ、予が茲に説くが如く廣いものでないのだが、斯く押廣めて説かぬ限りはロマンチシズムの本意を明かにすることの難いばかりか、文學思潮の源流を明かにするに都合がわるい。故に予はロマンチシズムを最も廣い意味に解し、ゲーテ、シルレルらをも其相應する分析條下に取入れ、更に彼のルッソーなどの活動をさへも同じ主意によつて取り入れた。其理は下に説明する。

此自覺反抗の精神におのづから二大側面がある。一は主として感情の上に立脚して此精神の發揮に力めたもの、他は專ら智見上より此精神の鼓吹に盡力したもの。素より此二側面は多少相纏綿して、言はゞ裏と表との如くなつてゐるものゆゑ、圖表に示したやうに全然引離されてゐるもので無いことは勿論である、併し大體の上から見ると、先づこんな區別がある。又先後の順序から言ふと、感情の方が先で智見は概して其感情を是認（ジヤスチファイ）するために追ひ〳〵附加せられたものと見てよろ

しい。（此見解の大體に於て正當なる由は後に智見本位の諸派を説明するに及んで明かになるだらうと思ふ。）それこれ先づ感情本位の自覺派から取調をはじめる。

ところが此感情本位にもまた自ら二大別がある。一は消極的で、他は積極的である。二者共に人爲の加はり過ぎた、不自然、不公平な、偏頗な、窮屈な現實の社會生活を厭はしく思ふといふ點に於ては一致するが、其現實に對する態度は大分相逕庭してゐる。積極派は侵略的である、進んで現社會の諸種の惡風を掃蕩せんと企てる。彼等は在來諸制度の缺陷を指摘して其革新を督促する、經世家的、男性的もしくは實際家的の傾向を帶ぶ。それに對して消極派は文學的でもあり、退嬰的でもあり、女性的である。矯僞で塊つた現社會の醜さを見るにつけても自然の美しさが意識せられ、あゝこんな五月蠅い醜惡な浮世の浪に浮沈して苦みもがいてゐるよりは、長閑な靜寂な山林などに身を避けて花鳥風月を友として心安く世を送らうといつたやうな心持。卽ち西行や長明や芭蕉なぞと多少相通ふ所の心持が少くとも其心の六七分を占めてゐるのである。兎も角も進取的ではなく隱遁的であつて、何とかして現實の醜を見ざるやう、苦を忘るゝやうと（或ひは意識して、或ひは半無意識にして）工夫しつゝある多感多情の徒を謂ふ。中には最初は積極的であつたが、後に疲れて消極的になつたといふのも多くある。截然として全く別の物だと思ふと間違ふから、注意を乞ふ。

さて積極派の方には通例はロマンチシズムの中に加へない社會的傾向のをも取入れて置いたから、説明がおのづから複雜とならざるを得ない。かた〳〵先づ消極派の方を主として説明することにしよう。

圖表に示しておいた通り、細かに調べて見ると、消極派にはａｂｃの三階があると思ふ。三者とも其作物もしくは言論等に現れた結果は同じやうであるが、其動機（モーチーヴ）に多少の相違を含んでゐる。先づａは現在の社會を厭惡するといふよりは、寧ろ自然の美を愛する念が切なるが爲に、所謂ロマンチシズム的傾向を現したのである。例へば英の十八世紀後半の新派詩人、ヤングだとかトムソンだとかグレーだとかゞそれだ。彼等の本來は都人士である。必ずしも都會生活を厭惡するといふ程でも無いが、紅塵萬丈に倦み果てゝ偶〻閑を得れば廣々とした郊外に散策する、或ひはスコットランドとか、遠くはスキツルランドとかに漫遊を試みる。最初は前回に語つた不自覺派の態度で半以上遊玩的でもあつたのだが、いつしか自然の大なる美に打たれて現實生活の矯僞を自覺するに至つたのである。自然美の讃頌はロマンチシズムの附物ではあるが、それを逸早く試みたはヤハリ英國の詩人で、ウォルポールやグレーのアルプス旅行は其卒先であらう。彼等は盛んに幽邃や荒涼やの美を稱揚して漫遊の興を鼓吹し、所謂煙霞癖 *Love of travelling* を招致した。こゝまでは不自覺派と密接してゐる。然るに此煙霞癖は忽ち一轉して都會生活や應接室や倶樂部交際の虛僞や窮屈を厭惡するの心ともなり、長閑な平和な田園生活を推奬するの心とも變つた。彼の擬古派（クラシック）の泰斗と仰がれて

ゐたアレクサンダー・ポープすら、晩年には其トキッゲンハムの別墅に、我々日本人から見れば俗惡としか思はれぬ一種の人工的洞窟(グロットー)を設け、これによつて自然美を玩賞せんとしてゐたのによつても、其頃自然美愛玩の傾向の如何に著しかつたかゞ察せられる。

以上は不自覺的の態度と纏綿したのを言つたのだが、最初より十分自覺して自然を愛し、隨つて現世を厭惡する念が盛んであり、そこで後者が前者を助長して益〻自然美に憧(あこが)るゝやうにもなつたといふ連中がある。佛のシャトーブリヤン、英のバイロン、乃至シェレー、ウァーヅワース、アーノルド、獨のチイク、ノーファリス等皆多少これに關係がある。但し其國々の狀況と其國民性とによつて其作や行動の上に現れた結果は一樣で無い。就中獨逸のロマンチシズムの態度は格別である。彼等は自然を愛するといつても、我々日本人や古代希臘人などが山水花鳥其他に對するのとは違つて、快活的でなく、受動的、幽鬱的であつて、言はゞ印度人式に一種深沈な厭世趣味を含んでゐる。彼等は自然美に對すると、概して萬有神敎的の瞑想に耽るのが例である。獨逸人は後に講ずる智見的ロマンチシズムと相纏綿してそこに其本領を据ゑてゐるのだから、如何(どう)しても哲學的、神祕的な傾向がある。彼のシェリングの哲學は英のウァーヅワースの自然美崇拜に大分の影響を及ぼしたといふが、それが卽ち萬有神敎的である。獨の最も名高いロマンチシストの一人たるノーファリスの自然觀なども同じたぐひの一例である。同じく獨のチイクが殺風景な窮屈なベルリンに住んで

ゐて頻りに自由な山水美にあこがれ、シェークスピヤの作によつて其ウォーリック州の景物を想像し、嘸かし理想的な風光絶佳の地であらうと思ひあこがれ、後に旅行して實地を見て大きに失望したといふことだが、これなぞも餘り主觀的に空想的に瞑想してゐた爲である。

次ぎに又同じく自然を愛すといふものゝ、山水や田園の風光を愛するよりも、寧ろ未開時代の生活卽ち原始的社會の單純簡樸な、作らず拵へぬ氣樂な生活を愛するのが主となつたのがある。これは言ふまでも無く現社會の繁文褥禮を厭ふ心から起つたことである。虛儀や技工や僞善やを惡む餘りである。古今東西に例の多い非文明論 (*Obscurdism* は皆是れだ。後に語るルッソーの「自然に復れ」といふ論も之れと源泉を同じうしてゐる。但しルッソーのは積極派に屬するものであるが、茲に擧げたのは消極的なので、東洋で假に類を求むれば陶淵明風の超然主義に住するものが先づそれ。英のウァーヅワースなどはaとbとを兼ねたものと言へよう。獨逸のロマンチシスト中には此中に攝すべきものが多い。倫理上から言ふと、其或者は獨善自養といふのに近く、性質上から言ふと保守退嬰的ともいふべく、或ひは貶して疎懶懦弱とも言へる。つまり世間に對しては頗る引込根性なので、進んで世間と健鬪して何等か根本的な改革を企てゝ見ようなどいふ勇氣も利他心も無い。畢竟自分一個の安立と滿足とを得ようとするのが第一であるのだ。獨のロマンチシストはbの階級に屬すると同時に多くはcの階級にも屬する。蓋し漠然たる理想の美に憧憬(あこが)れて現實と隔たらんとする

の傾向は、特に力を入れて獨のロマンチシズムの表章だと言つてよい。英佛のロマンチシストにも多少相通ふ趣きが無いとは無いが、到底其深さや濃さに於て獨逸のそれに及ぶことで無い。よく英のシェレーと獨のノーファリスとを共に空漠たる理想にあこがれたロマンチシストだとして比較をする人があるが、國民性の然らしむる所か、其實は大分の相違らしい。さてかく理想にあこがるゝは何から起つたとかと言ふに、無論是れも現實生活の無趣味と平凡と單調子と陳腐とに饜き疲れた結果である。蓋し人間は到底現實に滿足し得るもので無い。其萬靈に秀づる點は其長へに理想を追ひ幽玄を求めて息まない所にあるとも云へる。思索、想像に長じた日耳曼人種だけに最も著しく此慾求を體現したのであらう。況んや俗惡な十八世紀式の現實は堪へられたもので無い。以上は褒めて謂ふのである。併し又其弱所に就いて貶して評すると、とかく多感多情に生れ附いた新代の青年は餘りに感じ易く聰明過ぎる。それが爲に克己力は甚だ弱く、先きの先きまでが見え透くので、臆病にもなり、到底廣く長く社會と健闘するといふ程の勇氣が無い。かういふ詩人肌に取つては法律や習慣や輿論や制度で鐵棚を築き廻らしたやうな此現實社會ほど窮屈な狹隘な煩瑣な處は無く、何とかしてそれとは全く反對な、無限に廣い、無限に自由な別世界が欲しいといふ感じが起らざるを得無い。所が、凡そ人間の五官に觸るゝ限りのものは、少しく立入つて考へて見れば有限ならざるものは無い。不完全ならざるものは無い。而して獨のロマンチシストは本來が瞑想的、哲學者的であ

る爲に必ず立入つて考へはじめる。そこで總じて物質的な、現實的なものを嫌ふといふことがはじまる。凡そ五官に上るもの、特に觸接すべきもの卽ち *tangible* なものを粗とか野とか俗とか名づけて賤しむやうになる。定形あるものや明晰なものや彫像式のものを斥けた。彫像式を排するにしても、普通のロマンチシストのやうに單に擬古的(クラッシック)だからと單純には言つてのけない。恐らく最初は單に感情的にさう感じたのであらうが、後には鹿爪らしく有限だから不可(いけな)いと妙に理窟を附加し來る所、是れが智見的な獨のロマンチシズムの特色である。すなはち彼等は及ぶべきだけ定限の無いものを求めた。何故に定限の無いものを求めたか？　定限さへ無ければ自由に空想を浮遊せしむることが出來るからである。彼等は常に空靈縹渺として模糊朦朧として餘韻の嫋々として盡きざるが如き物を愛した。一言に言へば彫像式の反對たる油繪式の明暗相半したやうな物を好んだ。無際限な物を見ては深邃と喜び、定形無き樣なものを見ては神祕と讃した。英のコールリッヂは英國人としては比較的獨逸脈の思想に富んだ方であるが、幼時より雲を眺めて恍惚と時を消することを好んだ。而して是れは殆ど大抵の詩人肌、殊にロマンチシスト肌の詩人の好くことであるが、其然る所以は甚だ覩易い。『ハムレット』中のポロニヤスでは無いが、雲はもと定形無きものゆゑ、駱駝と思へば駱駝とも見え、鼬(いたち)鼠と思へばさうも見えぬことは無い。此自由自在に空想のまゝに取扱へる所がロマンチシストの氣に入る所以である。つまり彼等の最も好む所は長へに醒むることの無い夢のやうな

ものがそれ。所謂夢想家、ギジョナリストである。詩人の本領から言へば之れに上越すものは無からう。英のスペンサーを「詩人の詩人」などゝ褒めるのも此夢想家風の味ひを稱するのである。キーツやロゼッチも此ギジョナリーな點で激賞される。併しながらそれは詩人としてのこと、現實と相交渉するものとして見れば、彼等ロマンチシストは純然たる夢想家(ドリーマー)である。空漠たる目的の爲に何等確乎たる手段を講じもせずして只管(ひたすら)に願欲し仰望し懊惱し煩悶するといふが彼等の習ひである。醇乎たる感情主義(エモーショナリズム)で觀念も眞正の意味で言へば伴つては居ぬゆゑ、普通彼等をアイデヤリスト(理想家)と言ふのは僭に近い。空想家と譯した方が當然である。欲望は熾んながら何等活動的な意志(ウイル)の後援もない、ほんの漠然たる取締りの無い欲望たるに過ぎぬ。覘ふ的は無いのでは無いが、その的が前に言つた雲のやうに無定形でアヤフヤなものだから、無いと言へば無いやうなもの、且つは之れに射中てんとすれば如何したらよいかといふ段になると、本より何等の工夫も方案もない。ノーファリスの有名な作中の「青い花」*the flower* を尋ねて目當(めあて)も無く諸國を遍歴するといふ比喩物語は最もよく彼等ロマンチシストの心狀態を標示してゐる。「青い花」とは決して現實に於て見出し得べからざる理想其物を指したのであらう。蓋し彼等ロマンチシストは現實の情態に不滿の餘り何か之れに代はるべきものが欲しいものと煩悶し焦慮はするものゝ、中々個人の小智見を以てして急に絶好な考案も浮ばない、いくら立直して見ても氣に入らぬ、何を見ても、何を經驗して見ても

面白くない。いや、實現して見るとすぐ厭いて詰らなくなる、慾に限りが無いからである。そこへ以て來て何か家庭に又は處世上に實際的の困難や心配や苦痛が伴つて來た時分には、精神上の不安が更に幾倍となり、現實の厭はしさが激しくなり、怖ろしい苦悶を覺える。「惱悅」として永く懷ふ、意荒忽として流蕩し、心愁悽として增、悲しむ」とある。此「惱悅」とか「荒忽」とか「流蕩」とか「愁悽」とかいふ字面は頗るよく彼等の情調(ムード)を表してゐると思ふ。我が國に於ても日清戰爭の前後から新代國民の精神上に著しい動搖を呼起して來た爲、一は必然の順序として、二には西洋文學の感化影響で、幾分か此意味に近いロマンチシズムの思潮が打寄せた。そこで「憧憬」といふ熟字や「惱悅」といふ字面が一時盛んに用ひられたものだ、尤も時には「憧憬」を衒ふといふ傾向が無いでも無いから一概に受入れる譯にはゆかぬが。自然主義や象徵主義の呼聲の高いにも拘らず日本の文學界の底には今尙ほロマンチシズムの思潮が幅廣く流れてゐると言つてよい。併しながら更に深く考へると、前にもいつた通り、現實に饜き足らずして別に理想の天地を要求するといふとは人間本具の性であるから、名義や形式こそいろ〳〵に變れ、いつまで經つても根が絶えることは無く、又絶やすことが出來ぬ。外國の文藝界にも今尙ほロマンチシズムの氣脈が嚴として存在してゐることは爭はれない。

ロマンチシストは現實を厭惡するから世間と交際することを好まぬ。ほんの一二の同好と語る

か、さなくは引籠つて沈思瞑想する。隨つて見識は日〻に進んでも實際の經驗は依然として甚だ乏しく、それがため目ばかり高くなつて、却つて臆病になり、敢然勇往するの意氣は鈍る。で彌〻迂濶にもなれば狷介にもなり、喜びも之れを分つの友が無い故に消え易く、悲みや苦しみも之れをまぎらす便りがないゆゑ募り易く、神經は益〻過勞し意志は倍〻弱り、身體の活動を怠るがために健康も衰へるといふやうな運命が十中八九。「優柔懦弱」とか「薄志弱行」とか「智餘りありて勇無し」とかいふことがロマンチシストと同意義に解せられんとするに至つたのは是非もない結果であつた。沙翁のハムレットは取りも直さず獨逸人の象徴である。"*Hamlet is Germany*" とまで言つたのも一理あることである。

その甚しきに至つては彼のノーファリスが唱へた如く、人は須からく植物の如く無念無慾にして靜寂なるを理想とすべきもの、いや、植物さへも日光を求めて向上せんとする傾向があるのが理想的でないとまで極論して絶對無爲を奬説するに及んだ。彼の神祕を喜び、象徴を愛し、夜や、闇や、夢や、薄明りや、病や死や自殺や情死を喜んだのも同じ氣脈から流れ出てゐるのである。彼等の音樂を深く愛したのも、其實、音樂がよく解つてゐたのでは無く、寧ろ音樂はあの通り漠然たる內容のものゆゑ、聽く者の心々に如何やうな主觀的解釋をも容れることが出來る、それが彼等の音樂を持囃した主なる理由であつたらしい。此邊の消息に關しては例のブランデスの名著『十九世紀文學

思潮』中の「日耳曼に於けるロマンチシズム」が最も多趣味で且つ記述が豐富である。

積極的に感情的な自覺反抗とは如何いふ意味かと言ふに、他の消極的に感情的なロマンチストのやうに專ら無爲とか退隱とか言ふやうな消極主義に住することをせんで、寧ろ進んで自他のために感じた通り思つた通りを表白して氣に入らぬ現實と戰ひ、或ひは自分の主張を大膽に實行し、或ひは社會に向つて宣傳するといふやうな態度を取るのを言ふ。畢竟彼の頭から感情を輕蔑し常識的の理窟ばかりを重んじた十八世紀の俗論に反動したのである。排理窟主義と名附けてもよい。似て非なる理論の取るに足らぬことを説破して、拔くべからざる人間本具の情慾 (*Senses* や *Passion*) のために氣焰を吐き、山積せる冷灰を顚覆して殘つた燼に柴薪を加へ、再び狂熱の光炎を萬丈の高きに揚げようと試みたのだと評すべきだ。言ひ換へれば、十七八世紀が智に片荷づつてゐた反動で今度は情に片荷づつたのである。かう言つたら、ロマンチシズム全體が情に片荷づつた活動だと批を入れる人があるかも知れんが、これは分析上の都合で、細かに分ければ特に如斯部門が出來るのである。

さて、これにおのづから社會的と個人的との別がある。個人的と名附けた方が正當に謂ふロマンチシストで、社會的といふのは、通例はロマンチシズムの內へ入れては無い、併しロマンチシズム

を廣義に解する以上は、かやうに分類するのが自分は正當であらうと思ふ。

社會的といふのは、或ひは利他的と稱してもよい、自分一個の爲よりも社會全體のためといふ愛他心から出てゐる。少くとも當人はさう主張してゐる。社會本位とか利世安民主義とか言ふべきである。これは十八世紀の中頃に英國で發源し、最初は穩和な矯正や改善を目的とし、社會上に多少有益な活動をしたが、おひ〳〵年を經て嘲弄的の意味に解せらるゝ感情主義（センチメンタリズム）に流れかけた時分に佛蘭西に傳はり、時勢に激成せられて、漸く破壞的の調子を帶ぶやうにもなり、彼のルッソーの極端な非文明論ともなり、民約論ともなり、感情本位論、自然主義ともなり、トゞのつまりは純然たるロマンチシスト的の個人本位の情慾主義ともなつたのである。源泉と末流とでは全く違つたものゝやうになつたが、共に十八世紀の理智本位に反動したものたるや明かである。

英國で最初に起つた感情主義は、純文學には何の關係も無い、ホッブス一派の功利說、利己說に反動した博愛主義で、世上の弱者や薄幸者を憫んで枉屈を救ひ專横を制しようための運動に外ならなんだ。彼のウェズレーやフィットフィールドやがメソヂスト宗派を興し、ジョン・ハワードが監獄の改良に死力を盡し、ウィルバーフォースやクラークソンやピットなどが奴隷貿易の廢止に熱衷し、乃至動物虐待禁止の聲がかまびすしくなつたなどは何れも同じ感情主義の產み出した所である。これまでは純文學には關係はない。利己一點張の、上流本位の、何事も小理窟で固めた十八世紀の反動で、

かく情を第一にして下等社會を憐む同情主義が勢力を得て來たので、自然それが純文學にも流れ入つた。リチャードソンやスターンやゴールドスミッスやバーンス等の作中に見える所が卽ちそれである。彼等の作を含味すると後のロマンチシズムの泉源であることが思はれると同時に、右の利他脈の感情主義が混流してゐることを見のがす譯にはゆかぬ。但し是等文學者の作に見ゆる所の感情は、ともすれば婦人の仁的で、瑣屑で、薄弱で、愛他の假面を被つた利己心で、病的であることを免れない。蓋し此一派は本來が英國的の保守脈、漸進脈を具へてゐるのである。積極的ではあるが破壞的ではなく、改新的ではあるが革命的といふほどではない。文學に現はれた所は尙ほ更である。然るにそれが十九世紀に近づくにつれてだん〳〵革命的にかぶれて來た。而して其系脈は降つてバイロン、シェレーは勿論、後の社會主義的傾向を帶んだ總てのロマンチシストに傳はつてゐる。（十八世紀の英國思潮に關してはレスリー・スチーブン氏の『十八世紀に於ける英國思想』三卷を見よ。）

次ぎに根本的と名附けたのは主として佛蘭西に發源したのを指すので、ルッソーの「自然に復れ」といふ說などがそれ。ルッソーの說がロックをはじめ其他の英國學者や小說家に負ふ所の少なくないのは爭ふべからざる事で、前の一派と密かに相聯關してゐるとは勿論だが、其國民性と國情の然らしむる所、彼れのは非常に激烈で、破壞的と言はぬまでも革命的、根本的である。ルッソー

を「ロマンチシズムの父」といふのは其革命思潮の大源を開いたからのことであらう。彼れの說は主として個人が情慾（パッション）の權利を主張するに在る。名附けて尙情主義といつてもよい。是れ將た詮ずる所は十七八世紀の虛儀や矯飾や、僞信や僞謹愼や僞謙遜やに對する反動に外ならぬ。ルッソーの名著『エミール』は此主張を小說的に具體にしたものである。彼れは理窟を抑へて感情を揚げ、人爲を貶して自然を褒め、儀式や慣例を排斥して天眞爛漫の重んずべきを說き、何事も本來の性、自然のまゝの感情にもとづくのがよいと切論した。政治でも社會でも敎育でも皆さうなうてはならぬと唱へた。按ふにロマンチシストの多くが其初期に於て共和政治などを口にしたのは、言はゞ前代からの遺習なので、その實はコスモポリタンで、純然たる個人主義である。（ルッソーとロマンチシズムとの關係に關しては例のブランデスの外に、*Pellissier* 氏の *The Literary Movements in France during the 19th Century* をも見よ。）ペスタロヂなどは專ら敎育の方面へ此說を取入れ、ゲーテやウアーヅワースやシルレルは主として文學の方面へ彼れの說を取入れたのである。ルッソーみづからは慥かに經綸家を以て任じてゐたので所謂ロマンチシストでは無かつたのだが、其因緣からいふと立派なロマンチシストと言ふべきである。さて自然のまゝの感情の發露を喜ぶ此傾向は、彼の英國的の玩賞的、好古的なるロマンチック・スピリットと合流するに及んでは俚歌俗謠の愛翫となり、眞率樸實の稱揚となり、技巧の排斥となり、直情逕行の讃美となり、嘲世罵俗の流行となり、不羈放

縱を褒め豪放磊落を稱する聲となり、他のロマンチシズムの諸傾向と相響應して竟に一代に瀰漫するの大思潮となつた。詰り、個人的と特記しておいた積極的感情主義はルッソーの自然主義（復初主義）の變態である。くはしくいへばルッソーの眼中には每に社會があり國家があつたのだが、ロマンチシストの眼中には主として自分があるので、社會とか國家とかは殆ど無い。二者の別は一に是れにあると言つてよい。

ロマンチシズムの本來は自由を欲する個人の自覺に原因したものだといふことは既に一通り述べて置いたが、人間の性は妙なもので、自分は斯うと信じても自分以外の多勢が又は自分よりも以上の者が同樣に信じてくれねば、若しくは情では斯うと思ひ定めても、理智で十分に說明が附かぬうちは、何となく心元ないやうにも思つて、兎角思ひ切つた働きが出來かねる習ひである。ロマンチシストも卽ちそれで、虛儀虛式の俗生活を厭惡するの餘り、天眞自由の生活に就きたいと思ふ心は切りでもあり、どう考へてもその方が正しいやうに感じながらも、最初は之れを行ふに當つて十分の力のある主張といふか、口實といふか、身方といふか、後援（うしろだて）といふか、詰り、捉（つかま）り所が無いやうな氣がして、眞劍勝負の腰がきまらぬ氣味であつた。英國初期のロマンチシストが多少遊玩的態度に流れたのも其一因はこゝにあつたかとも思はれる。ロマンチシストの多くが兎角退隱を好み無爲

を欲し消極的態度に任ぜんとするのは詩人肌の自然とは言ふものゝ、時としては社會を敵手として公々然と論ずるに足る程の積極的の後援なり主義なりが頭に無いが爲であることもある。詩人肌はまづは氣が弱い。あらゆる典例や權力は眼中に無い、一切のオーソリチーを撥無すると蔭では高言しても、いざ眞劍勝負となると何か大きな楯が欲しい、在來のあらゆるオーソリチーを粉碎にするに足るやうな一大機關砲が欲しいと思ふ。若しくは何か御本尊、明白にいへば、何かイズムがほしい。組織立つた說が欲しい。偶像破壞を主張する手合がお神輿を擔ぐのは一寸矛盾のやうだが、古往今來偶像破壞を唱へる手合に限り兎角お神輿を擔ぐから面白い。ロマンチシズム勃興の際に於てはルッソーは隱然として此待設けられてゐた新しい御本尊の氣味であつた。

ロマンチシズムはルッソーの感情論、自然主義を得て次第に其地盤を固めたのだと評してよい。ウァーヅワースがルッソーに私淑してゐたことは明白な事實であるが、ゲーテの彼れに負ふ所の多いことも事實である。無論ロマンチシズムの土臺石はルッソー一流の說のみでは無い。其後、年を重ぬるにつれて、立派な哲學者中にもロマンチシズムの流れを酌む手合が幾人となく輩出し、それらが得意の論理頭で種々の尤らしい理窟を築き上げ、彼等文學者連にそれ〴〵コンヂクションを提供したので、そこでロマンチシズムの火の手が一段と猛烈となつて來たのであつた。此意味から見て後に語る智見的ロマンチシズムといふものは頗る侮るべからざる關係のものである。それはとも

あれルッソーに至つては、一面感情的生活の生きた模範であつたと同時に、一面は感情主義の創說者でもあつた。すなはち彼れは智と情との兩方面から廣義に謂ふロマンチシズムの端緒を發いたのである。

天眞爛漫、直情逕行はロマンチシストの生命とする所であつた。彼等ははじめより筆把れば抒情的を主とし、思を凝らせば主觀的を本來とし、各自獨得の理想を專一とし、自己本位を當然としてゐたのではあつたが、自然的の感情生活を主義とするやうになつてからは、態度が消極から積極的に變り、公々然になり、大膽にもなり、單に口に筆に主張するに止まらず、おひ〳〵實踐を試みるやうにもなつた。彼等の作や行爲が宗敎上、道德上の異議を招くやうになつたのも玆に原因するのである。英のバイロンの作『ドン・ジュアン』*Don Juan* の如き又は獨のシュレーゲルの作『ルシンデ』*Lucinde* の如きが其著しき例であらう。

かやうに情慾の權利を主張し、其極何事につけても大膽に性の赴くまゝに行ふを是とし、己れの欲する所に從ふを理想とした結果は、勢ひ *lawlessness* 放埒無法の振舞をも是認せねばならぬやうになり、所謂ボヘミヤニズム（放浪生活）に附隨する一切の不德や弱點やが、どうやら白晝橫行の特權を得たやうにも思はれた。さらぬだに文明の世には精神上の病的遺傳者の多い習ひであるのに、また總じて詩文人は生得が氣隨氣儘で忍耐力が乏しく懶惰放埒に流れ易い習はしであるのに、

かういふ説が流行して來たゝめ、一段と彼等の克己力を鈍らしめ、病的な輩らをして倍〻病的ならしめ、懦弱な手合をして益〻懦弱ならしめたやうな例も少くなかつた。ロマンチシストといふうちにも取別けて獨逸又は佛蘭西などの近世の詩文人中には狂妄を極めてトゞのつまり亂心に終り癡呆に終つたのが少くない。彼等の或者は曾て自ら反省するといふことをせんで、頭から自分を過信し、增上慢の餘り、到底實現することの出來ぬやうな空漠たる感情本位で拵へ上げた理想を持廻り而してそれを只一擧にして實現しようと氣をあせり、それがために現實と衝突し、家庭の不和を釀し、親友とは絶交し、自業自得の失敗をしながら、憤懣し、怨嗟し、唯もう人を罵り、世を呪ひ、天を咎め、果は自分をも憎み罵り、狂ひ悶え、自暴自棄して厭世家、憎人者（ミサンツロピスト）となるといふやうなものも少からずあつた。彼等の多くは戀愛本位の本能滿足論を唱へた。すなはち戀愛を以て人生の最大事と主張し、其極、姦通の是認を唱へ、兄妹相婚の是認をも唱へた。或ひは又豹變してシニックとなり、眞善美の三つながらを無視してしまひ、一世を冷觀し愚弄するといふ態度に乾固（ひかた）まつてしまふのもあつた。要するに極端なる感情生活の必然の結果は甚しき錯覺に隣する一種の神經過敏性卽ちヒポコンデリヤか、酷しき悒鬱病か、怖るべき狂暴か、これらの何れかに落留まらざるを得ない。或ひは又前半生の猛烈な急進的革命的態度の反動として、其恰も直反對なる甚しき保守態度へ戻つたのもあつた。彼等は專ら感情的に去就するものであるから、極端から極端に赴くのに不思議

も無い。煎じ詰めると彼等の態度は二つしか無い。破壞的か其反動の退却的かである。獨逸のロマンチシストなどには前半生に思ひ切つて放縱不羈主義を主張したばかりで無く、隨分俗人から見れば不品行、不道德な事を實踐躬行もしてゐながら、晩年豹變して熱心な宗敎家となつた例もある。劇作家の *Werner* が後年には聖母メレーだとか神（ゴッド）だとかいふことを口に絶たずして、彼れは神に對してコケトリー（媚嫵）をやつてゐるのだと評されたのなぞが其一例。チイクやシュレーゲルが羅馬舊敎の信者となつたのなぞが其二例。此邊の消息は例のブランデスの『日耳曼に於けるロマンチシズム』にくはしい。最も此種のガンドウ返しは今も昔も珍らしくない。セント・オーガスチンの改悛も、龍樹、文覺の大覺も、近くはトルストイの豹變も、見やうによつては同じ因果ともいへる。十九世紀も末になつて寫實派や自然派の放逸文人にも同樣の事が幾らもある。明治にはつては日本の文壇にも、度合こそ低けれ、類似の例が無いでも無い。併し前にも言つた通り、日本へは寫實主義もロマンチシズムも自然主義も皆同時に入つて來たのだから、複雜な一種特別な現象を呈してゐる。それを世間では存外に心附かんでゐるやうだから、間違が生じ易いと思ふ。尙ほ此事についてはロマンチシズムの分析全部を終つてから言はう。

知見の獨立に立脚せるロマンチシズム

其一　反形式主義

前々の講話中にも述べておいた通り、若しもロマンチシストにして其據る所が不平とか厭倦とか煩悶とか慷慨とか、單に熱烈な感情の作用ばかりであつて、智見上に何等嚴とした據り所も無いやうであつたならば、到底協同といふことが成立たず、隨つてあれだけの大活動をなし得ないで終つたでもあらうが、彼等の多數は同時に相應の論理頭（ロヂカルヘッド）をも具へてをつた。よしや最初は其思想が混亂してゐて、殆ど半不自覺で無主張同樣であつた手合とても、次第に何等かの新見を標榜し、それを力草にして俗論と鬪つた。圖表の便宜上不自覺的と特稱しておいたロマンチシストの間にでも、文學上だけでは立派に自覺し、嚴然たる新主張を有してゐた者が少くない。ウァーヅワースやコールリッヂなどが其一例である。

（第一圖表に不自覺的と特稱したのは、廣義に謂ふ個性の解放といふことがロマンチシズムの本意だといふことを自覺しないでゐるといふ點を主眼としたのであるから、さやう諒せられたい。）

又自然の結果として追々彼等の仲間中に、幾多の專門思索家が現はれて哲學者、批評家、論文家

といふ資格で堂々と應援することゝなつて、ロマンチシズムの威勢は大いに加はつた。

さて此智見の獨立を標榜したのにもおのづから二大別がある。主として詩學、修辭學上の形式論に反對して獨立斬新の工夫を主張し實行しようと試みたものと、更に廣く更に深く哲學上からあらゆる獨斷（ドクマ）說を排斥して、全く世界觀や人生觀や倫理觀や藝術觀を立し來らんと試みた者とである。前者卽ち文學的と稱すべきものは、ロマンチシズム勃興の當時列國を通じて最も盛んに主張せられた該活動の第一當面の問題であつて、神社に喩へたなら、之れが卽ち表立つた本社で、次ぎの哲學的といふ方は奧の院である。さて眞先に文學上に新しい知見を立てたは、其聲は尙ほ微弱ながら、ヤハリ英の詩人であつたと言つてよい。併しながらそれを秩序的に唱說し着々實行したのは獨の詩人だといふが當然であり、又それに依據して最も後れた代りに最も激烈に端手々々しく活動したのは佛のロマンチシストだといつて當然であらう。而して他の哲學的新智見に至つては、これは獨のロマンチシズムの檀場。其他といふうちにも英國の如きは僅かに其餘波を傳へたに過ぎない。順序だから先づ專ら文學的の方を說かう。

文學的新智見の要旨は語法上（グラムマー）、修辭上（レトリック）、詩學上（ポエチックス）に於ける一切の專制主義や、獨斷說や、形式や、法格や、典據や、權力を排斥するに在る。思想感情を表白するに當つては各作家めい〳〵の欺き僞らざる思想感情こそ最上の權威であつて、之れを十二分に他人に傳へんとする爲の參考、裨補として

の外には他人の作品や他人の法式やは必要で無い道理だから、十七八世紀以來の文學上、詩學上窮屈千萬な法則は須らく悉く排斥し、めい〳〵其好む所に隨つて自由自在に自家獨得の機杼を打立つべきであるといふ點に在る。英の學者セインツベリー氏が其『佛文學入門』に枚擧した擬古文學の缺點五ヶ條の如きは恰も彼等ロマンチシストの當面第一の破壞（ぶちこはし）の目標となつたものである。すなはち（一）餘りに窮屈に修辭法を定めたが爲に、詩に用ふる語類（詞藻）の貧少であつたこと。古語を嫌ひ、造語を惡み、俗語、卑語はもとより許さなんだこと、（二）簡單に言へることをも故（わざ）と持つて廻り、妙にひねくりて形容する癖、「月が昇る」といふ代りに「嫦娥將に靚粧して云々」といふが如き用語癖、（三）次ぎに劇詩は勿論、敍事詩、抒情詩、寓言、書簡詩、何にてもあれ、苟も純文學として認容せられんとすれば、是非とも或一定の模範に從はねばならなんだこと、例へば劇の如きは三同 *three unities* の法を背くことを許さなんだこと、（四）それから詩律の上にも同じく一定の型があつて、例へばアレキサンドリン格といふやうな格があつて、苟も悲劇詩である以上は、毎に必ず此格で綴らねばならぬといふが如き規則があつたため、第三の定めと相助長して詩をして眞に千篇一律のものたらしめたこと、（五）かて〻加へて題材（サブジエクト）にまでも制限があつて、或種類の事件や人物や思想や感情の外は詩歌文章に上すべからずと定められてゐて、恰も子規や晶子の未だ出でざる前の我が俳句界、和歌界といつたやうな趣きであつたこと、是等諸弊に反撥して語法上にも修辭

上にも詩學上にも形式排斥主義を呼號したのが、國によりて幾らかの相違はあるが、先づおしなべてのロマンチシストの態度である。彼等は是等五ヶ條の全く反對に出たのである。先づ用語には廢語を厭はず、造語を嫌はず、外國語をも勝手に採用し、俗語、卑語、方言、何でも闊（かつ）はず自分の目的に叶ふと思へば自由自在に取込んだのみか、語格の如きも自分の都合で全く先例の無い用ひ方をし、剩へ文體の如きも朦朧晦澁、荒唐奇峭、或ひは又野俗蕪雜、局外の者が觀てはエタイの分らぬといふやうなのが彼等の最も得意とする所であつた。バーンズやウァーヅワースやコールリッヂの初期の作は何れも之れが爲に舊派の嘲罵を蒙つたものだ。中には如何にしても朦朧險晦、何の意とも解しがたいのも多かつた。それは已に前講中に言つた如く彼等ロマンチシストの中には眞晝間に夢を見てゐるやうな手合も隨分多く、思想其者が如何にも空靈縹渺としてゐたために、言ひ表したことが風の如くに捉へがたく、乃至は其思想が混亂してゐて言ふことが囈語のやうで多義曖昧であるために解らぬこともあつた。英の詩人（ロマンチシスト）の作中にも、例へばシェレーやキーツやロゼッチやの作中にでも到底十分には解しがたい作があるのだから、暝想家の獨のロマンチシストの末流には定めし一段と多いことであらうと思ふ。何れにもせよロマンチシストが思ひ切つて破格を主張した勢ひは先づザットこんな鹽梅式であつた。

以上は用語と語格と文體との上卽ち語法上、修辭上の話だが、詩學上でも同樣の破壞を行つて不

羈奔放、自由自由の建立を試みた。先づ形式上卽ち律格の制限を悉く撤し去つて、(英國の例を言へば)、或者は遠くエリザベス時代まで遡つて久しく棄てられてゐた『神女王』の作者スペンサーに私淑し、彼れが用ひた律格を自作の模範とする。かと思へば、或者は俄にミルトンの熱心な研究者となつて其詩法を復活しようとする。同じくミルトンに倣つて無韵詩を主張する者もあれば、十四行體(ソネット)を流行らせようとする者もある。或ひは又『オッシャン』を我が『萬葉集』程に崇め上げて新詩の本尊佛に祀り立てようと騷ぎ立てると同時に、中古時代の俚歌民謠を蒐集し上梓し讃稱し模倣する者が輩出する。或ひは又互に外國の詩文を翫味する、翻譯する、推稱する、それによりて相感化せられ影響せられる。かうなつて來ると最早標準は思ひ〳〵、敍事詩にも劇詩にも抒情詩にも一定の法則などは無くなつてしまふ。劇詩の三同なぞは誰れ一人顧みるものも無い。自然にシェークスピヤが劇の大王と崇められる。皆競つてシェークスピヤに倣はうとする。一時は名ある詩人にしてシェークスピヤを研究せざる者は無く、又劇詩に指を染めて見ない者は無いといふ有樣ともなつた。これらは無論英國ばかりの事で無い。どこの國も大同小異、ほゞ斯くの如き順序で以てシェークスピヤに歸着したことは事實だ。何となればロマンチシズムの本尊佛としてはシェークスピヤは種々の意味に於て最も適當してゐたからである、其形式內容の不羈自在な點に於て、其頗る客觀的であらゆる主觀的解釋を容れて餘りある點に於ても、其文學的大望(アンビション)の目的として最も偉大なる點

に於ても。

同じ理合で文學の內容卽ち題材や構想も同時に悉く舊窩を脫した。十七八世紀の文學は詩學上の要求や俗尙や輿論やに迎合することを第一としたので、勢ひ千篇一律となり、シェークスピヤのとは異つた意味の客觀的、淺薄な客觀的に固定してゐたのであるが、ロマンチシズムの作物は恰も其反對に何れも思ひ切つて主觀的卽ち飽迄も抒情的(リ、カル)であつた。形式だけは敍事詩的にも劇詩的にも綴つたが、其內容は殆ど皆言ひ合せたやうに抒情詩的。彼等の生命は自己の空想である、自分の思想を離れては表白することは殆ど無いのである。英で言ふならば、バイロンの作は敍事詩も劇詩も明かに抒情詩、ウァーヅワースもさう、シェレーもキーツも又同樣。獨の大詩人ゲーテとても大體に於ては主觀的だと評したはうが當然である。是れ自我の解放を目的として立つたロマンチシストの使命の然らしむる所、近代文學の特色は實に此點に存するのである。されば彼等ロマンチシストらはシェークスピヤを自家功名の目標とも模範とも立てゝ、何とかして之れを凌がう、せめても其壘を摩さうと力めながら、僅に一二を除くの外は悉く失敗に終つた所以の者は、一に茲に原因する。シェークスピヤは空想家でもあるが實際家でもあり、主觀的でもあり、ロマンチックでもアイデヤリスチックでもあるが、リヤリスチックでもナチュラリスチックでもあつて、彼等とは全く性格、態度を異にしてゐたことに氣が附かなんだのである。ロマンチシストの中にも、之れを廣義に解すれば、

スコットやゲーテのやうな例外もあるが、大體に就いて評すれば、彼等は何れも偏狹と言ふべき程に主觀的であつて、其主義にも主張にも嗜好にも趣味にも題材にも蘊蓄にも限界があり、寛厚な致態が無い、餘裕に乏しい。シェークスピヤを廣くして且つ深く無盡藏の變化を具へてゐる海に比すべくば、ロマンチシストの多數は星月夜の森林などに比すべきであらう。其實、大小深淺の大差があるのだが、朦朧としてゐるので一寸見は何れも物凄い程に深く見える。入つて見ると或程度までは變化もあるが、よく〳〵見ると存外單純で、中には樹の數の算へるばかりなのもあらうといふもの。彼等の吟詠する所の題材は概して圖表中に示した邊に止まると言つてよい。

其二　反獨斷說的と概稱すべきもの

文學上に於ける十七八世紀の形式主義が、上に講じ來つた如く、年壯氣鋭なる新代の詩文人の爲に悉く破棄さるゝに至つたと同時に、一方には廣く深く在來の諸獨斷說を覆さんとする思索上の新活動が始まつてゐた。獨逸に於ける新哲學の勃興がすなはちそれである。これらの哲學諸派は、或ひは稱してロマンチック哲學ともいふ。それからまた十八世紀の末に英のヤングや獨のヘルデルやが唱へた天才論乃至ロマンチシズム全盛時代に唱へられた文學論など、これは單に文藝にのみ關したものながら、是れまた此反獨斷說的といふ部門に屬せしむべきものであらうと思ふ。何れも自覺

した個我の智的主張である。ロマンチシズムは是等の辨證を得るに及んで一段の自信と勇氣とを附加へたことは爭はれ無い。ロマンチシズム以前には何處の文學も多少遊玩的たることを免れなかつたものである、然らざれば宗教又は政治又は德育の一時の臣隷又は器具たるに過ぎなんだものであつたが、此智見上の自覺を經て以來、文學の尊嚴が大いに加はり、或程度迄宗教、政治、道德等と牴牾扞格しても立派に存立し得ることとなつた。今日我が一部の文藝家の如何にも新しさうに唱ふる所は往々にしてロマンチシストの餘唾に過ぎぬことがある。而も唱ふる人聽く人はそれに心附かずして、全く近年の創見の如くに思つてゐるのが無いとも限らない。それこれ此間の消息は一通り說明しておく必要があると思ふ。

十八世紀末から十九世紀の前半へかけて幾多の大哲學系統が相接踵して興つた理由は、一面は十八世紀の常識論と獨斷的な諸種の哲學に對する反動だとも言へるが、一面は彼等の前に出でゝ諸の獨斷說の大破壞を行つた獨のイマニュエル・カントが批判主義の哲學に反動したのだとも言へる。蓋し之れより前かた宗教上にも教育上にも因襲によつて固定された諸種の獨斷說が威力を逞うし、追々に英のロックのやうな、佛の「エンサイクロピヂスト」の樣な、竟には例のルッソーのやうな大膽な新智見を發表する人も出たが、之れに六七分の眞理があれば、彼れにも猶ほ少くとも三四分の眞理はあると言つたやうな具合で、局外から觀るとどれも〳〵獨斷と獨斷との論爭のやうに見えて

果しが無く、甲是乙非、紛々擾々、その餘弊眞に忍ぶべからざるものがあつた。此時、冷靜なるカントは沈潛反覆して思索し、眞の病根の果して那邊にあるかを看取し、專ら冷靜なる批判といふ點に立脚して先づ眞妄の辨別といふ事に全力を傾注した。按ふに獨斷說の弊を除くといふ目的から言つたら、是れに上越す手段は無かつたに相違無い。併しながら惜しいことには彼れの哲學は批判と分析と辨別とを專一として餘りに理窟詰に陷つた結果、理論と實際との間に相通ふべからざる一つの大きな隔たりをこしらへてしまつた。彼れの哲學は之れを人間生活の實際に適用しようと試むる段になると、物足らぬ點が夥しく、存外に微力な物である。とりわけ『實行理性論』(プラクチカル・リーズン)中の彼れの倫理說の如きは往々にして後生の嘲侮をすらも招いた。つまり彼れの說は精神的生活の全部を統轄するに足るべき根本の大觀念を缺いてゐたのである。宇宙の本體は到底知るべからずといふ彼れが見地よりすれば、斯くあるも必然の歸收であらうけれど、さりとてそれが爲に實際生活の需要に副はぬ迂腐の說となつたといふことは事實であつて、如何なカント崇拜家も其點だけは辯護のしやうもないのであらう。こゝに於てか後の識者、學者が次第に起つて、或ひは更に思ひ切つて宗敎上の獨斷說に立戻つて盛んに神に對する信仰心を鼓吹し、之れに依つてカント哲學の缺陷を補はんと試みるのもあれば、或ひは又文學や美術に人の心を遊離せしめて以て此精神界の落寞を慰藉し潤色せんと欲したのもあつた。所謂ロマンチック哲學者らは知識(ナレッヂ)と宗敎(レリヂオン)と藝術(アート)との間に巧妙な聯絡を成就しようと

企圖しつゝおの〳〵其性の赴く所に隨つて其哲學系統を組織したのだと言つてよい。以下彼等の立脚地の大旨(おほむね)を話して見よう。

先づ認識論上から言はうに、彼等は儼然たる非常識論者であると同時に非カント論者でもあつて、言はゞ新獨斷論者(ドグマチスト)であつた。何となれば彼等はカントの如く理論的理性(シオレチカルリーズン)の可能性に對しては聊かも疑惑を抱くことをしないで、頭(あたま)から人間には一種靈妙な直覺力のあるものと斷定し、此力ある以上は人は推理を經ず經驗をも俟たずして、時に先天的に事物の眞相を悟ることを得ると考へた。すなはち非經驗說(アンチエムピリシズム)で、先天主義(アプライオリズム)で、主觀的唯心論(アイデヤリズム)である。例へば、フィヒテ(一七六二—一八一四)は以爲へらく、大世界は要するに自我(エゴー *Ego*)の描き出だしたる所のもの、エゴーありて世界あり、エゴーなければ世界なし、「世界を設置する自我、世界を創作する自我」*the world positing and world creating Ego* と。こゝに於てか、彼等一派の哲學者は直觀 *intuition* といふことを重んずること甚しく、眞理は獨り此者の靈能によつて認識せらるべき者である、彼の迂拙な、遲緩な經驗作用や、誤謬が多く制限の多い推理作用なぞは、詰る所肝腎要の用に立つものでは無い、眞理は畢竟蟲の這ふやうにして到達せらるべきものでは無くて鳥や獸の飛跳するやうに *leaps and bounds* によつて頓悟的に到達せらるべきものだと言つたやうに說いた。かういふたぐひの主張は、東西とも、宗敎家なぞの口によつては隨分古くから唱へられたことだが、哲學者の組織立つた議論中に盛

んに堂々と述べ立てらるゝに至つたはロマンチシズム以來であると言つてよからう。彼のヘルデル（一七四四―一八〇三）が――これは哲學者では無いが、ロマンチシズムの先驅となつた批評家たるヘルデルが――「直觀の人は最も人間的なる人なり」と言つたのなぞも、此同じ直覺崇尊の傾向を豫示してゐるのである。

ロマンチシストが何故にかやうな說を取るかには種々の理由があるが、一は詩人肌の自然である。ロマンチシズムは俗に碎いていへば、十八世紀が餘りに俗人的、學究的であつたによつて、多血多感の若い連中が堪りかねて謀反したのであるとも言へる。近頃になつて日本などでも科學者や常識家を呪ふ聲が大分盛んだが、詰り、若い、氣の短い人達は、氣の長い、まだるッこい學者氣質や老人肌とは肌が合はないのである。但し冷かに判斷すれば、どちらにも幾分かづゝ動かぬ眞理があつて、片手落に裁く譯にはゆかぬ。此邊の評は講者が舊著『文藝瑣談』中の「詩人頭と學者頭」其他の論中に一通り說いておいたから、序でがあつたら參讀して下さい。

之れを要するに、ロマンチック哲學の特質となつた目的は、カントの知識論と倫理論、レッシングやシルレルの美論、ゲーテの詩文に現れた思想、ヘルデルの史論、ハーマンの情熱的宗敎說なぞを整理統一して合理的のものとしようとした所にあると、『近代哲學史』にロマンチック哲學を敍してゐるヘップヂング氏は言つてゐる。俗に碎いて言ふと、大風呂敷主義なのである。

併しながら此種主觀的唯心論は、つまりは一種の獨斷說であるのだから、同臭味の者を滿足せしめ得ても、到底衆他を滿足せしめ若しくは悅服せしめることは難い。ロマンチック哲學がやがて神秘說に流れ込むやうになつたのは自然の結果であつたらう。

實體論上から見ても、ロマンチシストらはカントなぞとは違つて、心物の二界を超脫した別の實體が存在するものと假定して論を立てた。フィヒテはロマンチシストの先鋒であつて、その *Ego* を第一位に置く所はどうやら一元論の樣であるが、尙ほ流石に二元論らしい傾向をも具へてゐたのだが、其次ぎに出たシェリングやヘーゲルに至つては主觀と客觀とを圓滿に一致せしめようと試みた所から明かに一元論的になつて來た。シェリングは曰く「自然界の組織は取りも直さず我が精神界の組織なり。自然は目に見ゆる精神のみ、精神は目に見えざるの自然のみ」と。シェリングの所謂精神（スピリット）、ヘーゲルの所謂想念（アイデヤ）は大世界の本體でもあり根本でもあるのだが、勿論かやうに名づくるは假（かり）なので、其實は心にして物でもあり、物にして心でもあるのだと說く。かるが故にシェリングは自然と精神との同一となれる場合を名づけて絕對 *the Absolute* と呼んだ。儒家の所謂大極に髣髴たるものだとも言へる。而してヘーゲルに至つては、更に態度が變つて來て、明かに客觀的の唯心說となり、大分大乘佛敎に似通つたものとなつた。何れにもせよ、ロマンチック哲學が唯心說を本體としたことと、彼等の感化によつて唯心說が彌〻流行したことは事實である。ヘーゲルの後に出でた

ショーペンハウエルやハルトマンら諸哲學者が、或ひは意志(ウイル)を、或ひは無意識を宇宙の本體と立てて、それから其系統を組織した態度の尙ほ明かに唯心說なのによつても、時の思潮が觀測される。

按ふに、カントは餘りに冷かに非實際的に批判した結果、理想と現實とをして到底調和する能はざる程に相隔離したるものたらしめた。フィヒテとシェリングとは其後に出でゝ、是等の弊を救ひ、その缺陷を補充しようと企てたのであつたが、ロマンチシズム勃興當時の時代思潮の然らしむる所、二人とも頗る感情的にして、フィヒテは道學家めき、シェリングは詩人めき、其說く所尙ほ多くは理想に偏し、ともすると空靈神怪な獨斷說に流れて、詩人や文學者に取つては奬勵とも力綱ともなつたであらうが、廣く實生活の活きた需要に應用せらるべきものでは無かつた。此時、聰明冷靜なるヘーゲル出でゝ、前數家の病患の、學者としては餘りに感情を加味し過ぎてゐる所にあつたとを看破したらしく、極めて沈着に、極めて冷靜に思索を凝らし、最も周到に、最も巧妙に理想と現實とを調和しようと試みた。彼れの說は前の數家に比すると更に高くもあり、更に廣くもあり、更に明晰にも更に冷靜にも更に穩健でもあつたのである。一面には彼のカント式の、批判の爲に批判すると云ふが如き沒實效的探究(エムプチーサーチ)を避け、他面には彼のロマンチシスト式の現實に對する隨意勝手な主觀的態度を斥け、飽迄も虛心坦懷的に、學者風に、而も實生活を眼中から離さずして思索し推理しようと企てたのであつた。卽ち冷淡迂濶に失する批判專門家の弊と狂熱獨斷に流るゝ空想家、詩

人肌、宗敎家肌の失とを双つながら除き去らうとするのが彼れの努力であつたらしい。とはいへヘーゲルの哲學とても、今の意味で謂ふと決して科學的、歸納推理的では無かつたのである。彼れはロマンチック哲學の失を救はうとて立つた哲學者であるに拘らず、尙ほ彼れをロマンチック哲學者の中に屬せしめざるを得無いのは是れが爲である。彼れの歷史觀の如き、偶(ふと)と見ると一種の進化說であるから、ダーヰン一派と相通ふやうにも思はれるが、嚴密に評すれば殆ど悉く演繹的、臆斷的であると言つてよい。其上に彼れはまだ地球中心主義をも人間中心主義をも脫し得てゐない。是れも科學者的で無い一證である。彼ればかりでは無い、彼れの後に出でたショーペンハウエルもハルトマンも同じ觀察點から觀るときはロマンチシストの亞流だと言はねばならぬ。たしかヘッフヂング氏がそんな風に評してゐた。

尙ほヘッフヂング氏は當代の思潮を描破し盡したと稱せらるゝゲーテの名作『ファウスト』前後二篇によつて時の哲學を評した(原文は遠の昔に讀んだので大意の外は記(おぼ)えてゐないが)。その意を敷衍して見ると略(ほぼ)斯うだ。全然主觀的な『ファウスト』の第一篇は正にカントやフィヒテやシェリングの時代に相當する。理想と現實とが截然として分れてゐる。そして主人公は時としては批判的でもあるが、時としては甚しく主我的でもあり、狂熱的でもある。而して第二部はヘーゲルの時代に相當する。主人公ファウストの心が次第に理想と現實とを調和しようといふことに向つた。ロマンチッ

ク熱が大分減じてゐる。初めは怖ろしく主我的であつた彼れが、末には專ら利世安民の事業に心を傾くるに至つて命を終つてをる。つまり是れが作者ゲーテが一代の心的閲歴であると同時に十八世紀の末から十九世紀の前半へかけての歐羅巴列國の精神的閲歴である。ざつと如斯(こんな)意味であつたと思ふ。尙ほ此邊の消息に關しては、クープランドの『ファウストの精髓(スピリット)』を參照すると面白い。

次ぎに目的論上から觀ると、所謂ロマンチック哲學は、所詮は急に勃興し來つた個人主義と世界主義とに哲學的是認(ジャスチフィケーション)を提供しようとして骨折つてゐるものに外ならぬといふことを認めるに難くない。按ふに十八世紀末から十九世紀の初めまでは、日耳曼國は其一國と云ふのは名のみであつて、國家的統一は全然として缺如してをり、大名三百、小名千五百、おの〳〵封建的に藩屏を築いて割據し、恰も我が維新間際の諸藩といふ有樣或ひは古代希臘の列邦といふ情態であつたので、民衆の心も自然に其鄕土の利害に集中しなければ自己一身の利害に集中するが例で、よしんば識見抱負の高い者があつても日耳曼全國の爲などいふことを唱へるのは殆んど絶無といつてよく、寧ろ超然として世界の爲とか人類の爲とか言ふ空漠たる點に着目するの習ひであつた。日本などで謂ふ意味の熱烈な、具體的な愛國心は未だ全く成立つてゐなかつたのである。ロマンチシストの多數は萬國一如觀に住してゐた。所謂コスモポリタンであつたと言つてよい。是れ主として列邦の割據とか專制政治とか階級制度とか敎育不備とか其他諸種の因襲的弊害が中等以下の民衆を疎外して何等の自由

をも權利をも與へなかつたが爲に、國家といふものに對して何等恩義をも感ぜなんだのに原因してゐる。そんな有樣であつたから、時の俊髦らは半無意識の間に何とかして此窮屈な小世界の外に出でゝ、せめても智見の獨立を縱さにして精神界にてなりとも思ふ儘に行動したいものと欲したでもあらう。彼等ロマンチック哲學者らが既に其認識論に於て唯心と斷說し、又その實體論に於て一元と斷じ、心物一如と斷じた以上は、その目的論の特色の、必然の結果として、個人主義的又は主我的であるべきことは、豫め想像し得らるゝことであるが、果して先づフィヒテは深くエゴー(自我)といふものを尊崇し、人間究竟の目的は「有限の自我(エゴー)を解脫して絶對の自我(エゴー)に達し、以て完全なる精神の自由を得るにあり」と說いた。是れ取りも直さず自我(エゴー)を神と崇めたのである。勿論彼れの所謂自我(エゴー)は「圓滿完全の我れ」といふ意義であるから、個々人々の現實の我れ、目前の我れでは無いのであると解すべきだが、さりとて「宇宙は自我の描き出だす所に外ならず」と斷說してゐる以上は、所謂圓滿の自我に造詣するとせざるとは個々我の自由であると言へぬとは無い譯である。これが目的論上から觀て、フィヒテの說を曲解せられ若しくは誤解せらるゝ弱點を持つてゐると言はねばならぬ理由である。況んやフィヒテ自身すらもその初期にその說を唱へた時分は、現實の我れと哲理上の我れとを折々混同せんとする模樣があつたといふに於てをやである。彼れは斯う言つた、"*All that is, is for us, what is for us, can only be through us*"「存するものは皆吾曹の爲に存

す、吾曹が爲に存するものは特り吾曹に賴りて存することを得」と。

そこで之れを前提として推論してゆく時には、世界は悉く人智の產出する所といふが中にも、とりわけ想像力は最も大切なる世界產出の能力であると斷言してよいことになる。而して更に極端まで推論してゆくときには、善惡とか邪正とか是非とか眞妄とか美醜とかは、要するに各人各種の想像力の產物に過ぎぬものと假定される、隨つて甲の說を是とし乙の說を非とするなどは間違つてゐる、いづれも皆けつこうである、隨つて世の中に是非眞妄の標準などは無い、自分の想像の產物に過ぎぬから、かやういふのも根ッから當にはならぬ、つまり一切が眞暗である、などゝ結論しても差支の無いものとなりかねない。無論フィヒテの本意は決してさうでは無く、その哲學の組織から言つても決してそんな無法な粗漏な論じかたはして無いのであるが、そこが彼の千丈の堤も蟻の穴からの喩へで、誤解又は曲解を招き易い弱點があると、之れを機關砲にして鬪はうといふ手合は、年少氣鋭の、多感多情の、今を熾りのロマンチシズムの狂熱に煽られてゐる詩人文學者だから叶はない、早呑込をして、一知半解で粗忽な適用を行ふ、そこで、時としては劣俗な意味の似て非なる個人主義や主我說の回護器ともなつたのである。

シェリングの精神哲學(スピリット)も、その目的論に移るやうになつてからは萬有神敎となつてしまつて、一面には一切衆生悉具佛性的の信仰を與へて個々人の自尊心を鼓舞したと同時に、他面には同じ立脚

地から自然の風物を自分と同樣同格に愛重し思慕するの情を起さしめた。ウァーズワース一流のロマンチシストらは、或ひは直接に、或ひは間接に、シェリングの感化を受けたものだと評してよからう。

若し夫れ直覺を重んじ想像を尊むの餘り、詩歌藝術を此上もなきものと讃稱し、常識を卑み經驗を抑へ、宇宙の眞相を悟得して人間究竟の大目的に到達するの道は特り詩歌と藝術との妙用に在るのみと說き誇るは、ロマンチシズム勃興以後はじめて廣く唱へられたことであるが、其源泉を發いて新流を迸らせたものは第一にはフィヒテの知識論である。併しながらそれに一段の活動力を與へたはシェリングの詩論であらうといふ噂。彼れは言つた「造化自然の運行は悉く皆詩である。但し是れは何等自意識も無くて出來た詩である。而してそれが人間の力によつて有意識の詩と化する段になると、そこで初めて人間を益する者になる。詩とは何ぞや？　萬有を貫いて存在してゐる理趣とか想念とか言ふべきものを直覺的に看取して、それを畫のやうに寫し出だすことによつて出來るものである。要するに詩歌藝術は哲學の證明することの出來ぬものを表現する力を具へてゐる、云云。」彼のノーファリスが「詩と哲學とは區別無し。哲學は人生の詩(ライフ ポエトリ)の理を論じたるもの、詩こそは *all and everything* 一切なれ」といつたなぞも、大體に於て脈を同うしてゐる論である。

ロマンチシストがかやうに詩歌藝術を無上視したる結果、竟に藝術をして超然として世務の外に

立たしめ、前に例無き絶對の自由を與へ、善惡撥無の特權を有せしめて道德圈外に棲ましめようとする一種の理論さへ成立たうとするに至つた。「藝術のための藝術」*art for art* といふことはツマリ此意味になる。之れを呼んで *Artistic Absolutism* 絶對藝術觀ともいふ。前年紹介された獨のニイチェの藝術觀なども、畢竟するに此種の說の餘波たるに過ぎない。今日我が國の自然派作家などの唱ふる所も一方に於て頻りにロマンチック文藝を攻擊する如き態度を取つてゐるに拘らず、其主張に往々にして矛盾があつて、存外に空想的で、その說の是等ロマンチシストらの餘喘に外ならぬことが多い。さて以上の說明だけでは何かと會得の出來ぬことも多からうが、今はたゞ諸要素の關係を示すに止める。尙ほ絕對藝術觀については、下に、文學的反獨斷說と特稱した條下で說明するが、其根柢の主として以上の哲學觀にあるといふことを記憶しておいて貰ひたい。

文學的反獨斷說

文藝至尊論——天才神聖論

文藝絕對觀とは如何。一言以て蔽へば文藝を玩具視した舊思想の反動である。政治や宗敎や道德や敎育やの器具扱ひにした反動である。謂へらく詩歌藝術は——（ロマンチシスト時代には今のやうに文學といふ總稱を用ふることは稀で、大抵 *Poetry* 詩歌と言つたものだ）——詩歌藝術は永遠

にして不朽なるべき理想の爲にするもの、現世目前の爲にする他の政治、敎育、實業、現世的宗敎事業などとは全く其格を異にすべきものである。また專ら美の爲にするものだから、事實といふ意味の眞とか、風紀といふ意味の善とは沒交涉である。詩歌藝術は須らく別天地に超然たるべきものである。權力（オーソリチー）とか慣例（コンヴェンション）とかはあらゆる意味に於て棄却してよろしい。本來藝術家は絕對個人主義に住せねばならぬものである。何となれば己れが天稟以外に、己れの直覺以外に多く恃む所のあるべき筈が無い。詩歌藝術は獨創を生命とする、隨つてその手心はめい〳〵全く思ひ〳〵でなくてはならぬ。模範とか規律とか格式とか制限とかのあるべき筈が無い。製作者が異なれば主義（プリンシプル）も異ならねばならず、手法（メソッド）も異ならねばならず、その作品の性質もまるで異なつたものとなつて現れるのが當然である、云々。まア雜と如斯（こんな）口吻。

素より斯樣な文藝觀はロマンチック哲學の提唱を俟つて初めて成出でたのでは無い。彼の英國の十八世紀、擬古派の詩王アレクサンダー・ポープが全盛であつた頃の英國詩界の眞只中に立つて「詩人は宜しく自然の書（ネーチュアブック）と人間の書（マンブック）をこそ讀破すべけれ」と唱破して專ら空想の自由を唱へてゐた詩人ヤングの如きも、無論その聲は微弱ながら眞先驅けて此種の說を提唱した一人と言へる。それはともあれ斯樣な激烈な唯美主義 *beauty for beauty school* の成立つに至つたのは、主として前に語つた新哲學の影響卽ち精神上の自由に渴してゐた時の文學者連の心的狀態、更に言ひ換へれば獨逸

聯邦の當時の社會事情に因緣した所が多かるべきであるが、一面はまた十八世紀中に最も熾んであつた善美一致論の反動でもあると思ふ。例の英の學者ホッブス一派の武骨な實利的な利己的倫理說が一時世に跋扈(はびこ)つて、風雅や仁愛がどうやら地を拂ひさうになつたのに驚いて、彼のシャフツベリやハチソンの善美一致說が勃興し、それにつゞいて諸種の峻嚴主義の道德論が興り、それから又それらの流れを酌んだ審美論が出たが、何れも美は善に依從せねばならぬものとして說いたのであつた。卽ち絕對文藝觀は、一面は文藝遊戲觀や利用觀に反動して起つたのであり、一面は個性解放の必要上から興つたのでもあり、更に一面は窮屈な善美一致說に反動したのでもある。而して此觀念中には今日の見地から觀ても否拒すべからざる許多の眞理分を含蓄してゐると言つてよい。

かくの如く眞と善とを超脫したものとして詩歌藝術を崇尊するに至つた必然の結果として、天才者の絕對自由を單に文學や藝術の別天地間で許認するばかりで無く、世間卽ち俗人と交際する場合に於ても同じく許認して然るべきだと主張するやうになつた。勿論是れは最後の歸着で、その初期にあつては、單に思想(ファンシー)の自由を唱道したに過ぎぬ。「美術的製作は全然自由なるべきである」とか、「美術は作らるべきにあらず、成り出づべきなり」とか、「模擬に成るべからずして神來に成るべきなり」とか、「美術の極致は自發自生(スポンテニアス・クリエーション)に在り」とか、「詩人の氣隨(クプリース)には法度(ロー)無し、詩人は須らく己れを法度とすべし」とか、「天才の無上の試驗は創揑力(オリヂナリティー)の有無に在り」とか、頻に天才の神聖を

稱揚したに過ぎなんだものである。こゝまでは殆ど誰しも異議が無いと言つてよいであらう。ところが此種の氣焰が段々猛烈になるにつれて、次第に論が極端に流れ、それがために何が何でも是れでは大分困るといはれるやうな荒唐無稽な無法(ローレス)の空想(ファンシー)に耽る詩人も現れ、如何に形式に關(かか)はぬと言つても、是れでは頭(てん)で解(わか)らないといふやうな亂脈(フオームレス)の作(ワーク)が相接踵して濫出するやうになつては、單に藝術論としてすら所謂絕對自由といふことが危(あぶ)なかしくなつて來た所へ、それがおひ〳〵藝術圈外へ溢れ出すことになつたので、その是非の問題が一段と複雜になり來らざるを得なかつた。

獨逸當代の文藝論者の見地よりすれば、天才とは何等の抽象的思想(アブストラクトアイデヤ)卽ち前以て注入された理法とか觀念とかに倚り縋ることをせずして單に相面したのみで事物の眞相なり眞趣なりを直覺する力を有する者といふ義になる。彼のゲーテが師事したヘルデルの如きも熾んに此意味の事を唱へたが、ゲーテに至つてはその說の實例だと稱せられたもの。而して此直覺推尊の傾向はロマンチシズム興隆の時代に及んでは更にその勢ひを加へた。彼等ロマンチシストらは一を聞睹して他の十百を悟得する直觀作用を詩人肌の本領とする所から、一々備さに試驗してから合點するといふ遣口(やりくち)を大俗的と賤蔑し、同じ理由に依つて實驗や分類や解剖や統計やを生命とする諸〻の科學を學究的と貶しめ、それから又歷史は死んだ事實の積集だと言つて排斥し、その他すべて格式めくもの、法則めくものの、權力めくものに拘束せられることを絕對に忌み嫌ひ、更に進んでは宗敎、道德を撥無し、政治

を度外視した。彼等の眼中には國家も無ければ社會も無く、在るものは只自分ばかり、美術家たる自分ばかりであつた。

此思潮は早く既にゲーテ、シルレル全盛時代のヴイマルの朝廷に發源してゐる。ブランデス氏は當時のヴイマル市を評して情慾解放の中心だと言つてゐる。『ウィルヘルム・テル』を作したシルレルとてもその實は純然たる個人本位で、國家とか社會といふやうな者は眼中に無い。彼等は尙ほ流石に舊慣に囚はれてか、上べには、又口にこそ、又は著作の結句などにこそ法度を重んじ道德を重んずるやうなことを言つてゐるが、その實は男女ともに只もう如何にして生(ライフ)を詩的(ポエチカル)になすべきかといふことにのみ屈託してゐたのであるとブランデスは評してゐる。如何にも、時の詩王たるゲーテの主我的行動は此評の眞なることを證して餘りあるのである。

而して此傾向はロマンチシズム全盛期に於ては、已に前に言つたやうに、明著となつたのみか、之れを公々然と主張する樣になり、詩人らは擧つて瞑想を重んじ情熱を尊み、世間的活動を卑み、すべて實用的といふことを斥けた。ロマンチストの中にも隨分激烈な共和政治論などを唱へたものもあつたが、それらは何れも絕對自由を主張するための段取たるに過ぎんのである。眞に社會の經營に志があるのでは無い。若しくは革命的の破壞的活動に一種の詩的趣味を認めてゐるのだと言へるでもあらう。英で言へばコールリッヂの靑年時の共和政治論などが卽ちそれ。シェレーの社會主義

とても半ば以上それに近く、バイロンなぞは言ふ迄も無く絕對個人本位。獨のロマンチストとてもさう。彼等の政治論は詩的個人主義の通行の爲に露拂を試みたに外ならぬのであつた。是れはずつと後れての事だが、彼の樂劇家ワグネルの革命運動と稱せらるゝものなどがヤハリ同じ脈のものである。詩人肌の唱へる革命論などゝ言ふものは、往々かういふ譯のものだが、ともすると立派な批評家中にも、こゝに心附かぬのか、或ひは心附いてゐながら何等か他の動機ありてか、又は因襲の然らしむる所か、格外に此點に重きを置く人達があるのは甚だ不審である。思ふに强ひて政治と連絡させずとも詩人の功勞や價値は儼として別に存すべき筈なのに、藝術の獨立を主張する同じ口ですら往々にして政治的革命にも參與したといふやうなことに力瘤を入れるのが不審である。これは全く政治を以て人間第一の事とした長い〳〵因襲の然らしむる所であつて、貶しては一種の謬信などゝも言ふべきものであらうか？　或ひはまた斯ういふ關係の纏綿する所に、人生(ライフ)と藝術(アート)の未だ解決せられざる甚深の疑義が存してゐるのでもあらうか？　無論是れはロマンチシズム以外に溢れ出づる問題である。

話が横へ外れたが、獨のロマンチスト、殊にノーファリスらの見る所によると、ゲーテは流石に眞の詩人であるが、レッシングやシルレルの徒は眞の詩人で無いといふ。それは何故かといふに（彼等はいふ）眞の詩人といふものは、一へに *soul* 心靈の大きいといふ點に其生命を有してゐる

のである。事に熱衷するとか性格が剛毅だとか言ふやうなことは所詮俗人の德である。心靈の大きいとは、努力の外に向はずして內にばかり向ふを謂ふ。實行を思ふなどは既にもう其本旨に背いてゐるのである。二六時中絕えず心を激切な、何等利害の念をも包藏せぬ感情の上のみ住せしめて、情熱をして只一へに心內にのみ燃えしむる、是れが詩人の本領といふやうに辯じてゐる。ロマンチストの理想が如何に自己本位で、瞑想的で、非實際的で、無爲的であつたかゞ略之れによつて窺はれる。

彼等の一派は常に無爲（アイドルネツス）と不羈（ローレツスネツス）と享樂（エンジヨイメント）と——懶惰、放埒、耽溺とも解せられる——が詩人藝術家の理想であると唱へてゐた。ブランデスは評して此三ヶ條こそはロマンチシズムの全部に蔓延してゐる三つ葉の和蘭蓮花（グンゲ）だと言つてゐる。思ふに、之れはロマンチシズムに始まつたことでは無い、人間社會の開けはじまりから藝術の畑地には蒔かずとも生える雜草であるのだ。只それに夥しい肥料を下したのが自覺時代の特色だと見るがよろしい。それはともあれシュレーゲルやノーファリスらの如きは無爲（アイドルネツス）を人間最高の理想と立てた結果、人は彼の *plant life* 植物生活の如く主として受動的になつてこそ眞人間の眞趣に近い、"*The highest, most perfect life is a life of vegetation*" 云云と言つたり、「無爲は少數の *elect* 傑士の特徵（マーク）にして特權（プリビレツヂ）である」と言つたり、「無爲は無邪（インノーセンス）と神來（インスピレーション）とを生活せしむる雰圍氣である」と言つたり、全力を傾けて無爲生活の回護を試みた。

ロマンチシズムの先進連は既に斯くの如く無爲といふことを是認した以上は、それが流れて懶惰（インドーレンス）となつたり、無目的（パルポースレツス）の生活となつたりしたからとて介意する筈も無く、又介意したところで勢ひ如何ともしがたかつたに相違ない。又既に不羈（ローレツスネツス）といふことを推稱した以上は、それが墮して甚しい放肆とならうが邪侈とならうが、是れ將た如何ともしがたかつた。又既に享樂（エンジヨイメント）を主眼とした、それが荒んで肉の歡樂とならうが、酒色の耽溺とならうが、邪淫、亂行、悖倫とならうが、これ將た如何ともしがたかつた道理である。詮じつめて見ればロマンチシズムの流弊も、ルネサンスの流弊も、其文藝に關する限りは絕對私慾的といふ點に相通ずる所のあるは明かだが、彼れが飽迄も積極的、活動的、男性的、實際的であるのに對して、是れは消極的、受動的、女性的、空想的であり、又彼れが大體に於て樂觀的であるに對して、是れは兎角悲觀的、絕望的であつて、如何にも懦弱だ。藝術家としての弱點もこゝにあるが、殊に人としての病患が之れより生ずる。彼の「天才は一定の目的（パルポース）なくして生活するもの」などいふ思想は、早く既にヘルデルが唱へたといふとだが、それは寧ろ客觀的、歷史的に觀察しての批評であつたらしいのを、それを主觀的、自意識的に主張して無爲懶惰の意味に解したのはロマンチシストの自分勝手で、要するに詩人藝術家肌の無精（ぶしやう）な根性の辯護たるに外ならぬのである。一言以て蔽へば、自分勝手な、懶惰根性の人生觀であつて、主觀的といふうちにも見聞の狹隘な、理想主義とは言へど空漠として捉へどころの無いといふのが獨のロマンチシズ

ムの要旨であつたのである。かやうな次第で、最初は主として藝術上の絶對個人主義——卽ち高雅な品のよい主我說(エゴイズム) *refined egoism*——であつたものが、後には世間的な、時としては卑むべき絶對個人主義ともなつた。*Frenche* が其『獨逸文學史』に於て此狀態を敍述した序(ついで)に之れを評して「發狂せる個人主義」"*Individualism gone mad*" と言つたのも、其醜方面に就いて觀れば尤もだと思はれる。チイクが作の "*William Lovell*" (一七九五—九六)やフリードリッヒ・シュレーゲルが作の "*Lucinde*" (一七九九) やノーファリスの作 "*Heinrich von Ofterdingen*" (一七九九—一八〇〇) などは此傾向といふよりも此種の理想を表白してゐるものだとフランクは言つてゐる。尙ほ同じ史家は大分手嚴しい言葉で評して曰ふ「*Lucinde* の如きは破廉恥なる淫蕩の讚美(グロリフイケーション)にして兼ねて無責任の氣隨(カプリス)の尊崇(アポテオシス)なり」、云々。讀んだことの無い作だから何とも言へぬが、その主眼となつた筋は猶太人の妻に通じた自分の經驗に基づいたのだといふから、或ひは見やうによつては此評が當つてゐるともいへよう。其當時此作に關してシュライエルマッヘルが辯護を試みた事その他は例のブランデスにくはしい。勿論かやうな文藝家の主張も今日に在つては異とするには足らぬ。寫實派、自然派の小說家中には是れ以上に進んだ個人主義を主張する者が幾らもある。佛のデカダン派なぞの主張もロマンチストに駕して上るものと言つてよい。但しさういふ主張が爛んになつた最近の火元はといへば、主として獨佛のロマンチシズムであることは明かである。

嘗て我國で唱へられた本能滿足論や美的生活論、若しくは近頃唱へらるゝ自然主義的生活論の如きも、畢竟はロマンチシズムの餘流を酌んでゐるもの。ロマンチシズムの歷史に通じてゐるならば、之れに對して何も今更事々しう耳を欹てるにも及ばぬわけである、むしろそれよりも彼方に於ける一百年間の思潮が一時に我國に入り來つたといふ點に思慮を傾けて、徐ろに其處決法とか善後策とかを案じた方がよいと思ふ。

ロマンチシズムの流弊と言ふことに關しては前々に擧げた獨佛の文學史の外に *Nordau* の "*Degeneration*" やそれを駁した *Hirsch* の "*Genius and Degeneration*" やを參考して貰ひたい。序ながら主として英國のロマンチシズムに關しては前に擧げた筈の *Beers* のがよく、次ぎに *Phelps* の "*The Beginning of the English Romantic movement*" も一寸役に立つ。獨逸文學史の入易いのは(無論英書だが) *Gostwick* と *Harrison* と共著の "*Outlines of German Literature*" 又 *Oxar* の『十九世紀日耳曼文學研究』も佳いと思ふ。*Turner* の "*The Modern Novelist of Russia*" もツルゲネフ以前のロマンチックな傾向を見るに足る。*Kropotkin* の "*Ideality and Reality in Russian Literature*" は無論面白い。*Dvaden* の "*Studies in Literature*" も佳い。*Oliff* の "*Manual of Italian Literature*" も一讀する必要がある。それから諸家の合著に成れる "*Periods of European Literature*" のうちの *Romantic Revolt* 及び *Triumph* も參考すべきものである。

上に屢〻ノーファリスの名を擧げたから特に斷つておく必要がある。ノーファリス、本姓は *Hardenberg* は——獨逸ロマンチシズムの豫言者とさへ呼ばれて——其筆舌に主張した所は、前に語つた通り、隨分極端なものであつたのだが、その實際世間に處する時の態度は決してその說のやうでは無

かつた。これはチイクやシュレーゲルやその他の詩人とは大ぶ趣きを異にしてゐたのである。彼れが沈鬱な神祕家風の抒情詩人であつたことは事實だが、二十五歳頃に既に官邊に擧げられ、吏員として謹直に精勤した事、少しも俗人と異ならなんだといふ。卽ち彼れの主張は全く理想上の沙汰であつて、世間人としての彼れの勤務振の上には何等の關係をも及ぼさなかつたのである。或ひは是れは病軀の止むを得ざらしめたのかも知れない。彼れは肺を病んで（一八〇一年）まだ二十九といふ壯年時代に亡くなつてしまつた。主張と實行とが同じでなかつた點と其主張が誤解され易く濫用され易い點とは頗る後のニイチェに似てゐると思ふ。ニイチェは、あの通り、其理論上に於ては絕對個人本位に立脚して、權力主義を唱へ、健鬪を鼓吹し、善惡標準の根本的顚倒を主張して怖ろしく强さうなことばかり言つたのだが、其人柄は存外に溫和な、屛居的な、神經質的な、詩人肌の學者と言つたやうな男であつたさうな。種々複雜な原因があつて、あのやうな激烈な說を唱ふるに至つたので、本來はロマンチックな優しい性格であつたらしい。或ひは詩人肌の習ひとして智と情とは餘りあつても實行の意と勇とは足らないから、そこで筆舌の上だけが人十倍に激烈になるのではないか。又人柄によつては自分自身は、到底それを實行し得る勇氣も力量も無いが爲に、せめて他人をしてそれを實行せしめたいと有意無意の間に希望することもあらう。又八當りに筆の上で平生の悲憤を洩すといふ例もあらう。ブランデスは獨逸人の性質を評して「內には忌むことを外面だけは默

從する癖がある」といひ、ゲーテらの作の結末が何時も敎訓的になつてゐるなぞもそれがためだと言つてゐる。若し果して然うならば、ノーファリスの場合やニイチェの場合にも、其性癖が百尺竿頭只幾歩を進めたといふまでの事で、その自ら實行することを躊躇するのは、同じく是れ獨逸文學者氣質の然らしめた所だといふべきものであるか、どうか、暫く疑ひを存しておかう。

以上甚だ簡疎ながらロマンチシズムを解剖して略その肝要な要素だけは擧げ得たと思ふ。勿論これでは悉してゐない。ユゴーを旗頭として崛起した佛蘭西のロマンチシズムには、又おのづから玆に漏れた特質も附帶したのであつたが、それには說き及ぼす遑がなかつた。後にイブセンといふ一偉人を出だしたスカンヂナギヤのノールウェー、乃至ツルゲネフやトルストイを出だした露西亞、何れも一面はロマンチシズムに對する反動の然らしめたのであるから、一應言ひ及んでおきたいのであつたが、とう〳〵手が屆かなんだ。英國のロマンチシズムとても細別すれば、第一期と第二期とに分れる。スコットやバイロンやウァーヅワースやコールリッヂは第一期、彼のラファエル前派などは第二期とせねばならぬ。

又特に新ロマンチストと名づけねばならぬ文學者もある。ロマンチシズムといふことを最廣義に解して一々算へはじめたなら、中々以て今までに語つただけでは盡きない譯になる。併し自分の

本意は所謂ロマンチシズム、卽ち其全盛期に於けるロマンチシズムの要素を分析解剖して其關係を明かにするといふ點にあつたのだから、本流さへ明白になつたら支流や餘波は問ふ必要は無い。佛のロマンチシズム其他は、畢竟は獨、英の餘波と見てもよいのである。只讀者に乞ふ所は、本講話を讀了せられて後、更に圖表一切を一所に集め、少々手數ではあるが、程よくそれを繫ぎ合せ、其相互の聯絡鹽梅を、稽査せられんことである。然らんには、多く辯ぜずとも、ロマンチシズムの反動として寫實主義や自然主義の勃興し來つた理由はおのづからにして辿り知るに難からざるのみか、他方に空想哲學を排斥して科學的研究を呼號する聲が猛烈となり、それにつれて歷史的研究とか、比較研究とか、常識の修養とか、社會的敎育とか、個人主義に對する社會主義の主張とか、その他ロマンチシズムの所唱とは直反對のやうな主張が相ついで群り起るやうになつた因緣がおのづから辿らるゝであらう。それらはロマンチシズムの病弊を救はんが爲にのみ起つたので無いとは言ふまでも無いが、廣く時代精神の上にロマンチシズムと相通ふやうな幾多の弱點があつたことは事實である。時代病 *Malady of the Age* といふ語があるのが其一證である。それから又一歩退いて更に冷靜に考へて見ると、かゝる反動を必然ならしめたにも拘らず、ロマンチシズムには今尙ほ閑却すべからざる何等かの特長があつて、今も尙ほ折々は我々の心を誘ひかねぬ力を有つてゐるやうに思はれる。そも〳〵それは何々であらうか。かく調べ了つた上で更にまた全體を一目に見合せる必

要があると思ふ。自分の圖表が斯樣な取調の暗射圖位ゐの用をなし、兼ねて後の文學に志す靑年者のために多少の參考となれば本懷である。まだ言ふべき事が多々あるのだが、本年度の講義錄の制限もあることゆゑ一先づ之れで講をとゞめる。

- **Romanticism** ロマンチシズム
  - **Light 不自覺的**
    - (甲)新シキ美ニ憧ルル心 (厭陳腐奇の精神)
      - Natural 自然ノ
        - 野生ノマヽノ
        - 荒レタルマヽノ
        - 人口ヲ加ヘザル
        - 純樸質實ナル
        - Picturesque (洗練ナル形體式ニ反對ノテ)
        - As it is (寫生畫ノ如キ / 天眞爛漫ナル)
      - Extrmordinary 異常ノ
        - 奇妙ナル
        - 怪異スベキ
        - 測ル外レノ
        - Sensational 衝シテ人ヲ感動セシムル
          - 信ジラレヤウガナ
          - 法外千萬ナル
          - 恐怖スベキ
          - 獰猛ナル
          - 變妙果ナル
          - 汪洋ニ近キ
          - 馬鹿ラシキ
          - 身ノ毛ノヨダツカラナル
      - Supernatural 超自然ノ
        - 現世ニアルマジキ
        - 妖怪的ナル
        - 迷信的ナル
        - 特ハコト
        - 神秘的ナル
      - **Renaissance of Wonder 不思議ノ復活**
        - 話柄
        - 情趣
        - 象徴
    - (乙)珍ラシキ風景風俗事蹟ヲ喜ブ心 (好古懷風の感興)
      - 遠キ時代ノ
        - 中古時代一般
          - ブッノ風俗
          - 農奴風俗
          - 騎士風俗
          - セナノアキー
          - 羅馬正統宗等
          - Glorification of the Middle Ages 中世崇拜
            - 觀賞的
            - 實踐的
      - 遠キ國土ノ
        - 北方諸國
        - 南方諸國
        - 東洋諸國等
        - **Cosmopolitanism 萬國一如觀**
  - **Serious 自覺反抗的**
    - 感情的
      - 消極的 (退嬰的)
        - 自覺的ニ自然ヲ愛ス *Conscious love of Nature*
          - (a) 風景ノ美 生物ノ美等
          - (b) 自然生活ノ美 單純簡樸ナル風俗ノ美
            - 有形即有限ヲ避フ
            - 無形即無限ヲ愛フ
            - 空想總ベテ樂園ヲ愛フ
            - 幽思敬想憧憬憧憬ニ就ル
            - 感傷悲哀、厭世悲觀ニ傾ク
            - 夜、夢、微光、死、音樂ヲ好ム
          - (c) 空說タル理想ノ美ニ憧ル
        - 現實生活ヲ厭惡ス *Aversion to Reality*
        - **Return to Nature**
      - 積極的 (侵略的)
        - 社會的 (制度の改革)
          - 部分的 (改善的)
            - 學者ノ庇論
            - 從制度ノ改正改革
            - 社會主義ノ端
          - 根本的 (革命的) ——ルソーノ復刻主義
        - 個人的 (感情主義の主張)
          - 天眞爛漫、直情邁行
          - 自然的生活主義——情慾權 *rights of passion* ノ主張
          - *Lyricim. Subjectivism, Egotism.*
          - 放縱、驕逸、偏僻、冷酷、遲鈍、戰慄、狂暴
    - 智見的
      - 反形式主義的
        - 語法上、修辭上 *Grammar & Rhetoric*
          - 用語
            - 鳥語
            - 造語
            - 外國語
            - 俗語、學語、方言
          - 語格
          - 文體
            - 樣態、嘲笑、逸
            - 荒唐、奇怪
            - 野蛮、雜等
            - **破格**
        - 詩學上 *Poetics*
          - 形式 (詩體律格)
            - スペンサー格
            - ミルトン格
            - 無韻句
            - 長詩
            - ナッシマン
            - 十四行體
            - 劇三回間却
            - レエークスピヤ格
            - 自家獨創各體
            - **不羈奔放自由自在**
          - 內容 (題材構想)
            - 非客觀的 (主觀的) ——抒情的
            - 形式ノナキ叙事詩、劇詩的トナセル抒情詩
            - 自然、怪奇、荒唐、神秘等ノ愛玩
            - 見慣レザル風俗風景等ノ歌賞
            - 中古風俗ノ追慕
            - 純樸自然アルモノヽ愛好、僻遠農村ノ模倣
            - 空虛總ベテ夢ノ理想ノ追求
            - 婚姻情慾 (就中戀愛) 肉體の快樂等ノ讃美ナリ
    - 反獨斷說的
      - 哲學上
        - 認識論上
          - 主觀的又ハ客觀的唯心論
          - 直覺說——反經驗說
          - 神經說等
          - **新獨斷說**
        - 實體論上——元說
          - *Ego*
          - *Spirit*
          - *Idea*
          - *Will, &c*
        - 目的論上
          - 宗教的——我即神——萬有神教
          - 倫理的——大我主義——自然生活論——**本能滿足論等**
      - 文學上
        - 文學崇尊
          - 文藝ノ絕對自由
          - 唯美主義——*art for art*
          - 美的生活論
        - 天才崇尊
          - 空想ノ絕對自由——天才權ノ主張
          - 詩學、修辭、歷史、法則等ノ侮蔑
          - 直觀崇尊——創新即天才
          - 實際生活上ノ無責任——*Refined Egoism*——*Individualism gone Mad.*

近松の淨瑠璃

（明治廿三年頃）

和漢雅俗折衷の文辭に巧みなるもの、わが古今の文壇に尠からずありと雖も、眞に豐富とたゝふべきは近松門左衞門が文章にとゞめたり。しばらく詩人としての彼れが價値を餘所にして、ひとへに修辭家といふ資格より見るも、彼れはわが國有數の詞傑なり。彼れは有りとある修辭の美を集めたり。彼れはありとある辭品（*figures of speech*）を利用せり。泰西の修辭書中に見ゆる種々の辭品の例は、殆どすべて之れを彼れが文中に見出だすを得。この點に於ても、彼れは頗るシェークスピヤに似たり。たゞしシェークスピヤは主に上流の觀客の爲に物せしゆゑ、譬へばわが「能」の想も辭も上品なるが如く、着想も落筆もおのづから高雅なれど、近松は專ら中流以下の爲に作せし故、趣向も用語も通俗を旨として、間〻かたはら痛き箇處多し。たゞに卑野猥褻の筆づかひ、途方もなき荒唐不稽を避けざりしのみならず、求めて戲謔して不自然の笑ひを買はんとせし跡あり。隨つて、趣向にも、文章にも、當時の流行を當て込みたる所謂場受けの着想多し。すなはち叙事詩又は戲曲としての本文には、殆ど何の用も關係もなき文章の仇花多し。而して世間多數の賞翫家のうち、或ひは此本文に用なき仇花のゆゑに、近松が作を稱美し、彼れが美こゝにありとやうに思へるもの

もあり。今は文學の好尚も進みたれば、かゝる惑ひをいだける人は、いと尠かるべしと思ふものから、尙ほさすがに安じがたし。意は本也、辭は末なり。文章の仇花は本を離れて末に走りたるものなり。仇花のゆゑに作家を稱美するの弊は、ひたもの彫蟲の末技を奬誘し、模倣的文學を招致するの媒とならんのみ。

予は近松のいみじき修辭家たるを信ずるものなり、さもあれ彼れの文章をめでたしとするは、云ふまでもなく辭意相諧ふの妙を認めての上の事也。辭のみをほむるにはあらず。又、彼れが文をなべてめでたし、彼れが作を皆よしと信ずるにはあらず。彼れが作にもいと拙きものあり、平々凡々なるもあり。しかしながら彼れが作を是非せんとせば、まづ其作全體の本質を吟味し、彼れは如何なる旨意にて淨瑠璃を物せしか、淨瑠璃は詩の三體に配するときは、そのいづれに屬すべきものか、叙事詩か、脚本か、又は小說の一體か、此根本問題を決するの必要あり。何となれば若し淨瑠璃の本質が叙事詩ならんか、淨瑠璃を批判するに脚本の規を以てするは、水がめをおほふに釜の蓋をもてするのたぐひなればなり。

世人或ひは淨瑠璃をドラマと同視し、(或ひはドラマを淨瑠璃と譯し)、近松の諸作をドラマと心得たるもあれど、恐らくはひがことなるべし。淨瑠璃は一種の律語的小說、すなはち叙事詩の一體と見るが至當なるべし。若し其劇に演ぜらるゝゆゑをもて、强ひて脚本視せんとならば、特稱して叙事詩的脚本卽ち (epical drama) など名づくべくや。叙事詩には地の文あり、ドラマには地の文なし。ドラマにも、時としては、序曲又は跋曲などと譯すべき本曲外の文句もあれど、それらは我が淨瑠璃の地とはひとしなみに見做しがたし。或ひはかくいはゞ、淨瑠璃を挿入するは、我が劇の特質也、現に今の正劇の脚本にも、チョボといふ者あるを見ずや。而してチョボは淨瑠璃の地也、泰西の脚本にチョボなしとて、チョボあるは脚本ならずといふは、偏局なる拘泥の說也、といふ者もあらん。此說恐らくは非也。予思ふに、チョボと、淨瑠璃の地とは、その質と由來とは同じけれども、其用は異なり。義太夫、卽ち語りものとしての淨瑠璃にありては地の文は主にして詞は客也。演劇用としてのチョボは單に演技の幇助なり、科介の隱微を說明するの具のみ。されば義太夫語りとチョボ語りとは、その語りかたに若干の差ありて全く同じき物にあらず。チョボは泰西の劇に謂ふ傍白(アサイド)の役目をなし、且つ之れと同時に演技を幇くる爲に、一種の音樂を供するものなり。脚本が本具すべき要素にはあらず。これ少しく劇を知れる人の認識する所なるべし。畢竟、かゝる名稱上の事は、いづれにてもよきことのやうなれど、彼の叙事、抒情、劇といふ三詩體の區別が動かすべからざる美學上の區別なる以上は、かりそめにも嚴密の批判を試みんと企つる者は、まづ此區別を正し、さてのち作のよしあしを論ずべき也。脚本(劇詩)としては回護すべからざるものも、叙事詩の粗なるものとしては取るべき節あるべく、抒情詩としては靈妙なるも、叙事詩としては大いに非

難すべきことあるべければ也。

近松が諸作は、尠くとも其體式の上よりいへば、悉皆叙事詩中に攝すべきものなり。そも〳〵叙事詩の本性は、過去の事件を叙寫するにあり。通俗にいへば、已に過ぎ去りし或出來事をば、首尾圓合し、前後聯絡し、一まとめになるべきやうに綴り做すにあり。全篇に貫通せる本尊（主人公）あればひとしほ此圓合を完うするに便宜なれど、よし主人公無きも、事件だによくまとまりて、始終つぶさに圓合せば、之れを叙事詩（もとより廣義に謂ふ）と名づけて差支なかるべし。蓋し廣義に謂ふ叙事詩は、律語（節奏文）をもて物したる物語といふ義にて、この義よりいへば『源氏物語』、『八犬傳』、『西遊記』等、いづれも散文の叙事詩也。さて近松の諸作は三味線に和して謠ふべき一種の節奏文をもて物したれば、上説の如く、叙事詩と總稱して勿論差支なけれど、概して嚴正の叙事詩にはあらず。彼れが作には大抵、三個も四個も主人公らしき人物あり。むしろ一段毎に異なる主人公ありといはんかた至當なるが如し。就中、時代物の諸作には、この弊あり。かるが故に脚色動もすれば支離滅裂し、事件の聯絡すらおぼつかなきものあり。然れどもかくの如きは彼れが作中のいと〳〵拙劣なるものにして、中年以後の老腕に成りたるは、尠くとも事件ほどは、よく圓合し、流石に木に竹を接ぎたらんやうに思はるゝは稀也。もとよりかく事件のみを主とするは劇詩の理想とはせぬ所なれど、叙事詩の體としては必ずしも咎むるに足らざるべし。たとへ近松が叙す

る所は荒唐奇怪にして不自然なるも、その人物は、或ひは一殊能の權化、若しは或情慾を具象にせる如き頗る淺膚なるものも、それらは所詮質の上の缺點なるべく、體の上よりいふ時は、彼れの作の大半は、廣義に謂ふ叙事詩の旨意に叶へり。英の『ビオウルフ物語』、獨の『ニーベリンゲンリイド』、若しくは希の『イリヤッド』と、尠くとも體ほどは同じきものといふを得べし。『ビオウルフ』をはじめ、すべて古代の叙事詩は、をさ〳〵事件を本として作りたるもの、いづれも樂師が諷誦せしもの也。すなはち、體の上よりいへば、近松はホーマー、ヴージルらと同じ潮流に漂へるものと稱すべし。予は屢〻彼れをもつてシェークスピヤに比したれども、そはもつぱら客觀詩人たる點の似たるによれり。我が作家中、此點に於て最も近くシェークスピヤに肖たるは近松にしくはなしと思へばなり。

近松が叙事詩の性質

叙事詩人としての近松が特質いかに、と見るに、泰西の叙事詩人に於て曾て見ざる所の特質あまたあり。さるは、近松の叙事詩の雪に音樂にあはせて謠はるゝものたるにとゞまらで、（即ち耳に訴ふるものたるにとゞまらで）、一種の演劇に應用せられたればなり。くはしくいへば、彼れが作は、その體に於ては敍事詩なれども、その用に於ては脚本たり。彼れは聽かしむると同時に見えし

めんと力めたり。彼れは毎に作と三絃との關係に注意し、又毎に作と傀儡との關係に注意せり。かるがゆゑに正しく彼れを批判せんとする者は、ひとり讀むべき文章としてのみ彼れが作を觀るべからず、聽くべきものとしての價値、ならびに看るべきものとしての效果をも考へざるべからず。而して近松が最も心を潛めたるは、明かに後の二需要に應ずるの祕訣なり。彼れはこの二需要に應ぜんがために、當時存在したりしあらゆる材料を蒐集し、巧みに之れを混和したり。例へば、聽覺を悅ばしめんがためには、當時唯一の劇詩（むしろ抒情詩的劇詩ともいふべき）謠曲、及び狂言の粹を拔き、或ひは平家琵琶、或ひは說經祭文、俗歌、童謠、鄙曲、流行節、其他あらゆる謠ひものゝ要素は、自在に之れを拾收し來たりて、その作中に利用せざるなし。さてまた視覺を娛ません爲には、已に其ころ行はれたりし尙ほ幼稚なる傀儡はいふに及ばず、能狂言に於ける扮裝、科介、雅びたる舞蹈、俗間の踊の手、あらゆる興行物（見世物）、ありとある *pageant*（展覽物）の、苟も人目を悅ばすに足るべきものは、取りて以て材料とし、之れをその作中に利用せざるなし。實に目に訴ふると耳に訴ふるとは巢林子が常住の目的なりき。彼れはこの二需要だに充すことを得ば、その他を毀損するとあらんも介意せざりし也。彼れ豈に必ずしも普通の語格、文法を知らざりし者ならんや、而も節奏の爲には、わざと國文の格を破り、若しは誦讀の便宜の爲には、わざと通俗の訛語を物し、又衍字をも記させたり。今に傳はれる刊行本に、甚しき衍字、アテ字あるは、勿論謄寫者の

誤りならめど、幾分かは作者の杜撰もまじりたらんか。例へば、「澁面」など記すべきを、「十面」と書し、「かくて」を「角て」、「伴ひ」を「友なひ」、「爲り」を「成」、「夫」を「妻」など物したるは作者のあづかり知らぬ所なりとするも、他の幾多の衍は、或ひは讀ましむることを主とせずして、朗誦せしむるを本意とせし、作者巢林子の機轉にあらずや。且つ彼れは常に下等社會をもて正規の觀客とせり、この故に彼れは毎に通俗を本願とせり。是れ實に近松を評するに於て、前にいへる二條件と共に、評者の忘るべからざる要點なり。彼れは通俗の需要に應ぜん爲に、しば〳〵大いなる犧牲を供せり。明かにいへば、詩としての彼れが作の失病は、概してこの通俗主義より來たれり。彼れは無學文盲なる多數の俗衆を悅ばせんとせり。而してこの約束に從はんとせば、義經も、賴朝も、鎌足も、天智帝も、時致も、祐經も、この花さくや姫も、稻だ姫も、靜御前も、巴女も、自然の必要によりて元祿期の華奢なる流行衣裳を被りて現れ、多少當時の通語を使ひ、時としては全くの元祿人となり、則ち全く世話にくだけて、正當の看客たる下等社會の同感情を呼ばざるべからず。彼等の言說する所は下等社會の知識以外にいづべからず。菅原道眞の博學なるも、悉陀太子の高上なるも、俗衆の知識以上に論議すべからず。蓋し俗衆の知識は、支那の事蹟は、『三國史』、『漢楚軍談』、『武王軍談』、『二十四孝』のたぐひの外にいでずして、本朝の事蹟は、『義經記』、『盛衰記』、『太平記』等を極とす。こゝに於てや、作

者も人物も、常にその口を束せざるべからず。彼等は智者といへば正成、孔明、勇者といへば朝比奈、辨慶、孝子といへば曾我兄弟、忠臣といへば豫讓の古事、只管看客の解し易からんを要とせり。只管解し易からんとを要とす、故に時代ちがひ、風俗、人情の相違、史的事實の甚しき謬寫、若しくは我が神代の人物が、唐宋の古事を語り、保元平治の武將が、元以後の事蹟を引用するなどは、もとより異しむに足らざることなり。按ふに、かゝる不都合はシェークスピヤの史劇にも間〻見えたる所なれど、作者の本意に於て差別あり。シェークスピヤは幾分か史を活現せんと力めたる跡あれど、近松ははじめより史を活現せんの心なし。彼れは淨瑠璃を狂言綺語と信じ、人の耳目心を娛ましむるを主とし、かりそめに史を再生せしめんの念なし。彼れは牛若丸を德壽丸（新田義興）とひとしなみに寫し、勾當の內侍と常盤とを同じ筆にて物し、平然として懸念せる色なし。彼れが如何に『烏帽子折』をそのまゝに『出世太平記』となせるかを檢せよ、思ひ半ばに過ぎん。要するに、近松は、只管人情を寫さんと力め、個人性を寫さんと力めざりし也。彼れの作の到底史劇として（むしろ史的叙事詩として）看るべからざるは此故なり。その世話物に於て吾人を駭かしむる所以將た此同じ源にもとづける歟。

『天の網島』

この評釋は、明治廿三年十二月初旬、予が不倒子、酉蹊子、月中子等、四五の同好を會して、はじめて巢林子が作を評判せし折、手はじめの一例として物したるものにて、嘗て『日本評論』に掲げ、後に『小羊漫言』に轉載せし『女殺油地獄』の評と同時の筆なり。回顧すれば、已に滿四年の星霜を經たり。當時の所感と今日再讀して思ふ所とは、もとより多少の逕庭あれども、今尙ほ此名作に對して、死錠を下すべき精評いでたりとも思はれざれば、かゝるそゞろごとも、或ひは以て一種の他山石となすに足らんか。舊稿をとりいでて廿八年初刷の附錄とす。（以上、『早稻田文學』所載）

この淨瑠璃は、巢林子が作中にても、明かに傑作の隨一なり。文辭の妙は、今更にいふを要せず、複雜なる戀を寫して、かばかり自然の致を得たる、我が作物中稀に見る所也。予嘗てシェークスピヤが『ロミオ・アンド・ジュリエット』を讀みて切なる戀のおのづからなるに感ぜしが、今此作を評釋するに及びて、彼れと此れと、戀の質の甚だ殊なるを認めながら、尙ほ大と小と光り異なる二箇の明玉をならべ見たらん心地あり。シルレルが『たくみとなさけ』、デューマが『椿の佳人』などに比しても多く劣るべしとも思はず。此作は我が情の悲劇中の錚々たるものなり。

一篇四章中、第一章、新地河庄の場は、女主人公小春が戀の由來と其爲人とを見するをもて主眼とせり。此故に肝要ならぬ由來經歷は、すべて人物の口を借り、又は地の文もて簡叙せり。作者が當時の心は知らず、評釋の方面よりは、しか解してもよかるべし。さて時候を十月の初めとしたるは、按ふに、此話の事實にも據れるならんが、假に作意にいでたりとすれば、いみじくもえらびたり。女主人公の名にしおふ小春日和の生暖きは、人の心春に復りて、情火の燃え易き時なり。季候も、風物も、いとよく此悲劇の背景を作るに足る。秋はすべて肅殺と氣のめいるものとのみ思ふはたがへり。たゞし小春空の裏面にはさびれゆく秋の哀れも籠りたれば、一轉せば無常をさそふ因緣とも成りぬべし。

河庄の場に「この十月云々」とありて、第二章、紙治宅の場に、治兵衞の兄孫右衞門が「起請まで返して見せ十日もたゝぬに何ぢや請けだす」云々といひ、第三章蜆川大和屋の場に「十五夜の月冴えて光は暗き門行燈」とあり、さて其次ぎ網島の場も、同じ夜の出來事なれば、卽ち十五夜が此悲劇の結局なり。又、第二章、宅の場に「外は十夜の人通り」とありて、河庄の場、小春の言葉の中にも「十夜の中に死んだものは」云々の語あるを思ひ、上に擧げたる「十日もたゝぬ中」云々の語あるを思へば、河庄の場は十月五日（十夜の初日）にして、第二章以下は十五日（十夜の最終）なることしるけし。さすれば、紙治が產を破り、妻に離れ、いよ〳〵情死と決せしまでに、凡そ五

日の間ありしことを想ふべし。これ些末の事に似たれど、心の變動に關係あり。

此作戀を主因となせれば、まづ戀の質を剖析するの要あり。たゞし男女兩主人公の間に自づから主賓のけじめあり。因果の關係よりいへば、小春は主、紙治は賓なり。紙治が戀は小春を得て成りたれど、小春が戀は必ずしも紙治を俟たざりしに似たり。小春が戀は意氣地が元となりての戀なれば、いはゞ分別の伴へる戀なれど、治兵衞の戀は、諺通り、思案の外也。小春は是非を分別して迷ひ、治兵衞は譯もなく惑溺せる姿あり。小春は張の爲には、治兵衞ならぬ人にも、或ひは其命をさげしならん、戀よりも意地が主なればなり。治兵衞はひたすら小春を慕へり、この戀に、我れをも、家をも、妻子をも、忘れんとせり。戀の質をいへば、治兵衞の戀は醇粹なり。之れに反して、小春ははじめよりその心たしかにて、我れを忘れしことなく、切なる戀慕の間にも、自他の毀譽を思ひ前後の利害を思へり。必ずしも情の冷なるにはあらじ、苦海に久しく浮沈したる自然の結果なり。夫れ傾城の意氣地に於けるや、士の名節に於けるが如し、彼れらは、意氣地の爲には、間、戀をも命をも拋たんとす。良家の女と傾城とは同じさまに見るべからず。良家の少女が戀は理由なきを正例とす。何が故に彼の人を戀へるかと問はゞ、良家の女は答ふる能はざらん。心だてをやさしとほめ、ものごしを愛らしといひ、目、鼻、口等をほむるは、竟畢いひわけのみ、後にこしらへし理由のみ。說明すべからざる一種の電氣に觸れて、懵然として戀慕す、その間に何の理由かあるべ

き。彼等心すなほにて表裏なく、分別なく、遠き慮もなく、疑懼の念もすくなし。されば戀するに先立ちて、是非利害を分別せん必要もなく、必要なきゆゑに理由を求むることもなし。傾城の思慮あるは然らず、いつはり多き浮川竹に浮き沈みして、我が心の浮きたるを、又は其周圍の輕薄なるを目安として、人大かたは誠すくなし、と計量す。それゆゑ、やゝ意地あり、分別あるは、狐疑邪推の念いと深く、たとへ肌はゆるすとも、心ほどはゆるさじとす。その閲歴と經驗との然らしむる所なり。所謂傾城の意氣地は一種の自尊心なり、轉じては獻身の美德ともなり、化しては任俠の行爲ともなることあれど、その原は、所詮、自我の念の強きにあり。意氣地に富める傾城の心には、自意識殆ど滅することなし、このゆゑに、その戀にも、必ず多少の理由あり、因緣あり、只一夜相逢うて、やがて相思ふに至る例も、事實に、小說に、あまた見えたれど、何等の理由もなきはまづ例外と見做すべし、然らざれば、その傾城が意氣地乏しきならん。予は、この點に於て、梅川と小春との間に、いたく性の差異あるを見る。それはともあれ、世に傾城のなさけにほだされ、身をも家をも失ふもの多きは、戀のかく複雜なればならん。智の伴へる戀なるゆゑ、その根の深く且つ堅きゆゑなり。

小春と治兵衞との戀中は、一朝一夕にあらず。治兵衞が言葉にも、「三年先きよりあの古狸にみいられ」とあり、小春もまた「紙治さんと私が中さほどにも無いとをあのぜいこきの太兵衞めが浮

名をたてゝ言ひふらし」それがにくさに深くなりぬ、といへり。是れは朋輩への表のみならじ。さまでもあらぬに浮名たてられ「客といふ客はのきはて內からは紙屋治兵衞ぢやとせくほどに〳〵文の便も叶はぬやうになり、せかるゝほど意地にもあひたく、廣き世界に、我が身の外に女なげなる治兵衞が心中をいとしらしと思ふにつけ、その邪魔となる太兵衞を憎む心漸く切になりしならん。このいとしらしと思ふ心は、いまだ戀とは稱すべからず、同感といふほどの情にて、この同感よりも强きは太兵衞を憎む心ならん。曾根崎は意氣地の府なり、彼れこの地に來たりて金びらをきり、黃金もて傾城の情けを買はんとや、金の光に目のくらむ小春と思ふか、「小判のひゞき」「聞きともない。」是れ小春が意氣地なり、張なり。よし前にいへる同感を戀の芽とするも、こゝまでは意地が主にして戀は客なり。さるほどに叶はぬ首尾してやつと逢ふ夜の睦言に、互ひに泣いて顏見れば、情もあり、氣前もよし、才覺も、男ぶりも、と芽出しの戀へ助太刀の分別が加はれば、もはや遊女の戀も畫龍點睛なり。情こゝに至れば、雅俗、賢愚、生乙女、玄人の界無し、分別も無し、理窟も無し、理窟よりいでゝ不理窟に歸るなり。たゞ其由來を問へば、あくまでも理窟なり、思案の外で無く思案の內なり。其系圖は

（緣）治兵衛の眞實
小春（主因）意氣地――
（緣）太兵衛の金びら
治兵衛の爲人（緣）
他人の邪寃（緣）
太兵衛憎し（因）
治兵衛へ同感（因）
戀

治兵衛の戀に至りては、趣きを殊にす。「年三十に垂とし勘太郎、おさえといふ六歳と四歳の子の親」とあり。又網島の場に「十九と二十八年」の文句もあれば、妻もちてより尠くも六年を經たるならん。さすれば、世のさが知らぬ際にあらず、などてさしも迷溺せし。六年前に妻を娶りきとすれば、その頃は二十二なり。今の時勢にていへば、二十二歳は稍〻分別のつく齡なれど、太平無事の世に、所謂おんばの日晴傘すぼめると同時に、若旦那ともてはやされ「六間々口の家」ゆづりうけし身は、何の分別もなき雲の下の華族也。さて小春を買初めしは、三年前とすれば、二十六の春か、二十五の冬なるべし。是れ人生の春、最も色に迷ふべき年ごろなり。その初會は友達の參會くづれ歟、年若きうちより子澤山にて、世帶じみし女房の正直一方、誠一方を女と思ひこみたる心は、忽ち「妓が情の底深き戀の大海」に溺れたり。治兵衛の初心なる心は「心中よし意氣方よし床よしの小春」のもてなしにとろけたり。彼れが戀は *love at first sight* なり、且つはじめは肉の

戀也、而も肉の戀より情の戀へは其間只一歩のみ。小春が「さまで思はぬ」に通うてゆきしは愛せし證にて、かはゆきゆゑ愛す、といふ理由の外には「意氣かたよし」とか、「心中よし」とか、「床よし」とか、誰もいふ理由ありしのみ。かくて太兵衛とのさやあて、又はせかれし事、又は小春の心中のやゝ見えたるなど、皆戀をつのらしめし緣ならめど、皆緣にて因にあらず、いはゞ、反動の作用、すなはち理窟の沙汰にあらで情の沙汰なり。所詮、治兵衛の戀は、理窟を離れたる思案の外の戀なれば「兄の異見を受くることかは、舅は伯母聟、姑は伯母、親同然」の剛意見も、「一家一門の悔み」も、女房の心づかひの諷諫も、糠に釘ほどのきゝめなし。然るに、小春の戀は思案の内に意氣地が生みし戀なれば、おさんが切なる賴みには、山海に誓ひし心も動けり。くるわの張（名譽）は身のため、浮世の義理に男と切れるは、人間の張（名譽）、前は私慾、後は公道、切れともなさは山々なれどゝ、こゝ小春の苦しみは、大小の相違こそあれ、彼の小松の大臣に劣ることなし。おさんの文を讀みし後數刹那の苦惱思ひやるべし。くるわの張は何のためぞ、人の身の耻を思ふゆゑ也。死ぬとも治兵衛どのを思ひかへじ、添ひとげんと焦るも、太兵衛面に耻かゝせ治兵衛の面たてさせん爲のみ。所詮は、これを道と思ひ、人がましかれと願へれば也。しかるに、若し義理を棄て人情を忘れ、この賴をきかずもあらば、何面目に人に面をあはせん。切られぬを切る、傾城の張ならずや。この果斷も意地の所爲、彼の戀も意地の所爲、心始終たしか也。さて一たび胸を据ゑ

ては、治兵衞にあひたしとは、かりにもいはねど「若しや太兵衞にあはうか」といふ氣づかひは尙ほやまず。太兵衞面憎しといふ念は戀の因なり、戀は思ひ切つても、此念ばかりは切れぬなり。爰が女氣の本體なるべし。さて武士が太兵衞をこらして後、「紙屋〳〵とよしあしの噂をきけば身に應へ思ひくづをれ恍惚」とある、これを切れともなさの苦惱とのみ見るは當らず、我れは死ぬより外に分別無しと分別したれど、夫には何として分別させう、と切れぬ思案のなみだ也。小春が十死一生、阿鼻叫喚の相也。はじめてあひし侍士に對ひ「同じ死ぬるにも十夜の中に死んだものは佛になるとは定か」とは、苦惱の爲に我れを忘れたる譫語と見るべく、「定めし此喉を切るかたがたんと痛いでござんしょの」とは譫語の頂點と見るべし。作者恍惚の二字を點じて豫めこの無意識を表す。二字千斤の力あり。されば小春の斷末魔は「風誘ひくる念佛に彌陀の利劍と貫かれそりかへりにし曉の見果ぬ夢」の刹那にあらで、この恍惚時の前後にあり。かの網島の韓くれなゐ、血汐に染みての四苦八苦は、偏に肉の苦痛也。こゝは魂の七顚八倒、眞如無明、有漏無漏の界、此世あの世の瀨戸なれば、さすがの張も切れ、意氣地もちぎれ、胸も腸も寸々にならんとす。されどこの數刹那を過ぎては、心たしかなること山の如し。見知りある脇差に突かれぬ胸は貫けど「醉狂のあまり色廓にはあるならひ、沙汰無しに往なしてやらんしたらナァ河庄さんわしゃよさそうな」とおちつきし口吻「此喉をきるかたがたんと痛いてござんしょの」とあどけなく問ひしとは霄壤の差なり。情ありげなる侍客を得て男を救ふべき思案成りしに度胸のきまれる也。畢竟、意地が元なれば、賴みの通り男と切れ、其命を救ひ得べしと思へば、その俠魂晏如たり。

治兵衞の戀は然らず。我れを忘れ、身を忘れ、思案分別を離れたる煩惱なり。曰はく「可愛や小春が背けた顏の痩せたことわい、心の中は皆たれが事」と。女の心には義理も意地も戀もあるをや。又只一言の心變りをきいて「扨は皆僞か、腹のたつ、二年といふもの化された根生腐りの狐め」と齒を切りて怒り、數十度の剛意見も馬耳の風ときゝし身が、此時ばかり大地を叩き「誤つた〳〵兄者人」と後悔し、たちどころに起請を寸裂す。是れ分別の後悔ならず、一向に情の反動なり。憎し、怨めしの情が此英斷をさするなり。小春がおさんに義理をたて、世間に義理をたてゝ思ひきりしは意地にて、意の作用なれど、これは情の作用なり。愛せしもいとしといふ情のわざ、切れるも憎しといふ情のわざ。其間に分別なく思案なし。

第二章、紙治宅の場には治兵衞の本性を見せたり。小春と切れて十日に垂とす。懊惱たる物思ひ忘れんとして忘れがたし。さりとて「ふッつり心殘らぬ」といひ放ちて起請を裂き棄てしは兄の手前ばかりならず、我が心に對しての誓言なれば、破らんやうもなし。三年の間いひかはしゝ女、この心變あるべしや、と他人ならば疑ふべきが、現在女の口より明かに不實の證據はきゝたり、疑はんによすがなし。奥の「炬燵に轉寐」は我れながら譯のわからぬ物思ひのせうことなさにて、

分析すれば、この物思ひは、小春憎く且つ戀しく、且つ怨めしく且つ戀しく、且妬く且つ戀しく、且つ忘れたく且つ忘れともなく、且つ棄てたく且つ棄てともなしとの心也。然れども治兵衛自身は、戀し、忘れともなし、棄てともなしの三原素の心に在るをみとめぬなり、みづから其心に問ひて、認むべからざるを知れば也。而も影のやうに、幻のやうに、みとめらるゝが苦しく、遣り所なく、何事も手につかず、只譯もなくむしゃくしゃ鬱々として轉寐す。是れ情火の靈なる所也。世の中は道理ばかりで押されず、道理はあくまでも「女を狐とし狸としャジリ切」と定めたれども、一片の靈火なほ存じて道理の礎を動かさんとす。道理は磐石の如しと雖も、其礎はすわらぬなり。戀の力の廣大無量にして間合せ小説に見えたる煙のやうなものにあらぬを見よ。

されど、これは情の上のみ。理性上にては、已に醒めたり。されば其毅然たること丈夫たるに恥づる無し。その伯母、兄に對ひての分疏の如き、玲瓏として内に蟠れる所無し。就中、誓紙かきても誓ふか、といはれしに答へて「何がさて千枚でも仕らう」と斷然と言ひ放ち、神色自若たる所疚しき心ある者の得て粧ふべきにあらず。一時逃れの口上ならぬことたしかなり。伯母、兄の「門送りさへそこ〳〵に炬燵の中へもぐりいり、枕に傳ふ涙の瀧身の浮くばかり泣き」たるも「人の皮着た畜生女」に名殘をしみてにあらぬ事、げにみづからもいへるが如し。かの一片の靈火の胸にこだはりて、我れを泣かしめんとせしことは、前にもしば〳〵ありけめども、理性ゆるさゞりければ泣

かまくして泣く能はざりしに、今や其理由なき苦惱に一條の理由出來たり、理性のゆるす理由いできぬ、されば鬱勃たりし滿腔の痛哀堤を裂いて迸りいでたり。爰に至りては鬼神といふとも泣くべし、まして感情の塊紙治その人に於てをや。理由とは分析すれば左の如し。

一小春に心は殘られども彼れが誓ひを破りしことといと憎し、いと口惜し、しかれどもこれは尚ほ忍ぶべし。

二我が戀の因緣ともなりたる仇敵太兵衛に請けだされて、我れを愚にす、憎し、口惜し、しかれども かゝる四足女に心は決して殘られば、これは尚ほ忍ぶべし。

三只太兵衛めがインゲン吐き、治兵衛身代息ついての、金に手詰つてのなどゝ、大阪中を觸れ廻り、問屋中の突合にも面をまぶられ生耻かく、胸が裂け、燃える、口惜し、無念……

是れ豈に理性のゆるす理由にあらずや。而も其實は「名殘惜しや」の一念が形をかへて發したるに過ぎず。如何ばかり無分別の者といふとも其情を外に發せんとするや理性のゆるしを俟つことおほむね斯くの如し。

さて、女房おさんが一部始終を、明かすに及びて、治兵衛の大夢初めて醒む。前に醒めたるは夢中の夢の醒めたるに似たり、眞に醒めたるにあらず、玆に至りては四方豁然たり。十日の間畜生よ惡魔よと罵りし小春に對して、この時一片の疑ひをだにさしはさまざるを見ても、この間惡魔と罵りしは、畢竟、情の反動にて、本心は依然小春の誠實をみとめたりしやしるけし。加之、前に醒め

たる時は、小春を罵れども我れを罵ることなく、女の非を舉ぐれども、我が非を算へしことなかりき。この時は然らず「あまりに冥加恐ろしい、此治兵衛には親の罰天の罰佛神の罰は當らずとも、女房の罰一つでも將來はようない筈免してたもれ」と手を合せ、現在の妻に詫ぶることを耻ぢず。前には小春を忘れざれば、彼れの非を口にし、今は我より非を覺りたれば偏に我が非を算ふ。さきには女が主にして今はおのれが主なり。是れ豈に醒めたるものにあらずや。

治兵衛已に醒めて是非を知る、故に、俠婦小春を見殺しにすることの人情にあらず、又義にあらざるを知る。おさんはもとより義を知れり、一家の爲に人情を犧牲にせざる可からざるを知りて、忍びて小春に依賴する所ありき。但し一家の安寧とは、重に我が身に關する事なり、我が身の爲に俠婦を殺すは道のゆるさゞる所なり。おさんよく此理を知れば、今また泣きて事實をあかし、夫に小春を救へと乞ふ。當下治兵衛の心中に一私情と二公情と相鬪ふ。一私情とは小春を愛する情にて、二公情とは俠婦救はざる可からずといふ心と此義ある妻も犧牲にす可からずといふ心となり。若し治兵衛の心中第一の公情のみなりせば、おさんの金を取りいで、與ふるに「始終さしうつむき」躊躇するを要せじ、又以前の如く醒めずして偏に私情のみならば、又何ぞ躊躇すべき。されど今は是非の分別あきらかにて、私情の胸にあるを知れる故、此第一の公情を或ひは私情ならずやと疑へり。若し私情をもて公情と誤り、第二の公情に背かんには、即ちこの憐れむべき妻、この至誠なる

妻、この義理がたき妻を犧牲にせば「佛神の罰おそろし冥加おそろし」、小春救ひたしとは私情ならじか。公情なりや否や。よし私情ならじとも、第二の公情といづれか重きぞ。勿論、かう明かに辨へしにはあらざらめど、此刹那の躊躇を分析せば、紙治が良心の安んぜざるに歸すべく、またその安んぜざるは私情と公情と相鬪ひて、私情のやゝ重きに偏れるを認めたるに歸すべし。而も紙治が私情は純然たる私情にはあらで、公情をも含めばこそ、醒めたる紙治の本性も、終に此情を退くる能はず、煩悶してこの私而公情と第二の公情（即ち妻を犧牲にせざるべしといふ心）とをして兩立せしむべき道を求めて以爲へらく、たとひ此私情にしたがふも此義ある妻を犧牲にせずば、公情の並立を得べし、只その方法を如何にすべき、と。即ち涙の中に妻に對ひて曰はく「手附渡して取止め、請出して、其後圍うておくか内に入るゝにしてからが、其方は何と成ることぞ」と。私而公情たる小春に對する心と公情たる妻に對する心との間の苦鬪なり。

さて竟に至誠なる妻に勵まされて、私而公情の指圖にしたがへるは、私情に溺れ、愛に溺れ、第二の公情を忘れ、即ち義を忘れたるに似たれど、紙治の心中を分析すれば、必ずしも然らざるものあり。何となれば、彼れ此咄嗟の間に丈夫的決心をしたればなり。彼れは果たして此決心を實行し得べかりしや否やは、命つたなかりしかば知るに由なけれど、尠くとも此瞬間には彼れの良心平にして私情公情並立の方を案じ得てたしかなりき。曰はく

「譬へば治兵衞乞食非人の身と成り、諸人のはしの餘りにて身命は繋ぐとも、おさんは急度上に据ゑ、憂目見せず、辛い目させず、添はねばならぬ大恩あり。其譯は、月日もたち、私の勤方身上持直しお目にかくれば知るゝ事、云々。」

と。是れ豈に兩立の法を案じ得たる者にあらずや。此刹那には治兵衞が心天地に耻づる所無し。されど舅五左衞門が此言を信けざるも理あり、三年越の遊冶郎の言の信けがたきは其筈なり。此に於て、治兵衞の進退は谷りぬ。俠婦も救ひがたく、義妻にも報いん望無し、人情もたゝず、義理もたゝずましてや私が私情をや、戀をや。戀一つ遂げがたきも治兵衞を氣死せしむるに足らんを、ましてや、人情もたゝず、義理もたゝざるをや。望悉く斷絶せり、靈氣悉く死に了んぬ。魂已に死せり、肉豈に惜しむに足らんや。「オ、治兵衞が去狀、筆では書かぬ、是れ御覽ぜ、おさんさらば」と脇差に手をかくるは自然の所爲にて、治兵衞が心に於ける唯一業果也。此時の決死は、情の沙汰のみにあらず、理性もまた沙汰する所也。

治兵衞已に其妻と斷緣し了んぬ。妻に對する公情は最早繫がんに由なし。「おさんは舅に取りかやされ暇をやれば他人と他人、離別の女に何の義理」もある事無し、只剩す所の情は俠婦に對する公情と情婦に對する愛とあるのみ。前者は義理也、後者は人情也。更に又一つの情あり、二人の子に對する愛情也。而して前の義理と人情とは、その目的一つなれば容易く合して一となる、卽ち小

春と共に死なば、一は人情に適ひ、一は義理に稱ふべし。卽ち情死すべしと決心す。只夫の幼兒をいかにせん。我れ死なば孤兒となることの哀れさよ、罪なき顏の名殘をしさよ。さらばとて、生ながらへば、情に背き、義に逆き、而も我が子の顏を見んよすがなし。死なば、情も立ち、義も立つ。嗚呼死ぬべきなり。

卽ち陰ながら兄を拜して「猶ほ此上のお慈悲には子供が事を」、と涙にむせびて此兩支の情の一端を棄て、偏に小春にむかはんとす。蓋し、二十八年の大夢はじめて醒め、義理をさとりたる今となりては、もはや情の爲に存ふる心なく、義の影だにある所に就きて、命を終へんと願へるなり。曰はく「心に物をいはせては十惡人の此治兵衞」と。一生の災はすべて皆我が心より生じたり、自業自得の業果のみ。天を怨みず、人を咎めざるものは悟れるに近からずや。將に死なんとす、一言だに太兵衞に及ばず、人を怨みざること明か也。些も舅のつれなきをかこたず、人を怨みざること明か也。治兵衞毅然として因果の止む可からざるを悟りぬ、その將に情死せんとするに臨みても其心泰然としておのづから樂める色あり。他無し、悟りたる所あればなり。此に至りては小春の心と相背く、小春の心には安んぜざる所あり。

第二幕の小春は泰然として死を決せり、我が情を棄てゝ義を取れるを自識したれば也。情夫に對する私情を棄てゝ浮世の義理にしたがへる事の公にして貴きを意識したれば也。然るに今や大いに

趣きを異にせり。命の必然とはいひながら事外より破れて我が義全く破れたり。救はざる可からざる治兵衛を今は救はんに由無し。曰はく

「おさんさまより頼みにて、殺して呉れるな、殺すまい、挨拶切ると取替せし其文を反古にし、大事の男を唆かしての心中は、流石一坐流の勤の者の義理しらず、爲者と世の人千人萬人よりおさん様ひとりのさげすみ、恨み、嫉みも嘸と思ひやり、未來の迷ひは是れ一つ。」

げに此一つの迷ひあり、唯此一つの迷ひあるのみ。最愛の男と死を共にす、味氣無き世にこの上の願ひ何かあらん。死ぬる命は網島の艸葉の末に置く露の、つゆばかりだに惜しからず、この世に思ひ置く事なし。「心殘りの事あらばいうて死ねよ」といはるゝも只「何も無し何もなし」、今世の我が樂は成就圓滿したれども、只、只一つ迷ひの種は、そもや二人がなれそめの、その因緣の因緣の、意地を破り、張を折り、義理を得たてゞ死ぬること、人でなしといはれんと、つらし、口惜し胸苦し。この一つの迷ひばかりは、いまはまでも離れぬなり。小春の戀は意地にはじまりて意地にをはる。戀の成らざりし前に意地ありて命の終らんとする時尙ほ意地あり、而も其意地を成せずして逝く。小春は意地の私情たるをその最期までもえ悟らざりしなり。小春の戀は純粹の戀といはんよりは意地と戀との混淆なりといふべし、故に、戀は遂ぐれども安んぜざるなり。治兵衛の戀は純粹の戀なり、故に我が情婦と共に死ねば戀の目的は圓滿せるなり。彼れに迷へる實ありて此れに樂

める實あるは、この相違に基けり。元より肉體の上よりいへば「九三年もなじまいで此災難」にあへること、戀の圓滿とはいひがたしといへども、之れを魂の上よりいへば、娑婆に心を殘さずして愛する女と共に死ぬるは戀の圓滿成就なり。而して紙治の心中、已に人界を棄て去れる悟あり。

「夫よ〳〵此からだは地水火風、死ぬれば空に歸る、五生七生朽せぬ夫婦の魂離れる驗」と黑髮を切り棄てたる刹那の治兵衛は、まことに發菩提心なり。その心水の如く淡く、その胸月の如く明し。毛頭肉情の影も無し。嗚呼、治兵衛は肉情よりいでゝ戀に入り、戀よりいでゝ一種の覺に入れるなり。されば第二幕までは、小春賢にして治兵衛愚なるが如く、小春分別ありて治兵衛分別無く、小春意識して動き、治兵衛無意識にして動きしが、此に至りて局面倒に一轉す。見よ意地を義なりと誤解して、中有に迷へるは小春なり、形體已に死なんとして魄未だ死に得ざるものは小春なり、四大空に歸らんとして尙ほ有漏無漏に迷ふ者は小春の心なり。小春は、迷へる故に、愚痴なり。治兵衛は、悟れる故に、義理分明なり。「髮を切つたれば出家の身、三界の家を出、妻子珍寶不隨者の法師、おさんといふ女房なければ、おぬしが立つる義理も無し」心を安うして死ねや、といふ。是れ小春を安んぜんの方便なり。治兵衛の安心は、死を決したる前にあり、何條此に至りて髮を切りて此如き口實を細工するを要せんや。「捨身の品も所も替へておさんに立拔く心の道」云云といひ、男女死場を異にしたるも、是れ亦た小春を安めんとてなり。我が安心の爲にはあらじ。

そのはじめ無意識所動的の治兵衛が、終に爰に至りて有意識能動的の丈夫となりて、無明の暗中にたゞよへる憫れむべき小春を救へるを見よ。

治兵衛の安心は自力にして、小春の安心は他力なり、治兵衛を得て安心瞑目す。男女の性別躍如として紙上に跳る。「こなさん夫で死なしやんすか、所を隔てゝ死ぬれば、側に居るも少しの間、此處へ〳〵」と手を取りあひ、「及で死ぬるは一思ひ、嘸苦痛なされうと思へばいとしい〳〵」と止めかねたる忍び泣き。嗚呼、是れ何等の悲哀の聲ぞ。安心は得つれども悟らざること明らけし。

「縊くるも喉突くも、死ぬるにおろかあるものか、よしない事に氣をふれ、最後の念を亂さずとも西へ〳〵と行く月を、如來と拜み目を放さず、只西方を忘りやるな。」

毅然たり、玲瓏たり、此聲已に人間の聲にあらず。父親の「今死ぬるとも何心なくすや〳〵と、可愛や寢顏見るやうな、忘れぬは是ればつかり」と小春の愚痴に誘はれて、最期に殘す只一言、子に對する煩惱の暫くさまよへるを咎めんや。蓋し、治兵衛の覺は精進勇猛の果にあらずして、戀よりいでし菩提心也、戀より得たる頓悟なり。元より絶對の悟にはあらず、相對の悟なり、卽ち小春を得て成れるなれば、少しく小春を離るれば、再び凡夫に歸らんとす。此最期の慟哭は小春に離れたる油斷に因す。「定めておふたりの子達の事氣にかゝろ」と不意に小春にいはれたる、是れ晴天の霹靂。この刹那は小春客觀となりて、我子主觀となれる時なり。相對的菩薩たる治兵衛その人に

あらざるも、或ひは晴天の霹靂には愕然たらん。其不意の聲たるは「アレひよんな事をいひだして」と治兵衛が叫べるを含味して知れ。然れども是れ只一時の迷ひのみ。「泣顏殘すな殘さじと、莞爾と笑顏のしろ〳〵と」おちつきて女を殺し、羽織打きせ、死骸をつくろひ、從容として死につける、最期のふるまひ男たるに耻ぢず。巢林子終に男の男たる本性を寫破して餘蘊無し。

卷を措きて瞑想すれば、戀の體髣髴として心眼に映ず。一男一女の煩惱をさ〳〵戀に因緣す。滿篇の悲哀その根底を叩けば、皆この戀に因緣す。彼れの痴、此れの愚、彼れの非、此れの惡、一つとして此煩惱に因らざるは無し。而して紙屋治兵衛は、この戀に纏綿せる他の煩惱を解脫し去り、純一の戀を成就して大覺し、小春は此戀に纏綿せる俠氣を棄て得ずして尙ほ迷へり。思ふに戀は情の靈明なるものなり、その濁る（雜駁）や迷裏に迷ひを生み、その淸むや（純一）迷裏に如々を現ず。巢林子この理を覺悟して、此相を寫破せしか、將た知らずして瞑識せりしか、我れもとより之れを知らず。恐らくは竟に之れを知るに由なからん。

『女殺油地獄』

（明治廿三年）

『女殺油地獄』といふ淨瑠璃は、享保六年の作と聞えたれば、近松門左衞門が六十八の作なるべし。近松の世話物、大かたは男女相着の痴情を臺として綴りたるが例なるに、此れは一個の我儘子の專恣、放逸、悖戾、剛腹なるをもて骨子とせり。用心、例と異なるに似たり。しかしながら、然思ふは讀む者の力負といふものにて、作者は別段の用心もなくて、譬へば、今の世の新聞記者が雜報をものすらんやうに傳へ聞ける儘を種として、巧みに潤飾したるに過ざるべし。しかはあれど、物は見やう次第にて如何やうにも見らるゝものなり。木の實の摽ちたるを見て、木の實摽ちたりと見てさてやまば、重力をさとる便もなかるべく、春去り、秋來るは自然の法なりと、掻撫に見てのみやまば、榮枯盛衰の理を證すべき機遠かるべし。仁の一字を、甲人は釋して個人に對する小愛とし、乙人は釋して宇宙を掩ふ大愛とす。これも釋する人の心々なり。眼を開きて觀る時は、三瞬の間にも、三世因果はあるべき理なり。物は其形の大小に拘らず、大なる眼をひらきて觀察するが學問の手段なるべし、と斯う思ひつゝ手近なる近松が作を、讀むに隨うて、所感を錄せしは、去年の秋の頃にやありけん、今取いでゝ見るに、一時の感に任せてそゞろに記せしものなれば、論序整はずして愚にもつかぬといと多く、人に見すべきものならねど、往ぬるころ『日本評論』社の戸川殘

花ぬしに偶と約しつる事に背かむもつらければ、元の儘の艸稿に此はしがきを添へて一時の責ふさぎに耻をさらすことゝはなりぬ。くれ〳〵も、此評は近松が作を評したるにはあらず、近松が作を讀みたる折の予が所感を記したるに外ならねば、讀者其心して見たまへ。

〔上の卷〕野崎開帳詣の條に、大坂本天滿町の油屋てじまや七左衞門の女房お吉が三人の女をつれて、出茶屋に憩へりといふ事を叙したる序に、初めて主人公を點出し、「是れも同町筋向ひ河内屋與兵衞、まだ廿三親がゝり」といふ句ありて、〔同じ卷〕お吉が與兵衞への意見の言葉の中に「本天滿町河内屋德兵衞といふ油屋の二番息子」といふ文句あり。扨また〔中の卷〕に、德兵衞が義理ある長子河内屋太兵衞に向かひていへる述懷に、「與兵衞めに商ひの手をひろげさせ、手代も置き、庫の一軒もたてるやうにとあがいても」とありて、〔同じ卷〕與兵衞を折檻の條にも、「面倒見て大きな家の主にもと、丁稚も使はず肩に棒、稼ぐ程費ひほつく、おのれ今の若盛り、一働き稼ぎ、五間口七間口の門柱の主にと念願を立てゝこそ商人なれ、たつた一間まなかの門柱に念かけ」とあるを見れば、河内屋といふは小體に商ひせる油店にして、其義父德兵衞の着實、節儉の人物なることを知るべし。義理ある中の親子は、萬事に窮屈なるが常理なるに、主人公與兵衞がかゝる着實の節儉人の義子にありながら、其行ひの放埒至極なるは常理に背けるに似たり。年齡わづかに廿三才とあれば、遺傳の性癖は暫く措き、習ひより得たる性癖は重に家内の影響なるべし。此故に、評者はま

づ此義父と主人公との關係を詳かにせんとす。

與兵衞と其義父德兵衞との關係は、〔中の卷〕なる德兵衞の述懷に、「そなた衆兄弟は、身共が親方の子、親旦那往生の時はそなたが七つ、野良めは四つ、坊さま兄さま、德兵衞どうせい斯うせいといふたを彼奴がきつと覺えてゐる。妻もはじめは內方さまの、內儀樣のと云ふ人、叔父森右衞門殿が料見で、其方が家を見棄てゝは後家も子供も路頭に立つ、兎角森右衞門次第に成つてくれと、段々の賴みゆゑ、親方の內儀と此如く夫婦になり」きと語れるに盡きたり。爰に、德兵衞の爲人を考ふるに、其心ざま忠直にて謹愼深く、着實にて思量あり。されば用ひられても驕る色露ばかりも無く、小心翼々と己を省み、誤りて義に背き、舊主の恩、知己の委託に戻らんかと惴々と恐れ片時も安んぜざるものゝ如し。祀るや在すが如しとは、德兵衞の舊主人に對する感謝の誠情なり。彼れ舊主人の妻を妻とし舊主人の子を子としたれど、其心の底を叩けば彼れは依然たる舊手代、舊忠僕なり。子に對する時の心は、舊主人に對する時の心に同じ。慈愛は表にて、忠順は裏なり。されば、太兵衞に述懷するや、其いふ所、義父の聲にあらで、忠僕の聲なり。彼れ云へらく「尤も繼父なればとて、親は親、子を折檻するに遠慮は無い筈なれど」、「親方の子」なるゆゑ、笞を當べき所無しと。是れ豈に子を見ること、舊主人の像を見るが如きものゝ言葉にあらずや。尋常の人情ならば、世間の手前つらければなどいふべきに、一たびもかゝる愚痴をいへること無し。與兵衞が暴言を吐

けど聞流し、足蹴にかくれど抗はぬは、皆此れ同じ心の業なり。匆卒に見れば、是れ唯德兵衛の愚直にて意地無く、思量無きに因るやうなれど、與兵衛が母を打擲するに及びて蹶然とをどりかゝり、「おうこもぎ」とり續打に七ッ八ッ息もさせず（與兵衛を）ぶちする」はッたと睨む目に涙を浮べ、「ヤイ木で作り、土をつくねた人形でも魂入れば性根がある。耳あらば善う聞け。此德兵衛は親ながら、主筋と思ひ手向ひせず、存分に蹈れた」といへるを思へば、前に抗はで蹈まれしは、意地無く思量無きが故ならで、大いに思量する所ありし故なり。主從の義を思量して、不孝の義子を見ること鴻恩ある舊主人の肖像を見るにひとしき故なり。此故に與兵衛が母に逐はれて、外の方へ出行を見送りては、德兵衛慨然と聲を放ち、「あいつが貌附丈格好、成人するに隨ひ、死なれた旦那に生寫し、アレあの辻に立ちたる姿を見るに付、與兵衛めを追出さず、旦那を追出す心がして、物體無い、悲しいと倒と臥し、人目を耻」るに遑無し。げに、彼れは外聞を厭ふに遑なからん。彼れは分別（思量）あり、腕力あり、若し外聞を厭ふ心、舊主を敬へる心に優らば、實子の面前にて不孝の子に蹈にぢらるゝ淺ましき耻をやは忍ぶべき。往來繁き門の戸に臥し倒れて、放埒無慚の子の後影を見送り、婦女のやうにやは泣くべき。德兵衛の心に、一點の私無きことは前後に照していちじるし。悲むも、怒るも、舊主を思へばなり。彼れの奮然と怒れるは、舊主人の半身と信じたる我が義理ある妻を打擲せる不孝の賊兒を見つる時なり。腹を借た實の母に、今のざま、脇から見る目も物體な

うて、身が顫ふ」とは、德兵衛が心の底よりあふれたる言葉なり。「今打つたも德兵衛はぶたぬ、先德兵衛どの、冥土より手を出して打なさるとは知らぬか」とは、血涙雨となりて瀉ぐ時の聲なり。彼れの其子に對するや、義父の資格をもてせで、舊忠僕の資格をもてす。女房お澤が長子、太兵衛に語りきといふ繰言の中に、「子共に遠慮あるからは、現在腹に宿した母にも氣兼があるかと思はぬ心置かるゝ」といへるは詢なり。德兵衛の其妻に對するや、人情三分、義理七分、氣兼遠慮、纏綿たり。兎もすれば、『舊内儀』に對する心持も見えたりけん。與兵衛勘當の後、德兵衛がひそかに手じまやを訪ひ、お吉にあひて述懷せる事は、夫と婦との間に義理の鐵壁ある證據なり。德兵衛曰く、「實の母が追出すと、繼父の我等輕薄らしう止められず」と。爰にいへる輕薄は俗にいへる輕薄と同じからず。俗には、世間へ對していふ。爰は、女房一人へ對していふ、德兵衛が心中の世間は、舊主人の半身たりし女房お澤一人なること著明なり。「聞けば、（與兵衛めは）順慶町兄が方にゐるとやら、若し此あたりへうろたへて見えましたら、七右衛門殿御夫婦いひ合せ、父親は合點隨分母に詫言致し土性骨入れかへ再び内へ戻るやうに御意見偏へに賴み入る」とは、夫婦別ある證にて「二人の子供に心を盡すは、皆故旦那への奉公、今與兵衛めを追出し一生荒い詞もきかぬ親方に草葉の陰より悲みを受る不果報は、此德兵衛ひとり」といへるに、舊主を敬慕せる心の誠を見るべし。されど、彼れは、實に偏りて虚を忘れ、一個人、一身の義理に拘らひて、社交、世

間の義理を忘れ、忠僕としての本分に身を委ねて、人の親としての本分を忘れ、主恩に報いざる可らざるを知りたれど、報いすべき方法を誤りたり。蓋し、彼れ已に人の親たり。其子不義不孝ならば、子を規矯折檻せんに何の悖義かあらん。しかるに、彼れは曰く「親かたの子なれば」折檻しがたしと。是れ主從の間の義理をもて、父子の間を整へんとするものなり。金尺をもて織物をさし、藥量をもて穀物を量るたぐひなり。されば、長子太兵衞、此謬を辨へて曰く「腹に宿つた母ぢや人とつれ添ふお前、眞實の父と存ずる、軈て婿を取る程背丈のびたお梶は打叩きなされても、不道者には拳一つあてず、ほたえさせ、萬事に遠慮が皆身の仇」と。太兵衞の言の如し。德兵衞が寛大は、偶〻與兵衞が性質を害ふに足りしのみ。人倫社交の大道を餘所にしたればなり。訓ふべき親に此謬あり。與兵衞が放蕩無賴にて、譬へば「しりのほどけた錢さし」の如く「籠で水くむ如く、跡からぬけ、一夕儲ければ、百夕つかふ根生と」なり、「意見一言いひ出せば、千言でいひかへす」に至れるは勢ひの自然ならん。多年辛酸の經歷を積み、世の義理人の道をも辨へてありぬべき德兵衞すら、「元が主筋下人筋の親と子、釘ごたへせぬ筈、身の境界がくちをし」といひて、從僕の本分と親の本分とを無差別に見たり。さすれば、生年わづかに廿三にて條理を辨へぬ頑兒が、「德兵衞どうせいかうせい」といひならはせし昔を忘れず、親となれる德兵衞と僮たりし時の德兵衞とを無差別に見做して、子の本分と主人の本分とを混同したるは當然也。要するに、德兵衞は

「正直」の實に偏りて、權を知らず、平等の理義に拘らひて、差別の理義に昏く、主恩の忘るべからざるを感銘したれど、親となりては別に盡すべき大任あるを忘れたり。彼れの舊主に對する尊敬はほと〳〵偶像崇拜の程度に達せり。譬へば、專制時代の忠臣が其君に仕ふる心なり。君、桀紂の如く暴虐にて殘を行ふとも、そを制めん方は直諫か、諷諫か、此二ッの外にいでず。若し、此二ッの方效無くば、身退くか、若しくは生命を犧にして止まんのみ。箕子、比干の忠、平手中務の誠は是れなり。然るに、德兵衞の場合にては、其身別に親といふ資格をもてれば、慈愛至極して實母お澤がいへる如く「まだ此上に根性の直る藥に、母が生膽を煎じて飲すといふ醫者あらば、身を八裂を厭はじ」とやうに思へばとて、子を諫めて親の死なんとは流石に常義の許さぬ所なり。古來時として子の爲に死ぬ親もあれど、さるは慈愛の至極せる結果にて、理義の許す事にはあらず。德兵衞差は別の理に昏けれど、斯ばかりは辨へたれば、身を犧にせんとは思はざるべし。且つ身退くべきにもあらず、君臣の場合とは、主客の位置顚倒したればなり。此に於いて、詮術を知らず、徒らに勸當と一喝して無賴兒を逐出して止む。勢ひの必然なるべし。但し、忠臣の身退くや、尠くともおのが衷心の操に背かざりしことを思うて安んずるを得べし。德兵衞は然らず。其與兵衞を逐ふや、尙ほひそかに其跡を追うて手じま屋に到る。其衷情安んぜざればなり。卽ち、彼れ若し忠僕の本分を盡さんとせば、尠くも身退くまでに極諫せざる可からざれど、親といふ資格あれば、之れを行ふと叶

はず。卽ち、惘然と去就進退に迷へり。されど、みづからは此兩岐の由來を知らず。煩悶、焦慮の末、纔に婦人の慈、宋襄の仁によりて刹那の安心を求めんとす。是れまた主從の分と親子の分とを混同したるより生ぜり。さもあらばあれ、此根本の過失は大なれど、此れ時勢の果なり。彼れは德川專制の全盛期に生れたり。忠義の爲に私情を擲ち、一身の利害を餘所にして恩に報いんとするは、當代の理想なり。從僕といふ資格よりいへば、憐れむべきなれど、親といふ本分を忘れたる過ちは、彼の眞理の爲に國家を、國家の爲に父母を、忘るゝ者の過失に同じ。

思量經驗に富める親すら、親子の分を誤れりとせば、其子此親に柢育せられて子の本分を誤れること、蓋し當然なり。父の義理に泥みて、親の本分を忘れたるは、義理を知ればなり。子の私慾に偏りて、子の本分を忘れたるは、義理をも人情をも知らねばなり。父は世故に老いたり、故に義理を知れり。子は世事に幼稚なり、故に情義を知らず。さすれば、與兵衞が放埒無慚なるは、父子の分を誨へ導くもの無かりしに因緣する所尠からずとすべし。是れ與兵衞の爲人を評するに先だちて其父德兵衞の爲人を評せし所以なり。

大聖孔子は、孝をもて百行の本としたまへり。親子の分限は人の守らざる可からざる根柢の大倫にして、又最も覩易かるべき道理なり。夫子の敎へを立給ふに當り、先づ親子をもて始め給へるは、此覩易き道理を楷として啓蒙の道を開拓せんとおぼしければなるべし。然るに、與兵衞の頑愚

蒙昧なる、殆ど實の母に對する孝子の分をだに知らず。豈に義父に對する義子の本分を知らんや。況んや商人の務をや。況んや人間の本分をや。彼れの世を渡るは、蠻人の慾に驅られて去就し、禽獸の餌を求めて往來し、蝸牛の日陰にしたがひて流元を這ひ廻るに似たり。「ふみしめもなく世の中を滑り渡りの油屋」の名にし負ひて、「賣溜錢は色狂ひ、絞り取られて元も利もカスも殘らぬ油桶重げに見せ」て、親をあざむき、身の非を掩ふに足る智慧はあれど、そは私慾の奸才といふものにて、野蠻の智、頑童の智なり。野崎詣の途すがら、叔父森右衞門の爲に懲されしを、却りて、方便として、父母をあざむき、金子を貪らんと試みしも、此奸才なり。妹かぢをすかして僞物の怪を粧はしめしも同じ源よりいでたり。私情の熾んなるが故に、此奸才は沸なり。夫の經驗派の學者が智能の發達を情感の作用に歸し、兼愛の德性をもて自愛の至極せるものとなせる、故なきにあらず。野蠻未開の初めには、人皆私に專らにして、他を顧る智能無し、現在の利害を知りて、今を避まくする智能はあれど、思念の夢にだに未來に及ぶこと無し。與兵衞の如きは然り。彼れ、天が下に、我あることを知りたれど、他人あることを知らざるにひとし。其實の母すら習慣によりて母とせるものゝ如く、母として事ふまつるべき務めありと認めざること、其おうこを揮ひて母を打つを見ても知るべし。茫々たる習慣性と曖昧たる遺傳性を除きさらば、與兵術は髣髴たる一個の未開人たらん。眼中義理無く、人情無し、故に智慧あるに似たれども其智は、只目前の小智なり。德兵衞の

「正直を見ぬいて」之れをあざむき、蔑如にするも、有形の罰の來らざるを察知し、「したいがいに蹈つけ」、「オ、手柄に婿が呼ばれうば呼んで見や、見物せうと親の前に足蹈のばす」傍若無人の小才智はあれど、世に大道の流行ありて、早晩形無き嚴罰下り、天地廣しといへど終に不孝の子を容るゝ地を餘さず、「果は千日千人聞、萬人聞けば十萬人殘る方なく世の鑑傳へて、君が長き世に清からぬ名を殘すべし」とは、彼れ曾て知量する能はず。譬へば、旦あるを知りて、夕あるを知らず、花咲くを知りて、花散るを知らざる類なり。未開の蠻民にひとし。目前有形の物の外に怖るべきものあるを知らず。されば、誤りて公儀の貴士人に泥をそゝぎては、彼れ恐怖、畏縮、周章、狼狽して爲す由を知らず、「ア、お侍さま、怪我でござる、御免なさりませ、お慈悲〳〵とほえづらかく。」公儀の强大なるを知り、目前の嚴罰の怖るべきを知ればなり。但し、公儀の重んずべき所以を知れるにはあらず。彼れの公儀を恐れ、士人を怖るゝは、獸類の獅子を恐るゝが如く、一層强大なる腕力として恐るゝ也。法律を法律として恐るゝのみ。正義の掟として重んずるにはあらず。是れもまた未開人の心なり。此故に、白刄頭の上に臨まんとすれど、尙ほ分疏すべき言葉を知らず。法律を正義の掟とせで、只管に强大の腕力と思へる故に詫とも恕さるまじと思へばなるべし。腕力の眼中には理も非も無しと思へばならん。されば、彼れ徒らに逡巡畏縮す、猶ほ猛犬に出あひたる小狗のごとし。されば、又猛犬は已に去りたれど、尙ほ「恍惚」と「醉ひたる如く」、「夢か現か」を

も辨へず、逃去らんといふ分別も出ず、「南無三、叔父の下向に切らるゝ筈、切られたら死なう、死んだら如何しよと、心は沈み氣は上もり、逃てくれう」と、やう〳〵氣付き、「かけいで」ながら、「ハアかういけば野崎、大坂はどちらやら、方角が無い、此方は京の方、彼の山は闇か、但し比叡山か、何方へいたらば逃れうと、眼も迷ひうろたへ」たる、是れ無智の本體なり。

一たび心上づりては、「斬らるれば死す」といふ、自明の原理だに忘れ去らんとす。人間の道を忘れ、親子の本分を忘れたる其筈なり。又お吉が意見を馬耳の風と聽流したるも其分にて、賣女に對して破約を怒り、千萬人の翫物を我物顏に取つて引据ゑ、「馴染の河與が借るからは動かせぬ」と罵りたるも其分なり。されば、又「わしの心は誓文斯うぢや」と、只一言の氣休めにいだきつかれて大きに「悅喜」し、「忝いと延びた顏」に痴愚の本性をあらはし、幾千人の見る目をも耻ぢず、公道にて人と泥じあひし、ます〳〵狂愚の相を現す。皆是れ彼れが眼中に私情の外、物無きに因るなり。尠くとも、其情熾んなる時には、義理も無く、人情も無く、親も無く、母も無し。其際、彼れをして恐れしむべきものは、只一の强大なる腕力あるのみ。されば、又濁血一たび沸き返りては、彼れ法印を見ること蟲けらを見るが如く、義父を見ること奴僕を見るが如く、妹を見ること出來損ねたる機械を見るが如く、實の母に向ひてすら、謬信者の子の不信者がはじめて神佛の偶像に對するが如くす。流石に、遺傳と習慣性とによりてたゞちに唾棄するをたゆたへりと見ゆれど、早

晩奮起して粉碎にせんとするものに似たり。其眼中、實の母すら無からんとす。げに、子を見ること親にしかず。母親お澤奮然として、「エ、もどかしい德兵衞どの、石に謎かけるやうに、口でいうて聞やつか」と、涙を呑みて罵りたる、これは夫への義理もあるべく、女性の一時の激怒にてもあるべきが、また與兵衞を知悉したる言葉なり。此賊兒を窘めんとせば、其方唯一つより外に無し、故に、母親は激怒して曰く、「出てうせ〳〵、うぢ〳〵ひろがば町中寄せて追出すと、又おつとつてつゝぱるおうこ」は「怖い目知らぬ無法者」をも動かすに足りぬべし。此激怒に伴へるおうここそアルキメヂーズの損扞なれ。さすがに與兵衞も、「町中」といふ强大腕力にぎよつとして「吐胸つきたるけでん顏」、宛然視るべし。

以上、只我あることを知りて、義父あることを知らざりし與兵衞の情態と履歷となり。

〔上の卷〕野崎詣の條に「野崎參りの屋形船、卯月中ばの初暑さ、末の閏におひぐりて、まだ肌寒き川風を云々」といふ文句ありて、〔中の卷〕太兵衞の言葉に、「跡の月御主人の供して、(森右衞門が)野崎參りの折ふし、不道者の與兵衞も參り合せ」といふ文句あれば、與兵衞勘當の月は、閏四月なること疑ひ無きに似たり。現に、同じ卷の結句に、「見れども餘所の繪幟に、影も藏れて三重」とあれば、恐らくは四月の三十日などにやあらん。繪幟とは來ん節句の用意に逸早くもなびかせたるものをさせるなるべし。又〔下の卷〕、七左衞門がお吉の法事を營める時の言葉に、「誠

に死んだ亡者が物語り、四月十一日、我等夫婦野崎參りいたせし日、云々」といふ文句あり。〔上の卷〕の出來事は、四月の中旬なること〳〵明かなり。扨〔下の卷〕の初めに、「ふきなれし年も久しの蓬、菖蒲は、家毎に幟の音のざはめくは、をの子持の證かや」といふ句ありて、「五月五日の一夜さを、女の家といふぞかし」さては又、「此節季越すに越されぬ河内屋與兵衞、手筈の合はぬ古袷」、又は「掛も十ヲに七左衞門、大かた寄て中戻り、ア、思ひの外早ひ仕舞ひ、內の拂ひもさらりとしまひ」又は與兵衞の言葉にも、「七左衞門どのはいづ方へ、定めて掛も寄ましよ」などいふ文句あれば、當時の習慣は五月の節句にも諸拂ひをなせしことと見えたり。即ち、お吉殺しの月日は、五月の節句前の夜なることたしかなり。森右衞門が廓にて與兵衞の事を探り、「五月の節句前か後か」といひ、「只今參りがけ櫻井屋源兵衞へも立寄吟味いたせり、五月四日の夜大金三兩錢八百請取たとある云々」といひ、又花屋の花車が、「わたし方へも五月四日の夜に入て、大金三兩錢壹貫文」といへるなど合せ考へなば、ます〳〵明かなるべし。

又思ふに、與兵衞勘當の日は、五月の二日なるべくや。與兵衞が義父に向ひていへる言葉に「けふは二日際というて、明日、明後日萬事をさし置き、けふの中三貫目とゝのへて渡さッしやれ云々」といふ文句あり。さすれば、「跡の月云々」とあるは跡々の月といふべきを大概にいひしものにや。若し、勘當の日を二日とすれば、四日間と假定して解釋したる下の評論は誤れり。

案ずるに勘當の月日を、假に閏四月三十日とすれば、お吉殺しまでに、日數(勘當の日を二日と

すれば其間わづかに一日のみ）四日の間あるべし。此間、與兵衛はいづこにありけん。彼の七左衛門かたにて、お吉が三十五日の佛事營みける折に、偶然に鼠の取落せる「半切紙に一ッがき十匁壹分五リン野崎の割附は、殺しの夜、與兵衛が取落してゆきしものならん。而して、其割附に五月三日といふ日附あるを思へば、殺しの前の日に、例の色友達、刷毛の彌五郎、皆朱の善兵衛」などにあひしことありと見えたり。德兵衛が、お吉に向ひての述懷の言葉に、「聞けば（與兵衛め）は順慶町兄が方に居るとやら」とありて、綿屋小兵衛が借財を與兵衛に促る時の言葉に「順慶町へゆけば、本天滿町親御の所へといはるゝ」とあれば、其居所は實兄太兵衛の許なりしこと頗るたしかなるが如し。然るに兄の家にありける間の事蹟は作者悉くこれを陰にし、噂にもほのかにも見せざれど、此黑幕の中に主人公が主觀の第一段變化はありきと思はる。具にいへば、彼れの心狀に一大變動ありきと見ゆ。茲に少しく其理を辯ずべし。

「上、中二卷」に見えたる與兵衛は、我れあるを知りて、他人あるを忘れたる人間なりしに、「下の卷に」見えたる與兵衛は、たしかに我外に義父あることを認めたり。されば、二百目の借錢を小兵衛に促られ、やう〳〵なだめて歸らせし後、一錢の心當もなきに胸を痛め、「茶屋の拂ひは一寸のがれ、ぬきさしならぬ此二百目」と思案に苦める心の底に、我れ以外の一物あると明かなり。何となれば、茶屋の拂ひこそ直接に彼れが身の苦樂とはなれ、件の二百目の借財は、五月五日を限り、義

父の印判を盜用して、證文の面は一貫目正味は二百目といふ約束にて借入れたるなれば、「五日の日がにょッと出ると」二百目變じて一貫目となり、債主は直ちに德兵衛に逼り、その返濟を促すべきものなり。卽ち、義父の難儀とはなるべきも、與兵衛の難儀とはならぬ負債なり。義理を知れるものならば、斯かる借財をこそ八しほに苦しく思ふべけれど「上、中の卷」に見えし與兵衛は、無形の苦痛を知らぬものなり。嗚呼、作者こゝに至りて主人公の性質を打敗し、行爲の一致を失へるか。何となれば、若し與兵衛が、「前の卷」に見えたる如き我の外に親あることを知らざる沒義理、沒人情の無法者ならば、只管まづ茶屋の拂ひをこそ氣にはせめ、しかるに「茶屋の拂ひは一寸のがれ、」今濟さずとも忍ぶべしといふは、其本心我一身の利害を思へるのみにあらで、親に對する義務を思へること明かなり。與兵衛が、義父を認め、義父に對する義務を認め、腕力の外に恐るべきものあることを認めたるや明かなり。是れ豈に主人公の特質の前後矛盾せる證ならずや。さすれば、作者此に至りて、主人公の特質を打敗し、行爲の一致を失へりといふべきか。將た、勘當後四日間に於て主人公が心狀に一變動の起りしか。

假に、後の假定をもて正しとせば、如何にしてかゝる主觀の變化の起りしか。與兵衛がお吉に向ひての述懷に、「跡の月の廿日に、親仁の謀判して上銀二百目今晩限に借ました。……手がたの面は、上銀壹貫目、借た金は二百目、云々」といへるを見れば、此借入は四月廿日にして、勘當以前

なりしと明かなり。人或ひは勘當の日に、與兵衛が叔父の名を使ひて、三貫目の金を義父より欺き取らんとせる條と照し合せて、彼れが「際」というて（も）明日明後日、萬事をさし置き、けふの中三貫目とゝのへて渡さつしやれ」といへるは、此借財の事の胸にある證據にて、彼れが返濟に苦心せるは勘當後にはじまれるにあらずといはん。非なり、勿論、與兵衛とても、借財に苦心せざりしにあらねど、彼の折と、此折とは、其苦勞の鹽梅に相違あり。彼の折は、謀判露見しては我爲に不便宜なりと思へる故に、返濟に苦勞せしなり。親の爲を思ひてにはあらず。畢竟、彼れが三貫目を得んとせるは、私慾の小使に要すればにて、其證據は同じ時、父に向ひて、「おかぢが病より、何より大事がある、其當座に母ぢや人にはいふたれど」と、前置きして叔父の事をいへるにて知るべし。其當座とは野崎詣の當座をいへるなりとすれば、正に是れ四月中旬の事にて、二百目を借入れける以前の事なり。蓋し、其頃、與兵衛の身にとりて、大に金の要る事のありしならん。然るに、母親分別ありて、其時「ぬく〳〵とだま」されながらも、流石に義理の柵ありて、「つか〳〵と親仁殿へ話」さゞりければこそ、與兵衛小使錢の乏しきに困み、廿日に及びて小兵衛より、彼の二百目の金を借入れしならめ。さすれば、三貫目の無心は、二百目の爲に起りしにあらざりしこと知るべし。若しまた、眞に借財の方を重しとし、それが爲に親をあざむかんとしたりきとすれば、三貫目といはで、二百目に對して、一貫目ともいふべきを、大マカに三貫目といひしを見れば、茶屋の拂ひ、遊びの小使錢などこそ專ら彼れが心頭にはありけめ。勘當以前には義父の難儀などいふ觀念絶えてなかりし事明かなり。

然るに、そも如何にして、わづか一月の間に、彼れ忽然と義父に對する義務あることを知識するに至りしか。是れ難問なり。近松の此作を、片輪として棄つべきか、將た然らぬかも、此難問一つに繫れり。

案ずるに、*hope*は人間を活し、又は半死せしむ。活すとは、現在の死地より人間を救ひて、未來の榮えを望ましむることをいひ、半死せさすとは、人をして執着の絆を絶つ時を失はしめて、よもやの霧中に迷はしむる事をいふなり。基督敎は*hope*を利用して敎へを說き、佛敎は*hope*を打破して一切空を說き、迷執半死の餓鬼を救はんとす。共に其理妙ならぬにはあらず。但人間通常の例に照せば、*hope*は人をして半死の餓鬼とならしむること多し。そは、常人のいふ*hope*は、基督敎の*hope*と同じからねばなり。〔上、中二卷〕に見えたる與兵衛の如きは、この俗に謂ふ*hope*あるが爲に迷執の餓鬼となりし者なり。彼れ義父を侮り、母を侮り、專恣放逸、おのが欲する事として成らざること無きゆゑに、未だ曾て失望といふ事を經驗せざりしなり。夫れ失望の解は、時と人とによりて差あれども、與兵衛の如きにとりては、失望は却りて、迷執攘除の媒なり、依賴心を去ればなり、「可愛兒に旅をさせよ」といふも、此理なり。凡そ我が一身あることを知りて、他あることを知ら

ざるものに、他あることを知らしめんとせば、彼れをして眞の一本だちとならしむるより外に方無し。愚人を常に暖爐ある室中に居らしめば、彼れほと〳〵暖爐の暖きをさとらじ。俄に暖爐を取り去れ、彼れはじめて暖爐の暖きをさとらん。「無くてぞ人の戀しかりける」とは、無明のはじめて明くなりし時の誠なるべし。「必需は發明の母」とは、ひとり、智の上にのみいふことかは。德性上の變化も零仃孤立して後に起ること間〻あり。古へより、大事の思ひたちの屢〻逆運、失意、失望、蹉跎の際に萌し、賴の綱の切れ、よもやの霧の晴れし時に起りしも、皆此同じ理なるべし。

案ずるに、與兵衞は其經驗の幼稚なること小兒に等し。彼れは、恐らく打叩かれし事なかるべし。失望の味はひは一たびも知らざりしならん。其母親に折檻せらるゝや、いへらく、「此與兵衞が爰を出て何處へ往く所がない」と。是何等の無心無邪氣ぞ。二十三才の放蕩兒の詞に似ずして八九才の頑童の我儘に似たり。勘當の何ものたるを解せざる事明かなり。蓋し、彼れ我行ひの非なることを知らねば、夢にも此家を逐はるべしとは思はず、逐ひだすといふ事は、異見といふものゝ符牒の如くに思ひしならん。この故に、實際逐出さるゝに及びては、「ぎよつとして吐胸つきたる」、如何にすべき、と「けでん顏」したる自然なり。其時の彼れの心は、夢に夢見たる如く途方に暮れ、進退に迷ひ、彼の野崎にて叔父に懲らされし時の如く、方角を失ひ去就を知らず、茫然また惘然、「辻に立ちたる姿」いかに哀れなりけん。甘き親を侮りて、虎の如き頑童は、其甘き親を失ひて悄然たること、屠所の羊の如し。今宵はいかにしていづこに夜を明さん。今宵は「色友達」にすがりても兎も角もせん。明日は、何とせん。只目前の苦樂を知りて、未來の苦樂を知らざりし與兵衞も、この時に及びてはじめて未來といふことに心付きしならん。されは、當日は目前に困あれば、深く未來を思ふに及ばで、或ひは怒り、或ひは罵り、或ひはもだへ、或ひは怨み、天を罵り、親を怨み、つぶやき〳〵家を離れて、其夜は皆朱が許にてや明しけん、刷毛が宿にてや過しけん。兎に角に、友達の許に一夜を過せしならん。何となれば、前々月の割附が此勘當の翌日なる三日の日附にて拂はれたるは、其間あまりに隔たり過ぎたり。思ふに、二日の夜友達にあひて嚴しく催促せられしにやあらん。さて、僅に十匁壹分五リンといふ些少の割前に苦めらるゝに及びて、彌〻勘當の味を知りそめ、友達の親に似ぬことをも知り。明日より後はいかにすべきといふ心配も募りしが、懷に一錢の貯へなし。頭を下げ、手をすりて詫ぶれど聽かれざる苦しさに、ます〳〵勘當のつらさを知り、一生人に詫言いひし經驗なき與兵衞なれど、爰に詫言の必要を知りて、まづ兄の許へしほれゆきて詫言の手初めをや試みし。是れを、與兵衞が心狀に生ぜし第一の主觀の變動とす。

しかるに、實兄河内屋太兵衞は、〔中の卷〕にて見えたる如く頗る義理堅き分別男なり。現に、義父を諫めて、「じたい親仁さまが手ぬるい」、「分別も何もいらぬ（與兵衞を）ぼいだしてのけさしやれ」、「死にをらば死に次第、微塵愛着は殘らぬと如來かけての母の言分からは、何の遠慮勘當

なされ」と切にすゝめし口もあれば、勘當うけて來れる弟を義理にもおとなしく我が家には入れざりしなるべし。不義を見て嚇たる君子の怒三分、義父へ對する義理六分、世間へ對する義一分理、合せて十分の兄の折檻はさすがに無法者の骨身にも忘られぬ程に徹へけん。いでや此與兵衞、蒙昧頑愚にて其濁血の沸かへりたる時には、ほと〳〵母をさへに忘るれど、さすがに習慣と遺傳とにて母の母たるを知らぬにはあらず。されば、其兄に對するにも情沈みたる時には、母親に對するに似たるものあるべし。加ふるに、兄は腕力といふ一原素を加へてもてり。與兵衞の心中、兄を恐るゝ情もあるべし。況んや、進退全く谷まりて、第一主觀變遷を經たる時に於て、（勘當の苦痛を覺りたる時に於て）實兄の折檻にあへるをや。思ふに、血涙と鐵拳と雨の如く下れる此友愛の折檻の中に、與兵衞が主觀の第二變動、卽ち第二の心狀の變化起りしなるべし。第二の變化とは我が行ひの非なりしことを覺りて、義父に對する義務を意識せる事是れ也。

綿屋小兵衞の言葉の中に、「順慶町へゆけば、本天滿町親御の所へといはるゝ、親御へゆけば、追出した、爰には居ぬとある」といふ文句あり。さすれば、五月四日の夜は、兄の許諾を得て順慶町を立出たると、幷びに親の許へゆくといふ口實にて兄の方を立出でたると、「親御の所へ、」とある「へ」の字に明かなるに似たり。蓋し、三日より四日へかけての折檻と、剛意見とにて悔悟謹愼の色いと著るく見れたるが故に、兄もやう〳〵心折れ、與兵衞が叩頭謝罪して、「詫言の爲に義

父の許へゆきたし」といひいでたるを實とし、斯くは許して出し遣りけるにや。尤も、「詫言の爲に云々」といひ出できとは、評者の想像なれど、前後の續きより臆測するに、若し與兵衞の心中に前にいへる如き二段の主觀的變動ありきとせば、彼れ第一に二百目の負債の將に日限に逼りたることを思ひいだし、如何にすべきかと煩悶きしなるべし。無形の不孝を悔ゆるよりも、有形の不幸を悔ゆると與兵衞の如き性資の者には最初なるべし。然れども、斯くと打明けて兄に語るべきにあらねば、表は詫言に托して兄の家をたちいで、兎や角と工面に困み、久しく途中に彷徨し、遂に志を決して手島屋を訪ふに及びしならん。此時の與兵衞は、一日前の與兵衞にあらず。勘當の苦しきを知り、友達の親に似ぬをも知りたり。兄の剛意見、肝に徹へて我が行ひの非なりしを覺りたり。義父德兵衞と舊手代德兵衞とは、同體異資格なるべきを意識し、義父の慈仁の鴻大なること、其恩の高きことを感じたり。尠くとも謀判して義父に難儀をかけんことの忍びがたき大罪たることを感じたり。恐らくは此有形の不孝の罪を過去の不孝中の最大なるものと思ひしならん。此に於てや、熱血性男兒の癖とて、一意、此負債を濟さゞる可からずと焦心煩悶し、深く前後を思量する遑なく、此不孝の借錢を濟すこと叶はずば死ぬより外に分別無しと、譯もなく輕々しく死を決し、「一生さゝぬ脇差」さし、死ぬか、生るか「今宵こじりの詰りの分別」、手島屋が返答次第にて定めんと思ひつゝ、彼の家の門に立寄りけん。然るに、其門口にて端無くも債主小兵衞に邂逅し、いよ〳〵絶體絶命の

實を覺りたれば、金の必要を感ずることます〳〵切なり。「ぬきさしならぬ此二百目、有所にはあらうがな、世界は廣し、二百目などは誰ぞ落しさうなもの」と、徒らに天を仰いで僥倖を禱るに至れること、彼れが性情の必然にて、遺せし他人の難澁などは想像するに遑なし。偏に我れと義父とあるを知りて、他人あることを忘れたり。嗚呼、與兵衞の如きは憫むべし、彼れは他人あるを知りて、他人を殘虐せんとするものにあらず。元より他人あることを知らぬなり。彼れ兄の敎訓によりて、漸く義父の敬はざるべからざるを知りたれど、未だ人情をも義理をも解せざるなり。彼れの眼中の義理とは、養父に對しての義理のみ。世間（人間）に對しての義理とは、彼れ未だ夢想せざるなり。畢竟、與兵衞は、一を知りて二を知らず、差別の義理は知り得たれど、未だ平等の義理あることを知らず。譬へば、愛國の美德たることを知りて只管に保守の策を講じ、未だ世界を愛することの美德たるを認めざるもの〻如し。夫れ一を知りて二を知らず、差別を知りて平等を知らざるは、歸納經驗の乏しきより生ずる自然の果なり。豈にひとり與兵衞を咎めんや。

德兵衞は平等に拘らひて差別を辨へず、其子は差別を知りて平等を知らず。而して、親の失も舊主人といふ一個人に泥みて生じ、子の失も義父といふ一個人に泥みて生ず。共に其見る所の狹きより起れり。差別平等を双つながら調理せんとせば、眼まづ大宇宙を看破せざる可からず。

手島屋にての慈母と義父との問答は、人情の極致、一篇の精髓、淨瑠璃の壓卷、其子ならぬもの

もこれをきかば、

"Turn his color and has tears in's eyes,
Make mad the guilty and appall the free,
Confound the ignorant, and amaze indeed
The very faculties of eyes and ears."

若しこれを舞臺に登さば、

"Would drown the stage with tears

與兵衞無賴なりと雖も、已に二段の主觀化を經たり。至慈なる父母の述懷を洩聞きて、豈に感動せざらんや。木偶人と雖も、嗚咽すべし。況いて彼れは已に義父の恩を知り、悔悟の妙光に照らされたり、豈に此慈悲に感動せざらんや。已に感動せば、氷の如き眼にも熱湯の涙なかるべしや。「さきにから、門口に蚊にくはれ、長々しい親達の愁歎聞いて涙をこぼせし」とは、其言甚だ粗樸なれど、其樸にして粗なる所却りて至誠の言葉たる證なり。蚊にくはる〻有形の苦痛を忍びてかゝる無形の苦痛に泣きしは、彼れが一生の初經驗なるべし。二人の親の詞は、其「心魂にしみこみて悲しく」、前には此金調はずば、「自害して死うと覺悟し」、「懷に脇差さしはさいて出たれども、只

今両親の歎き……を聞いては死んで此金親仁の難儀にかくること不孝の塗上、身上の破滅、思ひ廻せば死ぬるにも死なれず、生きてはゐられず」絶體絶命、進退維れ谷まり、「詮かたなさ」に、初志の如くお吉に頼りて二百目の金を借らんとす。其情憐むべし。

お吉は頗る人情深き女なれども、「年もまだ廿七」とあれば、未だ人情の奥を知れるものにあらず。両親があづけゆけるちまき一わ錢八百、これを與兵衛に與へば、彼れ案外の賜に駭き歡ぶならんと思ひもうけき。「こなさまは仕合せな、後ともいはずよい所へござんした。是れ此錢此八百ちまき、こな様へやれと天道からふりました」と勇みていふ聲聽くが如し。然るに、「與兵衛ちつとも驚かず、これが親達の合力か」と平然と問ひかへす。お吉まづ案外を感じたり。さる程に、與兵衛は膝を進めて一部始終を洩聞きつと語り、「只今より眞人間に成りて孝行を盡す合點なれども、肝腎のお慈悲の錢が足らぬ、というて親兄には言はれぬ首尾、爰には賣溜、掛の寄金もある筈、新でたッた二百目ばかり、勘當のゆる迄貸して下され」と、足らぬ理由はいはで突然に賣溜を貸せと云ふ。お吉二たび案外を感じぬ。

此時の與兵衛の心を分析すれば、彼れ一圖に二百目を得て義父の難儀を除かんとす。我が情懷を詳述するに遑なし。卽ち情の爲に理性くらみてこみいりたる理由を辯ずるに遑なし。萬事獨呑込、獨合點の趣きあり。「孝行盡す合點」といふ言葉と、「肝腎お慈悲の錢が足らぬ」といふ詞との間には、

大矛盾、大撞着ありて、枘鑿相容れざれど、與兵衛みづからは知らず。さて又「新でたッた二百目」とは時にとりて尤も不都合の詞にして、こは「心計りが廣袖」の肌癖尙ほぬけぬ故にて是非なき失言なれど、かゝることは彼れが腸を探りて後にこそ知らるれ。お吉はいかで然思はん、「足らぬ」と聞きてまづ呆れ、「たッた」ときゝて愛憎つき、「それ〳〵與を聞うより口聞け、那邊に心がなはッた、僞にも金貸してくれとはいはれぬ義理、世間の義理を欠いても金借て惡性所の拂ひして跡から段々いかうでな」と眉つりあげて辱しめたる自然なり。お吉案外に案外を重ねて愛憎盡き、うとましさ增すにつけ、過去りし事をさへ想ひいだし、いつぞやの野崎參り、衣物洗うて進ぜたさへ不義したと疑はれ、言解に幾日かゝつたやら、喃うとましや〳〵」と、憤として背向になりたる姿、宛然たり。

與兵衛たゆめる色なく、「そばへにぢり寄り」、しからばいつそのこと、我れと「不義に成りてかして下され」と强談す。是れ無法の骨頂の骨頂也。但し與兵衛はしか思はず、何となれば、彼れは世に我れと義父との難儀のいとつらきを意識したれど、不義といふ名義の他人といふものにとりていかばかり難澁なるべきかを感ぜざれば也。返る金ならば、貸してもよさうなものと思へり。

押問答再三に及びて、お吉斷々と動く色なく、「女子と思うてなぶらしやると聲たてゝわめくぞや」と叱斥す。「嬲らしやるか」といふ聲逆せたる與兵衛の耳にも入り、はじめて我が言信ぜられ

ざるかと感じ、入用の理由を語らざる可からずと覺り、「ハテ與兵衛も男、二人の親の詞が心魂に染込で悲しいもの、嬲るの侮るのといふ所へゆくことか、何を隱しませう跡の月」と子細殘さず打明けたる、おのづからなる述懷なり。「有金たッた二百目で與兵衛が命をついで下さる御仁德黃泉の底まで忘れうか、お吉さま何卒貸して下され」といふ。見るべし、前に「たッた」といへるも、「心計りが廣袖」の肌癖のみにはあらで、彼れは我が命に對していへるなり。一人の命の代とせば、二百目は「たッた」なるべし。彼れに決死の分別ありしや明か也。さすれば、此時の彼れが聲と彼れが「目の色」とは悲絶なりしならん。愛憎つかせしお吉なれども、また少しく心動き、「さうした事もと思ひ」たる、まことに人情の自然ながら、「かねての僞計是れもまた、其手よと思ひかへして、フウまが〳〵しいあの僞わいの……ならぬというてはきつうならぬ」と排撥けしも、また自然の沙汰なり。そは與兵衛の述懷、金子要求の前に出ずして要求を斷られたる後に出たれば口實とのみ聞えしも當然也。さもあらばあれ、お吉は性來情深く且は女氣の優しさに僞なるべしと思ひつつも流石に棄がたき思ひもあれば、「油取かへて」といはれては言葉やさしく諾きて、「消ゆる命の燈火は油はかるも夢の間と知らで升取り柄杓取り」與兵衛の心をなだめんとす。是れ一つは斷然「借りますまい」といひ放ちし與兵衛の血相の只ならぬを認め心元なく思ひしにもよるべし。

與兵衛の胸は二百目の必要に塞がり、血この爲に上づり、心この爲に顚倒す。二百目を得ば、五

日の旭光を見ることを得べし。得ざれば、今宵が生死の瀨戸、「奥の戸棚に上銀五百目餘り」恐らく尙ほ別に若干の貯へもあるべし。其金たッた二百目だけ欲しや、さりとてそを借るべき便は無し。夜は更る、明日に咫尺、五日の旭が「によッと出」ば、「親仁の難儀」、身の破滅、兄にはいはれず、知己は無し、アレ〳〵段々と夜は更ける。「奥の戸棚に溢るゝ貯へ、いつその腐れ、殺して取らん、親の難儀は「不幸の塗上」、情知らずの女め、貸さずばよし、どうせ死なねばならぬ身、此奴殺し金を濟し、男を立てゝ後に死なん、ム、然ぢや。と咄嗟の分別、濁血湯の如く沸かへり、心の鏡黯濛々、遂に殘忍の白刄を揮ひて、熱油ほとばしる活地獄の慘劇を演出す。何等の慘狀ぞ。魔王齒をむきいだして笑ひ、サタンとんぼがへりして欣び舞ふ。我れと親とが無透明の目かくしとなりて、彼れ眼中に毛頭の人情をも見る能はず。卽ち曰く、「オ、死にともない筈、尤も、こなたの女が可愛い程己もおれを可愛がる親人がいとしい、金拂うて男立ねばならぬ」と、されど與兵衛も人なれば、幾分の同情なきにはあらず。「オ、死にともない筈、尤」とは、此同情の影なり。只我れと彼れとを比べて我れを天とし彼れを地とす。彼れは、他人を以て遙に我れよりも劣る者とせり。與兵衛がお吉に於ける同情は、殆ど常人が犬猫に於ける同情に類す。「心で御念佛、南無あみだ」とは、人を殺す時の言葉にあらず。

女已に息絶えたり、與兵衛の心局飜然一變す、作者が絶妙の筆其狀を叙す、また那邊にか分析の

筆を著けん。本文に就きて不可分析の妙を默會せよ。

「日頃の強き(も)死顔見てぞつと我れから心もおくれ、膝節がたゝがたつく胸を、押さげ押さげさげたる鍵をおッとッて、窺けば蚊屋のうちとけて、寢たる子供の顔付さへ、我れを睨むと身も顫へば、伴てがらつく鍵の音、頭の上に鳴神の落ちかゝるかと膽にこたへ、戸棚にびッたり引出すうちがひ、上銀五百八十目宵に聞いたる心當、ねぢ込みねぢこみ懷の、重さよ足も重くれて、薄氷を踏む、火焔踏む、此脇差はせんだの木の、橋から川へ、沈む來世は見えぬ沙汰、此世の果報の付時と、內をぬけ出一散に、足に任せて……」

嗚呼、何等のおそろしき活畫ぞ。ダンカン王を弑して後のマクベスの述懷と頗る相肖たり。「がらつく鍵の音」、「いかに百雷の一時におちかゝるが如く轟き *"all the house"* に鳴渡りけん。殺す時には、「心でお念佛、南無あみだ」とつぶやきしも、已に殺し了へて鍵の音雷と轟き *when he "had most need of blessing" how "Amidabutsu" stuck in his throat?"* 其薄氷を蹈み餤を蹈むや *how "every noi e appalled him?"*

たゞし與兵衞とマクベスとを比べば、其意識上に大きなる相違あり。マクベスは君臣の義を解し、人情義理を解し、我が弑虐の大罪たることを意識して、其君を弑殺す。故に其怖るゝや意識の中より無意識に生じたる恐怖なり。與兵衞は然らず。人情を知らず、義理を知らず、人を殺すことの大

罪たるを知らざるにはあらねど、其何故に非なるかは明かに知らず、故に彼れの怖るゝや死顔を見たる自然の刺擊なり。卽ち無意識の中より生じたる恐怖也。彼のマクベスは判然怖るべき故を知れり。故に、現場を離れても心神惱亂し、顔色土の如く、血に染める我が手を見て

"What hands are here? ha! they pluck out mine eyes.
Will all great Neptune's ocean wash this blood
Clean from my hand?"

と戰栗苦叫す。蓋し、其怖るゝ所無形の大逆にある故に、一滴の鮮血だに此大逆罪の符號となりてマクベスの全身を震蕩するに足るなり。與兵衞は然らず、彼れの怖れは、無意識の刺擊なり、有形の死顔の怖ろしきを見つる果なり。故に、閾の外にいづれば、恐怖已に其半ばを減ず。彼れは無形を怖るゝものにあらず、「沈む來世は見えぬ沙汰、此世の果報付時と內をぬけいで一散」、と有るを見ても知るべし。

「さきにも待は待ながら、こちからひたと行通ふ道の犬さへ見知る程、うつゝぬかせし河內屋與兵衞、小菊にあふせをたのむの雁よ、新町の、花を見すてゝ蜆川、玆の花屋にたどりよる」とある事なるべし。何れにしても殺しの日より一月餘り經たる事明かなり。

與兵衛は金を得て借財を爲せしや否や。本文には何の噂もなけれど、これは一定すませしなるべし。只義の爲に死なんとまで決心したりし與兵衛が、人を殺して男を立てゝ後、尙ほおめ〳〵と生延び、而も新町蜆川と遊び戯れて日を送れること矛盾のやうなれど、彼れが性質の上より見ればさもあるべき事なり。前にもいへる如く、彼れの義といふは義父一人へ對しての義なれば、不義の借財を濟し了ふれば、義務の肩はぬけたりと信ぜんと一定也。彼れは負債といふ有形の物を濟す能はすば死なんとこそ思ひたれ、無形の義理の爲に夢にも死なんとは想はざりき。元來、彼れの悔悟は失望窮困によりて萠し、失望窮困は錢無きつらさより萠せし故に、錢を得ては心また變るべし。加ふるに、彼れもとより法律の怖ろしきを知りてあれば、人殺しの事露見すれば命無きことをも知れり。忘れてもお吉を殺せし事をば目顏にはいだすまじと決心して度胸を定めし趣きは、花屋の花車が「油屋の女房殺し」を芝居にするげなと噂しても動ぜず、大へいそらさぬ顏して手島屋の法事に臨み、「殺した奴もまだ知れず氣の毒千萬、したが追付しれませう」としら〴〵しく、七左衛門が闘星をさし、妻の敵と名宜かけても、「ア、七左衛門れうじするな、シテおれが殺した其證據は」とそらとぼけたる度胸に見えたり。世なれぬ與兵衛に、此度胸と見れば不思議なるに似たれど、畢竟は世なれねばこそ此度胸あるなれ。俚諺に謂ふ、盲蛇におぢずとは是れ也。人情を知り、義理を知り、良心もあり、善惡の分別も明かにてこそ、我も弱れ、意も縮め、我れより外を知らぬ者ばかり

猛きはなし。與兵衛の如きは、此時までも我が行ひの何故に大逆なるかを知らず、露見せば罰せらるべしとはよく知りたれど、何故に惡しきかを明かにはしらぬ也。

終に與兵衛が進退谷まり、天網の其身を掩ふに及び、叔父森右衛門といふ善知識あり、此大絶望の瀨戸際に大慈悲の引導をす。無明の暗忽然と散じ、眞如の月光、明皎々たり。彼れ卽ち覺悟の大音上げ、「一生不孝放埒の我れなれども、一紙半錢盗みといふと遂にせず、茶屋傾城屋の拂ひは一年半年遲なはるも苦にならず、新銀一貫目の手形借り、一夜過ぐれば親の難儀、不孝の咎物體無しと思ふ計りに目付、人を殺せば人の歎き人の難儀といふとに、ふッつと眼つかざりし、思へば二十年來の不孝、無法の惡業が、戸主となつて與兵衛が一心の眼をくらまし、お吉どの殺し金を取りしは河内屋與兵衛仇も敵も一つ悲願、南無阿彌陀佛」と叫ぶ憐むべし。是れは彼れが初めて人間に我れの外に人あるを知り、義理人情の止みがたきを知り、善惡の流行、因果應報の怖るべきを知れる時の言葉也。彼れが有形の世界の外に、無形の世界あるを見たる時也。嗚呼、此稚蒙兒、其行ひは惡むべし、其情は憫むべし。與兵衛は父母に勘當せられて、第一の失望を經驗し、此時はじめて義父の仁、實母の慈を認めたり。是れ彼れが無形を意識せる初めなり。

天網下り、命窮まり、彼れ更に大絶望を經驗す。此時はじめて世間の義理、人間の情理を解す。是れ彼れが大無形を意識し、人間に幽明二界あるを認めたるの時なり。

總評。此作を讀みて感じ得たる所は、無限の私慾と有限の娑婆、（義理人情の浮世）との軋轢なり。「盲我」と、「自然」との衝突也。世間を知らぬ我儘者と世間との撞着なり。主人公河内屋與兵衛は、天上天下我が身あることを知りて、他人の身あることを知らず、眼耳鼻觸の上には他人あることを意識したれど、德義上には他人あることを知らざるものなり。されば、我が一身の慾の遣方無きを知りたれど、世に義理人情の止みがたきことを知らず、又法律といふ形あるものゝ怖るべきをば知りたれど、道德といふ形なきものゝ守らざる可からざるを知らず。此故に情火ひとり熾んにて、分別の光明は秋の螢よりも薄く、熱湯の如き血汐は沸かへれと、冷水の如き理性は初めより濁りて澄ることなし。正に是れ一個の多血的肉塊男兒なり。心猿鎖を斷ちて何れの處にか逸し去り、意馬絆を切りて無碍縱横に狂奔す。されば、或ひは人情と撞着して之れを蹂躙し、或ひは義理と衝突して之を蹈碎き、しばらくは狂ひに狂へりと雖も、竟に「自然」といふ金剛壁に觸れて五體八裂し、情火八散し、滿身の濁血瀑下雨瀉し了り、初めて淨水的理性の泉迸然と沸のぼり、明月の如き靈光の皎々と照射するに逢ひ、忽然血清み、飄然雲霧散じ、天上天下我が一身の外に、億萬の他人あることを悟り、我欲の遣方無きと同時に、義理人情の止むべからざるを悟り、有形の制裁の外に無形の制裁あることを悟り、世に善惡の流行せることを悟り、因果應報の止むべからざるを覺悟す。

近松が時代物

嘗て寺山星川君に番ひにし約束をまだ得遂げぬ心苦しさ、此ごろの暑さも我が身ばかりの夏かと一層におぼえて、一日も早く此のつらさ逃れたく、手文庫さがさまにくつがへして種々書さしたる草稿をあれかこれかと求むるうち、ふと目にとまりしは去々年の暮に筑摩川、みそさざい、月の中人、百生の筆、奥山人などいふをかしき人達を集へて如何に近松研究會といふ者をわれ〳〵率先して起さばやといひいでける折、おのれ例のよくも考へでそが手はじめにとて走り書さしける漫評の筋書なり。當時の素志によれば、時代物も世話物も一切詳密に解剖分析し、中にも別きて傑作と思はるゝはいと長々しく評釋すべしとなりき。往ぬるころ、『日本評論』にいだせし『油地獄』の評、又は『後の月影』にのせし梅川の評などは、皆其折の遺物なり。さてまたさまで秀でたりとも思はれぬは、只評言の筋書のみを作りて悉しきは口上にていひ添ふること〻して會員に示しき。下に擧ぐるは件の筋書の二三なり。今見れば、餘り大づかみに言ひ放ちたるところ多くて、我れながらかたはらいたく、つや〳〵公にすべき物とは思はねど、城南評論社の催促のいと嚴しきを如何にせまし。さらば、近松の落葉掻集めたる此破籠をだに貢の中に加へられてよとて。

（『城南評論』所載、明治廿五年）

世話物にては、ほゞ性情悲劇の正脈を得たりとも見ゆる巢林子が、時代物を作りては、殆ど別人

のやうなるこそ訝かしけれ。世話物を見れば、人物主因となれるが如きに、時代物はおしなべて、事の變化を主とし、人物多くは人形なり。世話物の人物は、特質の中に普通性をも含みたり。さるからに間、一個人にしてかたはら人間をも兼ねたりと見らるゝに、時代物の人物は、大概或無形の性情の權化にして、大づかみに謂ふ模型たるに止まれり。悉しくいへば、時代物の人物は、或ひは短慮一徹の勇、或ひは未然洞察の智などいふ質に肉を附け、形を與へ、假に云爲せさせたりと見えて、その心ざま極めて單純なり。然るに、世話物の人物は、紙治となり、茂兵衞となり、忠兵衞となり、清十郎、與兵衞となりて、現はれたる所は、特殊なれど、其智情意の作用は、ほゞ人の普通性にしたがへるものゝ如し。尠くとも、彼の時代物の人物の譯も無く賢に、譯も無く愚なるが如きとは同じからず。加之、時代物にては、事變といふ事變、大かたは人心以外より來り、突如と生じ、忽焉と滅し、剩へ最も大切なる大愁歎の因緣、即ち彼のカタストロヒーの由來すら、偶然の災厄に原けるが多し。されば、人と事との間に因果の關係甚だ疎にして、吉凶、禍福、幸不幸、盛衰、榮枯の變化は、おしなべて宿世の命運といふものに似たり。世話物にも、宿命の沙汰と解釋せらる、禍福の變なきにあらねど、宿命說を離れても解釋の附くところが時代物との相違なり。作者の本意はそのいづれにありしか、いざ知らねど、予は世話物の傑作の宿命說を離れても解し得らることを信ずるものなり。しかるに、時代物の作に至りては、此解釋の自在無し。畢竟世話物にては、人物も人物の上に見えたる因果も、且つ特殊にして且つ普通なるが如きに、時代物にては先づ其人物は、或特性もしくは特質の權化なれば、ほゞ其質の普通性だけは備へたれど、漠然茫然として廣きばかりにて捕へどころ無し。即ち、死せる模型たるに止まりて、活きたる特殊の智情意なし。さて又、其人物の上に見えたる因果は如何にといふに、これはまたいと狹く特殊なり。即ち、其一人物の上にのみ働く宿世の因果なり。

以上は大概をいへるなれば、多少の例外あるべし。且つや下文にドラマ云々といへるは、重にエリザ朝の性情悲劇を標準としていふなり。又强ちドラマと非ドラマとの名目によりて、近松が作の優劣を定めんとにもあらず。且つまた宿命說の旨に成れる物語は、總て非ドラマなりといふにもあらず。予は只世話物と時代物との間に、結構の相違あることを指示せんと望むのみなり。讀者、其心して下の略評を見たまふべし。

『最明寺殿百人上臈』を見るに、是れは正しく謠曲なる『鉢の木』を臺として、『源平盛衰記』の飜案を接木としたるものなり。『女鉢の木』と題したる道行の條は、文さへに彼の鉢の木をさながらに移したり。只常世に代ふるに其妻を以てし、處々に挿文して前段との脈絡を通じたると、又文情相叶ふやうに女らしく文脈を和げて彼の勢揃への一段中に女武者の綺語を作り入れたることが相違なり。その元となりし謠曲の『鉢の木』も、これぞといふ波瀾無き物語なれば、ドラマには恰好

ならぬをそを曲げて翻案したる『女鉢の木』の一段が只管目の芝居となれること怪むに及ばざる結果なるべし。

さて、本篇の前段は、殆ど件の鉢の木とは離れたるものなり、卽ち、最明寺時頼が剃髪して名越が谷の法華堂に故頼朝の木像を安置して之れを祀り、神易と名づけたる御くじによりて政の當否を知らんと試みる由をもて發端し、其子天女丸時宗と其弟式部時定とが參詣せるを序びらきの事件とせるなり。案ずるに、此淨瑠璃は三世命鑑といふものゝ旨を骨として作り設けたりと見ゆ。何となれば、時宗は義經の後身なりといふ事、此序幕の中に木像の靈顯と神易とによりて知られ、そをもて後に至り天女丸と其叔父時定との間に爭戰の起るべき主なる原因としたればなり。卽ち、時宗は義經と化し、時定は頼朝と化するなり。之れと同時に、佐野の源藤太經景といふ時宗の侍臣が、梶原景時の惡靈に魅せらるゝ事ありて、突然逆櫓論と同じさまの爭論を時宗とする事あり。是れまた前世の因果の然らしむる所と釋したり。次ぎに、時定が兄時頼の坐禪中を機會として、甥の天女丸を亡きものにせんと企て、天女丸を捕へて押込めしを辛うじて逃出づるに及びて、佐々木廣綱といふ者と前にいへる源藤太との間に宇治川の先陣めいたる所作あり、一人は天女丸を討取らんとし、一人はそを救はんとし、到頭時定の誅せらるゝに至りて局を結ぶ。其間に、天女丸を義經の再誕と唱へたる處しば〳〵ありて、結末に二階道入道といふを辨慶に見たてたる場當りもありて、文章は

例の輕妙を極めて流麗艶美なれど、筋は三世相の講釋を聽くが如く、彼の希臘悲劇に謂ふニミシスの趣意とも同じからず。剩へ最明寺殿といふ表題はありながら、其人は全く客となりてところ〴〵に出沒するのみ。天女丸主人公のやうなれど、其性質の特に著く活きたるところもなく、大づかみに評すれば、血氣の少年に源九郎狐がつきたらん如し。女鉢の木に至りては、只一人經景の名あるが爲に前後の連絡あるに似たれど、其實は別の譚なり。これにも譚の主人公はあれど、因果を生みいだす主人公は無し。

『川中島合戰』は、前の作に比べて稍〻秩序あり。物語として見れば、前のより優りたるに似たり。これにも因果の主人公は無し。或意味にていへば、信玄と謙信とが主なるが如く、又或意味にては勝頼と衞門姫とが主なるが如く、又或意味にては山本勘介が主なるが如し。作者は明かに信玄をもて良將の器を表し、謙信をもて勇將の質を表せり。卽ち、二人は智勇二性の權化なり。故に、信玄は譯もなく明察ある人の如く、謙信は暗雲に勇猛短慮なるに似たり。二人の間、性の異なる由は明かなれど、唯〻女の烏羽繪と男の烏羽繪とを見るが如く、男女の別は明かなれども只漠然と別あるのみ。第一章は、諏訪明神へ兩將の社參せるをもてはじまり、村上義淸の私曲と勝頼と衞門姫との私通とをもて、兩將開戰の因緣とす。勘介の事は、第三章、桔梗が原の場より突然として說起し、偶然途中にて亡命せる勝頼と姫とを救ふ事を叙し、此際怒猪と戰うて勘介が脚を傷け、眼を失

ふ事を敍し、次いで第四章に至り、信玄が勘介を招かんとして雪中に彼れが茅屋を訪ふ事を敍し、勘介の母が信玄の器に服して勘介を奉公せしむる事を敍す。以上總て物語風の結構にして、事々皆別々也。第七章、輝虎本城の場は、輝虎が勘介の智勇を慕ひて之れを招かんが爲に彼れが母を招き、これを囚にして勘介を手に入れんとする條也。此章なる勘介の老母のみは稍〻悲劇ぶりの旨味を含まざるにあらねど、其中心となりて進退せるは此章と第八章なる直江山城館の場のみなれば、ほとほと前後には關係なし。其次ぎ第九章、天目山の場は又飜りて勝頼と姫とを叙し、結局合戰の上場は彼の兩將の格鬪を見せたり。話の筋をいへば互ひに相通じたれども、性情よりいふ因果の關係は全く支離滅裂せり。要するに、此作を三裂せば、三種の性情劇、即ちマーロー、シエークスピヤ的ドラマを作るに堪へたり。勘介もしくは其母を主人公として一篇の悲劇を作るに足るべく、信玄と謙信とを双主人公として一篇の勇壯なるドラマを作るに足るべく、勝頼と姫とを主公として更に一種のトラデヱ・コメデーを作るに足るべし。

『めいどの飛脚』

（明治廿三年）

竹のや主人の説によれば、近松が世話物を書きはじめしは五十以後なりとあれば、此作も老後の筆なることたしかなり。筋は、例の痴情を元とし、人物は男を富商の世繼とし、女を色町の遊女とし、舞臺を浪花としたる例の如し。上、中、下三卷のうち、下卷は所謂道行の幕（梅川忠兵衞あひやひかご）にて、大詰の幕をも兼ねたり。

案ずるに、此作も『天の網島』も雙つながら痴情の悲劇なれど、痴情の成立も其發達も同じからぬ所あり。隨ひて、大破裂の原く所も彼れと此とは趣きを殊にせり。『天の網島』にては、戀情の成立もつぱら女主人公の意氣地に原づけり。即ち、純粹の戀情にあらで一種の義理なり。此故に、通篇義理と人情と相纏り、戀の發達も大破裂も殆んど義理を離るゝことなし、約言すれば、彼作の本體は、義理と情との軋轢なり。當篇は然らず、先づ戀の成立異なり。此差別あらかじめ作者の心にもありしにや、『天の網島』の上の卷にては屢〻戀情の由來を說きたるに、此作にはさる事なし。通篇、戀情の由來をはのめかしたる所とては、下卷「あひやひかご」の中に、忠兵衞の言葉あるのみ。これとても作者に此心ありてものしたるにあるまじけれど、批評の目より見れば由來を語りたるものと見て不可なかるべし。其言に曰く、「それ覺えてか、いつのことかの初雪の朝ごみ

に、寐卷ながらに送られし大門口の薄雪も、今降る雪もかはらねど、變り果たる身の行衛、我れゆゑ染めていとほしや、元の白地をあさぎよりこひは譽田の八幡に、起請誓紙の筆の罰」云々と。思ふに此二人の戀中は馴染むにつれて深くなりし類にて、自づからなる因果ならん。素より其間に種種の人情くさ〴〵の義理からまりて相思を募らする因縁となりしならんが、其因縁の影の殘らざるを見れば、假令ありきとするも強大なる主因にはあらで、微弱なる客縁なりしと明けし。言葉を換へていへば、情は先にて理は後なりしなるべし。さて中の卷なる梅川が述懷の段に、「夕霧の昔を今にひきかけて」と前置きありて、淨瑠璃の文句を引き其續きに、「又はじめより僞の勤ばかりに逢ふ人も絶えず重ぬる色ごろも、遂の寄邊となる時は初の僞も皆誠、とかく唯、戀路には僞りも無く誠も爲し、緣のあるのが誠ぞや、逢ふこと叶はぬ男をばしひ〳〵て思ひが積り思ひ醒にも醒むるもの」云々といはせたるを見れば、梅川が戀の水上はかの觴を浮ぶるに足るといふ涓々たる細流にやありけん。さすれば、是れ人情の自然の果なり。無分別、無思量の中になりし戀なり。分別思量より募れる小春が戀とは差あり。

小春と梅川とは其性を異にせり。小春は頗る俠氣あれば、義理の繫れる所には泣くまじと張る意地ありて、心に泣くも色目には見えじとし、目には泣くも口には泣くまじとする張あり。梅川には此張見えず。「つらき勤をかきのもと島屋を一寸島がくれ」して越後屋に來り、あらはに我が心の哀

を語り、「申し、清さん、けふは島屋でかの田舍のうてずにせびらかされて頭が痛い、忠さまはまだ見えぬか、せめて由緣に貴孃の顏が見たさに貸しに來た」と質樸に懷を吐けるは、所謂「思ひの定宿」の事なれば、「氣兼せず底意殘さぬ」所なるべければ、これは普通の人情とも見做すべきが、朋輩女郎に向ひての述懷には梅川に自立の意地乏しく、他人に縋りて同感を求むる趣きあると見えたり。客を待つ間の氣晴に、遊女ども酒をのみ拳をうち、「こなさまは拳の上手、よひからちよとせさまにしつけられて無念な、敵とつて下さんせ、銚子直しや」とさゞめけど、梅川は打しほれ、「ア、うたての酒や、拳をする氣もあらばこそ、此梅川が今の身を少しは泣いて貰ひたや」と、うちふさぐ。此詞の身勝手にて傍若無人なる如き所に切なる情見えて梅川の本性現はれたり。蓋し、梅川は世間を知らぬ程の恍惚兒ならねど、切なる痴情に心昏みて時々我れの外の世界を忘れ、我れと他人とを同じやうに思ひ、我が苦しみを他人も苦しみてくれそなものと思ふ。情に切なる故なり。さてかゝる時、意地强くば、或ひは他人を怨み、他人を薄情と憎まん心もいづべけれど、意地弱く張なき者は只打泣きて同感を求むべし。梅川の如きは、後の亞流なり。彼れ又曰ふ、「田舍の客が身請の事、(云々)腹がたつやら憎いやら」と、是れ殆ど朋輩を骨肉と同視したる述懷とも評すべし。「とはいひながら、此は先、忠兵衞さまは後手といひ『宿』の勢力一ッにて手附も渡し約束の日限きれるもいひ延し、けふまではつながりしが云々」と取越苦勞を述べ、「如何なる事が邪魔にな

り、田舍の客に請けられては我が身一つは死んでものけふ」と公言す。恍惚娘が乳母の前に泣臥す時の樣に似たり。「天神太夫の身でも無し、さもしい金に氣がふれた店の女郎の淺ましさと世間の唱へ、朋輩の掃部どのをはじめとして格子女郎衆の手前もある」とは、愚痴の助太刀にもちだせし理窟にて「忠さまと本意を遂け、右や左人に唱はれし面がぬぎたうござんす」といへるは梅川が誠心の底なるべし。畢竟、梅川の性質には奥底なく、心に苦しみある時は胸を披いて朋輩に語る、小春が斷腸の苦痛悲哀あるも呑んで言はぬとは趣き異なり。けだし此奥底なき梅川の氣質こそ、多くの朋輩を得たりし源ならめ。そは、梅川が述懐をきく「一坐の女郎身の上に思ひ合せて尤とつれて涙を流せし」とあるを見ても知らる。奥底なき心の誠が、人皆の同感を呼べるなり。要するに、梅川は勤の女に稀有なる質樸の本性なり。これを素直ともあどけなしともいふべし。是れまづ小春と異なれる一點なり。

且つ又、此折の梅川の苦痛を、小春の苦しみに比ぶるに、これは切なれど不安心の苦しみなり。彼れは絶望の淵に臨めり。此れには、流石に賴あれど、彼れには世の義理を棄てざれば望を維ぐべき便無し。これには義理の柵なく、彼れは世の義理を大敵とす。苦しみの度をいはゞ、小春のかた一倍なるべし。而も、小春は之れを口外して同感を呼ばざるに、梅川は頻に他人に訴ふ。是れは、梅川の情の小春よりも切なるが故かといはんに、『天の網島』を讀めるものは小春の情の梅川のに

優るとも劣らぬを知るべし。所詮二人の差は、情の量の上にあらで、情の作用の上にあり。彼れは情を制し、此れは情を抑へず、彼れは意強く、此れは意弱し。是れ前にいへる相違より自然に派生せる結果なり。

さてまた、忠兵衞が八右衞門に辱められ、一旦の腹立に前後を忘れ、邸の金の封切つて投附けやがて喧嘩とならんとせし時、梅川涙にくれて二階よりかけおり、「情なや忠兵衞さま、何故そのやうに逆上らんす。そもや廓へ來る人の、たとへ持丸長者でも、金に詰るはある習ひ、此の耻は耻ならず、何を當に人の金、封を切つて撒散らし、詮議にあうて牢櫃の、繩にかゝるのといふ耻と此耻と換へらるか」と泣きくどきたるは頗る條理ありて、一向にあどけなき本性とも見えず、併しながら、其次ぎの言葉に、「耻かくばかりか梅川は、何となれといふとぞ、篤と心を落しつけ八さまに詫びごとし、金を束ねて其主へ早う届けて下さんせ。妾を人手に遣ともない、それは此身も同じこと、身一つ捨てると思ふたら、皆胸にこめてゐる……氣をしづめて下さんせ、淺ましい氣にならんした、斯は誰がした、妾がした、皆梅川がゆゑなれば、忝ないやら、いとしいやら、心を推して下さんせ」といふ。是れは、理性の言葉ならず。理義を說く如く、情を語る如く、男を諫むる如く、我れを責むる如く、男を思ふ如く、我れを思ふ如く、男を主とせる如く、我れを主とせる如く、續紛錯亂、麻糸の風にもつるゝ如く、嗚咽歔欷の聲依稀と聞え、「小ばんの上にはら〳〵と、玉なす

涙はとばしり、井手の山吹に置く露」と、相競ふさまを見る心地す。是れ眞に至情の語なり。其いふ所に理義もあれど、理は只情の後援なるのみ。情は主となりて、理は客となれり。

忠兵衞既に狂憤自棄して、咄嗟に梅川の身請をすまし、直に相携へて走らんとす。梅川が理性に富める女ならば、前後の事情より推測しても忠兵衞の本心を察すべき筈なり。然るに、尙ほ恍惚としてめつたにせく男を見かへり、「なんぞいの、一代の外聞、朋輩衆へも盃事いとまごひも譯ようして、徐々と出して下さんせ」と何心なく勇みたる情の女の證なり。我が心に裏なければ、人の言葉をも疑はぬ本性の淸きを見るべし。男わつと泣いだし、「いとしや、何も知らずか」といふ。此無邪氣質樸のうつくしさをこそ忠兵衞ならぬものも値ありと値蹈すべけれ。

小春と梅川とを對していはゞ、小春は其表端手にして其裏淋しく、梅川は其裏優にて其表哀れなり。小春は秋の紅葉の如く、絢爛としてまばゆけれど、散行く時は一葉をもとゞめず。梅川は如月の靑柳の如し、裊々としだれたる枝は軟かなる春の風にだに得堪へじ。心に小春を畫けば、鼻筋通りて眉は蛾蠶の如く、丹花の唇、きつとしまりて、涼しき眼じりの力身楚々動人の姿態髣髴と浮ぶ。心に梅川を畫けば、豐なる頰けしきばかり瘦せて、後髮の一筋二筋、花の如き瞼うるさげにかゝり黑目勝なる星眸の中に、萬斛の露溢れんとし顰めたる眉の遠山に愁雲なほほのかなり。彼なたは雪間の紅梅、此なたは雨中の海棠、かなたは意氣地を命とし、又男を命とす。されば、義理を天とあ

がめ、思ふ男を地としたるに、こなたは男を天地とし、神佛とし、性命とす。小春は巖陰にひとり咲ける蘭の如く、梅川は松に纏へる蔦紅葉の如し。彼れにはおのづから自立の相あれど、此れには絶えてさる相なし。されば、男が本意を明し、詮議の來ぬうち飛べといへば、はつと驚き、泣きいだし、「それ見さんせ、常にいひしは此事、なぜに命が惜しいぞ、ふたり死ぬれば本望、今とても易い事分別するて下さんせ」と一たびは胸を据ゑながら「生らるゝだけ生きて」といふ男の言葉に心變り、「さうぢや、生らるゝだけ添はふ」と答へ、共に廓を走りいづるは、情の自然といひながら、專ら男に賴ればなり。切なる情にこそ主客は無けれ、二人が進退の上をいへば、忠兵衞は主にて、梅川は從なり。此編に見えたる戀の、小春の意地をもて主因とせる『天の網島』のと同じからぬ所以なり。

戀の成立、已に斯くの如く同じからねば、大破裂の原因もまた格別なり。『天の網島』にては、戀の成立ちし元をさ〳〵女の意氣地なれば、其業因綿々と絶えず、最後の大破裂もをさ〳〵意氣地の作用に基き、臨終の期に及ぶまでも意氣地の影を失ふこと無し。然るに此作なる戀の成立ははじめより情のみによれる故、情の業因絶ゆること無し。

（此稿は未完のまゝにて中絶）

近松研究會發會の辭

（明治廿九年秋）

方今近松を言ふもの世に多し、吾人また大方と共に之れが研究を完うして、行く〳〵我が文學史の一端に資せんと期す。是れ本會ある所以也。若し夫れ研究の趣意、方法に關しては、こゝに絮說するの要なし。唯〻その方針を疑ふものゝ爲に、豫め吾人の執る所を一言して已まんと欲す。

今もし近松の作悉皆を、時代物、世話物の二大部に分かつ時は、啻に主題のみならず、作その物の上にも、ほゞ二樣の品あるを見る。而して作の年代上、時代物の遙かに世話物に先きだてるは世の知る所、近松の全面目を明めんとする者は、此次第を追ひて、年代的研究に從ふをもて至當の順序となす。されど一方よりいふ時は、斯くして研究せらるゝ近松の作、果して幾何の眞價を有するか。全體よりも寧ろ一部々々に就きて、其が品位を定むること、刻下の要務ならずとせず。吾人は此意に於いて、先づ時代物よりも世話物を擇び、世話物にても、女主人公の狹斜以外なると事件の構成に別趣あるとを先きにして、途を功多く勞少なきものに取れり。曰はく『槍の權三重帷子』、曰はく『堀川波の鼓』、曰はく『戀八卦柱曆』。而して時代物に入り、而して世話物に復り、紅紫錯（たが）ひに助けて部分の研究を完うせんとするもの、是れ大體の方針也。さて部分の研究終らば、更に年

代的研究に入り、首尾を通じて近松の全觀を描かんと試むべし。

以下、會員全部の意見を一束して一作の月旦を成せるもの、然るは載せて『近松研究』と表題したる舊刊單行書に在り。こゝには只自分の評語のみを抄出す。

『槍權三重帷子』

近松研究第一會（明治廿九年十月）

由來

種彥が『邯鄲諸國物語』中編の序に、

「槍の權三の名は昔の曲子（こうた）に見えたれど、いづれの時代、いづれの國の人なるを知らず。門左衞門が著はしゝ淨瑠璃『重帷子』は、かの古き人の名をかりて、雲州の街說を作りたるなり。是れにさも似たる話、因州、丹州にも又あり、それらの事を綴りし冊子、予の眼に觸れたる標題は、下編卷首に錄す。そのなかにあげたる『堀江川波鼓』はおなじ門左衞門作にて、因幡の巷談とおもはる。（下略）」

とありて、下編の卷端に、左の引用書目を錄したり。

「熊谷女編笠、五冊、寶永三年印本錦文流著　京縫鎖帷子、四冊、寶永三年刻森東鳶編　堀川波鼓、近松門左衞門作淨瑠璃堀江川波の皷と標題したる本にいさゝか異同あり、以上三種因州の巷談　亂萩三本槍、六冊、自一至二權三の話姓名は異なり　槍權三重帷子、門左衞門作淨瑠璃　槍權三淀の鯉口、鱗形屋板繪草紙作者不知　高麗橋踊念佛、涙花茉座歌舞伎狂言、根本、以上四種雲州の街說」

又嘗て借覽せし幸堂得知氏所藏の『女敵高麗茶碗』の卷末に、左の文あり。

「大げさ、右の腕切落され、左のひぢしりそげ去る。骨出で、脊中に疵三ヶ所、右の脇二ヶ所、みけん疵二つ。とゞめ有り、「着類ちゞみ立島、大脇指ぬきはなし。越前國下坂國繼、長さ一尺七寸五分、金ごしらへ。帶、紫ちりめん。本もふる紙入。

女	ま	つ	ゑ 三十六才
密夫	生田源次	二十四才	
討手	增井宗茂	四十八才	
女房弟	古林佐一郎	三十才あまり	

せなかに大切付二ヶ所、其外小疵、とゞめあり。「着類下白かたびら、上はかうりんの梅墨繪の立木、きゝやう入、帶花色りんず、白ちりめんのかゝえ帶、べつこうの丸ぐし、紫ぼうし

享保貳丙年七月十七日暮六つ半」

又『我自刊我書』中に見えたる『槍權三重帷子』の附言に、

「これは享保二年八月の作にて事實雲州の巷談なり。「たじまのゆげだ伯耆路云々」の文あり、徵すべし。いづれにも伏見にてせし妻敵うちの當時人口に膾炙せしものと思はる。そは同作（元祿十三年）『淀鯉出世瀧德』また寶永四年の『堀川波鼓』その外一二種に鑓の權三の名見

ゆ。この作、一は十七ヶ年前、一は十ヶ年の前なり。久しく世に流布せし巷談なるを知るべし。」

とあり。彼れ此れを思ひあはせ「とゞめは何れも一刀、槍の權三が古身の槍、疲も古疵咄しも古し、歌も昔の古歌なれど、云々」といふ結末の句を思ひ合はすれば、享保二年の出來事を機會として、古童謠を思ひ寄せ、わづか一月ばかりの間に物したる例の綺語たること明かなり。『熊谷女編笠』と『堀川波鼓』とをくらべ、西鶴のおさん茂兵衞と『大經師』とをくらべ、なほ近松が他の世話物と其本かと思はるゝ巷談街說とを比べて、彼れが脚色の鹽梅を見るに、門左衞門が實になづめるは、おほむね最期の模樣のみ。死ざま、年齡、衣服等は、間〻さながらに寫したりと思はるゝもあれど、事の起り、事情、ゆくたて等は、大抵ほしいまゝに作りたりと見ゆ。姓名などは憚りて古き名を借り、又はもぢりたるが多し。この作はた同樣か。さすれば此作の材源につきては、深く取りしらぶべき要もなきにや。なほ諸君の說をきゝたし。

享保二年八月（六十五才）にこの作を物せし前、寶永四年二月（五十五才）に、同じく妻敵討に關する『堀川浪の鼓』の作あり。又寶永三年九月（五十四年）には『大經師昔曆』の作あり。此三作いづれも心ならで不義の名を取りし男女の上に關したれば、相つらねて檢べなば、一しほの興あらんか。

性格

こゝに「性格」といふ題を設けたるは、巣林子能く某々の性格を描畫し得たりや否や、と寫性の技倆を月旦せんが爲に設けたるにあらず。作家としての巧拙は意匠以下の條に論評する筈なれば、爰にては專ら作中に現はれたる人物を實在の個人と見做し、そが言動に見えたる所によりて、其性格を解釋するにとゞむべし。すなはち剖析（アナリゼーション）を主とし、審美的批判（エセチカル・クリチシズム）を客とす。故に尤もよく性の見えたるを詳說し、他は性おぼろげなり、細剖しがたし、などいひすてゝ、更に「意匠」の條下に、その足らざるを補ふことあらん。

さて、此着眼點より觀れば、本篇中取りいでゝ評すべきは、女主人公おさいのみなるべし。權三は例の血の氣多き元祿才子たるにとゞまり、名（オノア）を重ンずると命以上といふ元祿武士の通有氣質の添はりたる外には、他の世話物の主人公と差別なし。シェークスピヤのボッシューマス、レーヤーチーズ、エドガーらと同じき稍、爛熟せる封建期の青年なり。美學上よりいへば漠然たる類型なり。忠太兵衞も例の武家の老爺（おやぢ）かたぎ、市之進、甚平はた定型。伴之丞は歌舞伎の安がたき、元祿期の理想たりし粹の反對を代表す。皮肉、不人情、無愛想、卑怯、等の塊のみ。おさいは齡卅七才の武家女房なれど、（種彦が『諸國物語』に傾城あがりと飜案せしほどに）蓮葉の女なり。物ごしはしたなく、饒舌にておッとりしたる所なく、よろづせか〳〵しく、包ましやかならで、何事もあけはなしに口外す。お孃さまよりすく〳〵と奥さま時代まで年を經たる影見えて、奥底なく正直なる所に、素人（しろうと）かたぎ見えたり。「人の用ひ、ほんさうもある」といひ、「母の浮名がはづかしい」といひ、「箒はなさぬ奇麗好き」といひ、少女が髷のゆひかたまでも氣にしての節介、元祿の武家女房の負けぬ氣なるはかくもありけん。世の聞えといふことを何よりも大切と思込めるなり。總じて封建期の爛熟せる時代には名（オノア）譽を重んずること度に過ぎ、昔は君父のために捨てし命を聞えの爲に捨つるは、東西の事實に證あり。泰西の似（え）而非（せ）決鬪も是れなり。七十二文に命を賣るも是れなり。元祿時代は稍〻この爛熟期に近づける時代なり。赤穗の義士も、なかば以上は、君の爲よりは、世の聞えの爲に、といはゞ、義士最員に怒らるべきが、據（よんどころ）なし。すなはち道の爲、義の爲は二の町にて、名の爲が大煩悶の大根（おほね）といふことが當代の人情を解剖する時の心得と思はるゝが、いかにや。

『波の皷』のお種と同じに、恪氣深きはおさいの性なり。嫉妬は多情兼勝（プラス）氣の裏（うら）なり。性よりいへば、お種も淫婦、おさいも淫婦なり。お種は、嚴格なる庭訓が、習ひ性となつて、シラフの時だけ貞女となり、おさいは、三人の子の可愛さが械となりて、みだら心も、恪氣をも忘れたり。お種は、在番の夫（をつと）の事口に絶たねど、おさいは、我が恪氣深きをも、權三の事起こるまでは、氣附かざりしものゝ如し。「此れほど恪氣深うては我が男を手離して云々」の條參照。性多淫なればこそ口に男の噂を絶たず、剩へ氣だてより

も風手のしなさだめ、座興とはいへ、むすめや婢女の前にて、「そなたが厭なら母が男に持たん」といふ下心、彼れみづからは、無論心附かでもあるべきが、市之進なく、三人の子供なくば、眞にあぶない物かな。蓋しおさいはみづから欺けるなり。ぞつこん好いたらしと思ふ權三を人手に渡すこと、何故か堪忍ならねど、自らは何故とも解する能はず、せめても我が替身たる乙娘に伴はせて置かでは、何故か知らず、堪忍ならぬといふ心、燃ゆるが如し。明白にいへば、自身が戀慕せるなれど、最期の際までも自識せざる、あはれ也。

常識一方の柳亭は、傳授の條をあまりとや思ひし、酒の上と作りかへたれど、シラフのかた、却りておさいが性にかなへり。我れ戀慕せりとは露ほども意識せざれば、内に省みて疚しき筈なし。恪氣もくぜつも、みな我が子の爲なるを、何の遠慮にか及ばん、國の爲、道の爲と自ら欺きて惡事を行ふともがらの、思ひ切つたる惡事をなすにひとしく、我が子の爲とみづから欺ける多情の女が行爲は、一段と嫌疑を引き易かるべし。我が帶解いて若き男の前へ抛つなど、シラフで出來ぬ不自然の擧動といふは、おさいの性格を觀破せざる評ならんか。さて、醜名を得たる後、權三はすぐ死なんとするを、おさいおしとゞめ

「エ、是非もない(中略)とても死ぬべき命なり、只今ふたりがまをとこと云ふ不義者になり極めて、市之進どのにうたれて男の一分立てゝ進ぜて下されたら、なう、忝からう、云々。」

といふ、正面よりは聞えぬ語なり。種彦が飜案せるごとく、男だけ逃がし、自身はあとに殘り、自害しても夫の一分は立ちさうな事を、妻敵討たせたいばかりに、態々眞物の奸通とは、聞えず。蓋し、おさいは自ら欺けり。此時大苦惱の底に、一點滿足の情(劣情)のひそめるを、自らは些も識らざるなり。

「思はぬ難に名を流し、命を果たすお前も、いとしいはいとしいが、三人の子をなした廿年のなじみにはわしゃ代へぬぞ。」

かばかり、理に外れたる義理だての口實あらうや。又この期に及びても、自責後悔の影更に無く、「思はぬ難」とばかり思ひ込めるは、自知の明缺けたる明證ならずや。

道行の中に、「かはす枕が思はくも」とあるを見れば、この不義遂にほんものとなりし事明かなり。しかるに最期の場にて、市之進を見て「なう、なつかしや」と駈け寄るは、本木に優るうら木なしとや。多情か、狂氣かとも見ゆめれど、(作意を離れ、眞にかゝる女ありてかくいひしなりと定めて評すれば)前に說けるおさいの性格とこの言葉と、必ずしも矛盾せざる歟。思ふに、おさいは最期まで自ら欺けるなり。我が子の爲と自ら欺きて、實は我れひそかに男を戀ひ、本夫の爲と自ら欺きて、敢て不義者になりおほしゝ程の女なれば、枕かはしての旅の間にも、不自意識にして遂げたる本望を、正氣の自我は一たびも嬉しと思ひしことなく、本夫に男立てさせたしといふ念のみ

が其意識を掩へりしならんか。尤も巣林子の作の上には、この双身（ダブル・セルフ）の祕密、十分には見えざれど、おさいが性はかく剖析するが妥當ならんと思ふ也。さすれば「喃なつかしや」も、自ら欺けるおさいが、最期（いまは）の語としては、適當ならずや。

かゝる性格は、或ひは今の世にはあるまじけれど、實よりも名を重んじ、道義よりも世間の聞えを重んぜし元祿時代には、必ずしも不思議ならずと思ふが、いかに。なほ諸君の説、きかまほし。

意匠

此作に不自然の嫌ひあるは否みがたし。按ふに、年齢の一周りも違ふ男女の密通といふ事は誰（た）が目にも著るく見らるゝ不自然にて、作者の側よりいへば、面白き解釋も、新奇なる趣向も、こゝにこそ挿みたき念を生ずべけれ。作者が享保二年に起りし評判の妻敵討を聞きて作氣を起したるは自然なり。尋常の作者ならば只の密通に作り做すべきを、我が子に溺愛せる餘り、不思議なる嫉妬を起し、それが間違ひの種となりて闘らずも不義者になり下り、本夫を思ふ切情よりも其濡衣をだにいひわけせで、從容死に就くと作り做したる（出來榮の可否はさて置き）兎も角も超凡の腕前なり。外に顯れたる行爲よりも内に蟠れる情合に、深く立入りて同感する底の作者にあらざれば出來ぬ事なり。されど巣林子が作はいつも性を主とせずして情を主とす、故に之れを性より見れば、矛

盾撞着の廉多く、之れを筋より見れば不自然（アンナチユラル）、非論理（イロヂカル）の點多し。こは抱月子の説の如し。又二つには篁村子の言はれたる如く、かたおちのせぬやう何れも〳〵哀れにといふ細工氣も附いてまはるゆゑ、「喃なつかしや」などいふ場當りめくセリフも出來（で）たるか。下に巴千子の言はれたるが如く、げに此「なつかしや」の一句は哀れなり。哀れなれど不自然の嫌ひはあり、不自然なれど、哀れと思はしむる所が此作者の腕なるべし。

修辭

竹の屋ぬしが祕藏の古正本を借覽せし時、近松が修辭の鹽梅は節譜を附したる正本によらずしては窺ひがたきことあり、オロシ、オクリなどはいふも更なり、其他ウタヒ、ウタ、地、詞、さまざまに語りぶりの異なるを味ひたまへといはれしは、げにことわりにて、只讀（たゞよ）みてはさまで無き處に、えもいはれぬ面白味を感ずるを、一々ほめたてんもうるさかるべし。以下主（おも）に讀みものとして文章の上を評すべし。

地の文の中にも、語簡にして意長き黄絹幼婦の句あまたあれど、取りわけて及びがたしと思ふは對問（ダイアログ）なり。壯年の作はさもなけれど、中年以後の作にては、疾徐、長短、情文相應じ、些の冗語無し。自他混同、主客倒置、訛語錯出、却りて善く活動の妙あらしむ。後の作家、就中馬琴以後の小

說作者らの對問（ダイアログ）は、生中に文法語格に拘泥す、故に敬語多きに過ぎ、冗句綿々、豫め案じ置きて口にする餘所ゆきの言葉の如し。概して生氣を缺く。巢林子と雲泥。

巢林子の比喩必ずしも創新ならず、大かたは典據あり、而も幾分の新案を附加して自家の物とす。かゝる例世話物には尠けれど、時代物には多し。それは一々にとりいでゝいふ程の事にもあらねば、こゝにひきくるめてたゝへ置くなり。

又近松が文の妙は予が一筆双叙と名づけし（文法をもて律しがたき）破格の句法に於て見る。此事は嘗て「破格の名文」と題して『日本の少年』に細說せしことあれば、今一々例を擧げず。

（「破格の名文」は第十一卷卽ち美辭論稿其他を收めたる卷中に在り。）

『戀八卦柱暦』

（明治廿九年十一月）

意匠

この作の意匠に關する評論は、下に集め揭げたる會員諸君の說に盡きたれば、又更に前口上を加へんは薔薇花に彩色するたぐひならめど、性格論にも敗北し意匠論にも隱居しては、明治五十年ならぬうちに鼈甲眼鏡（めがね）の厄介物かと『新小說』にそしらるゝも心外也。一通り思ひよれる所をいはん。この作、今より五年前、はじめて不倒子らと共に近松の世話物を讀みし折には、特にえりいでたる五六種中の一に列ねて、性格劇の特質を說明する材料に供せしが、そは必ずしもこの作を以て完全に近き作といふ意にはあらで、我が他の脚本又は院本にくらべて、性（人物）の罪過を主としたる所、やゝ泰西（かなた）の性格悲劇に通ひて、說明に便（たより）よければなりき。其ころ予が『油地獄』を取りて粗末ながら剖析的評論の一標本を提供せしも同じ心なりき。劇詩としての價値よりいへば『油地獄』も、この作も、未だ傑作といふべからず。近松が世話物のうちにても第一等の作ならぬこと勿論なり。予が『油地獄』の評をまッさきに世にいだしゝを以て予は彼の作を近松が作中の第一の作

と思へるなりと假定せる人は、彼の評論の緒言を讀み返して予が意を知るべし。此作に對しても、若し同じやうの誤解あらん人、はた上の意を諒せらるべし。さて思はずも岐談に入りぬ。本論に戻りてこの作の意匠を評せんに、この作は他の諸評家もいはれたる如く、巧を求めて巧に過ぎたるの跡明かなり。蓋し例の義理人情の衝突と纏綿と葛藤とを十二分に寫しいだして、運命の不可思議と人間の脆弱とをほのめかし、「是非もなき人の世のあはれ」を觀者に感ぜしめんの作意、全篇に附いてまはれるが故に、普通の讀者をしてお三も尤も、茂兵衞も尤も、お玉も、梅龍も、お三が父母も、皆尤もと同感せしむるの力はあれど、あまり義理づめになりたる所が此作の不自然なる所にて、卽ち巧に失したる所なり。近松と西鶴とを、このお三の話によりて、比照せんに、西鶴は情の經過を寫すに專らにして必ずしも作らず、修せず、隨つて自然に近く、近松は院本としての必要上より、義理と人情との衝突を寫さんの意盛んなるが故に、毎に人情の裏に義理を潛ましめ、義理の陰に人情を伏し、以て（言外に）人物と事件との間に必至の因果を織り成して解釋を試む。故に西鶴のは時としては質樸なる叙事たるに止まり、近松のは間〻成功して好劇詩をなせり。さればまた時としては、西鶴は好心理小說の粗材を供し、近松は間〻失敗して性格を破壞し、單に複雜なる義理人情衝突譚を作るに了る。『戀八卦柱曆』の如きは、やゝこの後の場合に相當す。西鶴の『五人女』に見えたるところも未だ醇自然とはいふべからざれど、近松が巧を凝らしたる此作よりは、其

過失の因緣も自然に近く、その過失後の心狀も、男女共に自然なり。然るに『柱曆』のかたは、下の諸評に詳かなるが如く、所々に心理の破綻ありて、如何に辯護せんとするも能ふまじき箇所尠からず。就中、茂兵衞、お三密會の條の如きは無理中の無理なり。西鶴のすら殆どあるまじき事と思はれ、事實としてはひとり『心中大鏡』の話のみを取らまく思はしむる傾きあれど、西鶴のはまだ可なり、『柱曆』のは細工なり。其他、お三が死なずして久しく旅にさまよふは、父母に心の殘る故と近松は解釋したれど、（前號性格の條下に宙外子が解釋せられたるお三が胸裡の一祕密を加へなばいざしらず）本文に見えたるまゝにては、辻褄のあはぬくだりも見えて、西鶴が描きたる過失後の心的狀態ほどに自然ならず。又結構の上よりいふも、近松は舞臺の變化を主とし、下に抱月子のいはれたる如く、齣毎に主人公を變へ來たるが故に、見る目にこそは面白けれ、眞の悲劇的インテレストは爲に幾分か削られ、剝がれ、讀者の同感を本主人公の一身に吸集するの力は、彼の『五人女』のより劣りたり。今の所謂性格悲劇といふ點よりいへば、筋こそ單純なれ、西鶴の作こそ、今一段の肉を加へば、好性格悲劇をなすべきものなれ。假令劇として佳ならざらんとも、心理的小說としては、彼の大經師が店さきにての立聞の條、四條觀劇の條など、皆いといみじき材料なるべし。さもあらばあれ、西鶴の作に見えたる所によれば、お三ははじめより幾分か罪過あり、彼れは自家の娛樂の爲に他を弄ばんとて瓜田に履を投じ、みづから求めて不義の婦となり、その過失を知

るに及びて尙ほ其不義を遂げんと欲し、竟に刑場の露となる。道義論者の側よりいへば、西鶴のお三は些の恕すべき點もなし。近松のお三は然らず。そのはじめの過失は父母の困厄を思ふに根し、夫の邪淫を怒るに崩し、夫の浮薄をたしなめんと欲するに成る。其輕忽とその無分別とは咎む可しと雖も、齡十八歳の若女房といふ條件と夫が浮薄といふ條件とは、この大過失を回護するに足るべく、其過失後の心情の、ひとへに父母の上を思ひ、又夫の上を思ひ、且つお玉、茂兵衞らを憫れむ邊に切なるを思はゞ、嚴格なる道義論者といふとも、多少の酌量を惜しまざるべし。すなはち西鶴は有りの儘に元祿の罪過を描き、近松は義理人情の篩にかけて同じすがたを寫せりとやいふべき。西鶴は觀察し、近松は同感す。西鶴は他をして暗に悟らしめんと欲し、近松は深くも同感せしめんと欲す。悟らしめんの意隱然たるが故に、前者の作は往々にして一種の具象的人生觀となり、深くも同感せしめんの意あるが故に、後者の作は間〻揑造の人生畫圖となる。この『柱曆』の如きはやがて其一例なりと思ふが、いかにや。

『天の網島』

近松研究第八會（明治三十年十月）

意匠

意匠についても、諸君の說詳かなり。予は別段に言ふほどのことなけれど、聊か腑におちぬは、この作に限らず、巢林子が心中物に具通したる結末の殘酷なり。何が爲に斷末魔の苦惱を細叙したるにや。この作はまだしもなれど、中には殆ど讀むに忍びぬ程のもあり。ましてや有形にして演ぜしむるものとしては、甚しく過ぎたりと思はるゝもあるはいかにぞや。「暫し苦しむなり瓢（ひさご）、風にゆるゝが如くにて」のあたりも *death* を *beautify* するといふよりは寧ろ弄びてゐるかと感ぜらるるなり。或ひは多少死を欲する者を戒めんの敎誨主義が胸にありての筆か、あらぬか。さなくば殆ど蛇足の彩色のやうに思はるゝなり。

修辭

修辭上についても、改めていふ程の新見はなけれど、何度讀んでも面白く思はるゝにつけて、聊

か曲亭へ鋒尖の向けらるゝなり。曲亭は近松や西鶴をずッと見下し居りし癖に、内々庇を蒙りゐたりしなり。就中『美少年錄』の幾分の如きは、近松の心中物に負ふ所尠からずと思ふ。お夏に關する着想、形容のみならず、斧柄、落葉などに關する邊にも、巢林子の影響著し。朱之助に會しての斧柄の述懷、朱之助に對する落葉の物ごしには、近松が世話物の影いちじるく見えたり。七五調ゆゑさう見ゆるなりとはぬけさせじ。文句こそは全くちがへ「大抽だしの錠あけて簞笥をひらりと飛八丈」的の口吻そのまゝの句いと多し。ひそかに近松に私淑せりし證にあらずや。然るにとんと何の恩にもならぬげのそしらぬ顏は、例の癖とはいひながら、不埒なるかな。何れにもせよ、馬琴は十分近松を懷ろにしてゐたりしとは、その壯年の合卷などにいとよく見えたり。但し曲亭の近松から得たりし修辭上の趣致は專ら七五調にして、他の簡勁は彼れの學び得ざりし所なり。近松には比喩を離れ、掛け詞を離れたる短句に、却りて眞に人の腸をえぐる妙句あれど、そは馬琴の悅ばざりし所と見えて、曲亭の文は、調の流麗と掛け詞と引喩と典故とを引き去るときは、趣致全く索然たるもの屢〻あり。因りて考ふるに、近松と後の作家との關係は、この修辭上より見ても一研究問題となすに足らんか。彼の柳亭の文の如きは明かに巢林子の正腹、隨つて柳門の草双紙はすべて其統を引けり。系圖を作りて調べなば、巢林子の我が美文に於ける功績、更に一層顯著とならん。

巢林子の文が節調文なるからは、間〻散文調に碎けたる對問のうちにも、自然絃絲に叶ふ節調あ

るは言ふに及ばざる事なれど、近ごろのやうに純然たる讀み物として研究せらるゝ事となりては、或ひは地と詞との移り目、又は論理上には一氣に讀むべからざる句の間に節調上に聯絡ありて一氣に讀下さねばならぬことあるを、或ひは忘るゝ人も生ずべきか。例へば「免してたもれと手を合せ、口說きなげゝば、物體ない、それを拜むことかいの、云々」、此句、論理的にいへば「たもれ」にて一段落、「と手を合せ」より「なげゝば」までにて一句、「物體無い」以下は女房の詞として新に讀み起すべきなれど、調の上よりいへば「物體無い」は「口說きなげゝば」に接すべきもの歟。このたぐひいと多し。「何々は何、さりながら」とやうに反語を前の句へつながらす讀み癖是れなり。團十郎の「さりとてはまた」とまたを前の句へつゞくるも此詞の流れなり。かゝること、今は誰れも承知なれど、後年、。！？などの符號を用ひて近松の作を刊行する時も來たらば、宜しく此點にも注意して、方今の新體詩並に多く餘白を剩し、節調上の用心をも一目して知らるゝやうになさんこと、近松研究者の任なるべし。符號を用ふるを笑ふ昔堅氣の竟に負けて、早晩新式翻刻の必要も迫るべくや。

『雪女五枚羽子板』

近松研究第四會（明治二十九年十二月）

意匠

（脚色及び人物）

近松が作を所謂性劇に對して一概に情劇と名づけ、若しくは予が所謂夢幻劇の稱をもて悉く之れを蔽はまくせば、必ずしも蔽はれまじきにもあらねど、今は研究の便宜を思ひて、更にくはしく區別を設けんとす。即ち近松が一生の作をおのづから三種に分つを得べし。まづ古淨瑠璃に倣うて單純に作したる初期の王代物、時代物は、概して、物語ぶりの歴史物と名づくべし。これには謠曲を飜案し若しくはそのまゝに挿みたるも尠からず。次ぎに脚色の複雜を旨として、局面の波瀾變換に工夫を凝らし、例の夢幻の世界を描きいだせるものあり。假りに名稱して幻燈畫ぶりの歴史物といふ。所謂夢幻劇の醇なるものなり。但し物語ぶりの作との差はその作意、脚色の單複にありて、質にあらず。さて第三は世話物なり。これにもおのづから純雜の別はあれど、要するに、この種に屬したるは幾分か條理貫透して事件も人物も自然に近く、隨つて間〻性劇の面影あれば、或ひは其主人物を取りいだし來て、事件と性格との關係を辨析し、多少精緻なる判裁をも下すを得。さきに評

論せし三種の世話物の如きは、この後者に屬す。然るにこのたび提出せられし『雪女五枚羽子板』は、上にいへる第二種の歴史物に屬し、一切夢裡の境界なれば、脚色もとより不稽、人物もとより荒唐、禍福多くは偶然、會離多くは意表、驚愕（サープライス）を綸として悲喜の情を釣り、矛盾（インコンプルイチー）を搾取して以て好笑の源と成す。脚色いよ〳〵複雜にして情趣いよ〳〵不自然なる所以なり。さてこの夢幻的脚色の鹽梅につきては、予已に之れを『梨園の落葉』なる「我が國の史劇」の條下に論ぜり、今また反覆するを要せざるべし。只一言いふべきは、かゝる理窟を脱離したる夢の世界を筆下に生じて、さながら鳥の空間に遊び、魚の水中に遊ぶが如く、些も不都合を感ずる色なき遊戯自在の作者が筆つき、まことに現を夢と觀じ、夢を現と遊神する眞詩人にあらずば、いかでかは能くせん。彼の現象に拘々して寫實これ力むる輩（とらがら）の企て及ばぬ境界は、是等夢幻的作中にもあらんか。

かくはいへど、この『雪女五枚羽子板』は所謂夢幻的歴史物の傑作にはあらず。夢としても見そこねたる夢なるべし。彼の覺めて後、程經るまでも忘れがたき夢にはあらず。然るに此痴夢然たる一作が、俗に三傑作とたゝへられて、久しく俗を威（おど）したるは、そも〳〵如何なる因緣ぞや。此點こそは會員諸氏の意見さま〴〵なる所ならんが、予が一わたり考へたる所にては、別段深きいはれありとも見えず。按ふに、その人氣ありし第一の理由は、尤も幻燈畫ぶりなること、即ち目さきの面白きこと、第二は一年十二ヶ月中の花がたたる春正月を生捕ッて通篇正月づくしで持ちきれること、即ちあらゆる正月遊びを、或ひは地の文中にほのめかし、或ひは有形にして見せたること、第三は尤も俗衆に悦ばるべき *stage effect* を數を盡くして用ひたること、例へば、寶器の靈驗、雪中の生埋、女子の勇戰、變成男子、女子の饒舌、大合戰など。

人物につきては、別にとりたてゝいふ程のこともなし。この篇にあらはれたるは類型となづくるだに、いかゞと思はるゝが多し。多くは單に情合又は情趣を見する爲の道具となれる趣きあり。即ち「あはれ」、「をかしみ」等が人の形して躍動せるのみ。

『國性爺合戰』

（近松の夢幻劇概評）

紀元後一千五百七十八年（すなはちシェークスピヤ出生後十四年）に刊行せられしヂョールヂ・ホエットストーンといふ人の著『ボロモス・アンド・カッサンドラ』と題せる脚本の緒言に、當時の英國劇を綜評せるものあるを見る。曰はく

「英國の作家は劇を作るに於て尤も不穩なり、虚妄なり、秩序なし。まづその作の基礎をあるべからざる事件に據る、さて僅々三時間（是れ當時の興行時間也）のうちに全世界を遍歴し、情婦、情郎を婚せしめ、幼兒（いとけなご）を人とならせ、許多の王國を攻略せしめ、妖怪變化を殺さしめ、天上の善神を呼び降し、地獄の惡鬼を捉らへ來たる。剩へ屢〻嬉笑を買はん爲に、尊卑、都野を混同し、王侯に野人を伴はしめ、天下の大政を議する席に侏儒が滑稽をまじへ來たる。然り、衆人物皆同一の語調、侏儒も王侯も野人も。嗚呼、何等の甚大不作法。」

シェークスピヤ以前の英國脚本に對する右の評語の的當なることは、彼のシドニーが『詩辨』中の演劇及びリ、ー、ビール、グリーンらが諸作物の優かに證明せる所なるが、今この評語を借り來りて我が淨瑠璃の史劇に下さば如何。またホエットストーン一輩をして我が夢幻劇を觀せしめば如何。恐らくは啞然として自失すべし。

按ふに、シェークスピヤが英國劇に於て、右の極端なる夢幻劇時代と後の性劇的時代とを一貫せる如く、我が巢林子はた、その幻燈畫ぶりの淨瑠璃と後の世話物の作とに於て、ほゞ現在に行はるゝ我が國劇の兩端を併せ備ふ。近松をシェークスピヤに比べんとする者は、後者の傳奇劇（ロマンチックドラマ）に於て姓を異にせる一大巢林子を髣髴すべし。又近松が世話物に於てシェークスピヤが悲喜劇のほのかなる影を窺ふべし。是れ近松の世話物の、最初に新代の讀者に喜ばれたる所以にして、その時代物の作の、比較的に新代に悅ばれざる所以なれど、巢林子の本領の時代物にあることは世間の久しく認めたる所、彼れの天才を品隲せんと欲する者は、必ず先づ爰に筆を着けて、さて後にその老後の作卽ち世話物に及ぶべきなり。

近松が時代物は其數もおびたゞしく、巧拙の差もいちじるしけれど、『國性爺合戰』の如き、『十二時』の如き、『雙子隅田川』の如き、『紅葉狩』の如き、これらは近松の名と共に、ふと思ひ浮べらるゝ諸作にて、尠くとも措辭結構の老巧なることに於て彼れが時代物の代表たれば、その作柄（さくがら）を概見せんためには、尤も恰好なる資料なり。就中『國性爺』は俗にもてはやされし名作にてもあり、且つはその舞臺廣うして夢幻的技倆をほしいまゝにするに尤も適したる作なれば、作者が詩才の本然を檢（み）るには便宜多かるべし。

さて、專ら此作に關する批判は、會員諸君が例の細評に悉（くは）しかるべければ、予は只此れを援證として近松が夢幻劇を概評せんに、已に屢〻も言へる如く、予が尤も近松に服する所は、その同感の博大なること、むしろその客觀詩を作する技倆とその遊戲自在の筆、卽ち夢幻界を筆下に生じて些の不自然を感ずる色なく、魚の水中に遊泳するが如く、鳥の空氣に翺翔するが如く、夢を現（うつゝ）と遊神するの超常識的技倆なり。前者は近松に優らん者、之れを古今東西の詞壇に求むる、必ずしも難からず。後者に至りては、之れを列國の往古に求むべく、近世、未來世の詞壇に於ては、擬古剽竊の諸作以外、陳腐爛熟なる蹈襲以外、其比絕無なるべきを思はずんばあらず。論者或ひは謂ふ、若し夢幻的作意の妙をいはゞ、半二、出雲は近松の上にあらん、波瀾重疊の巧、彼等に至りて極まれりと。巧と緻とをいはゞ、げに論者の言の如くなるべし。但し初めて夢幻に遊ぶ端を我が詞壇に發きし者は、建國二千幾百年來、唯一人の近松ありしのみ。彼の古淨瑠璃は單純幼稚の俗叙事詩のみ。また彼の金平物の如きはたわいもなきお伽書ばなし。西鶴は現實の浮世繪師にして桃青はさびたる抒情詩人なり。半二、出雲、海雲、松洛、千四、文耕堂、櫻田、並木、瀨川、鶴屋、河竹らは畢竟ずるに母屋既に成りて後に之れに建て增しせし棟梁輩のみ。意匠、脚色の上よりいへば、淨瑠璃の流れにしたがうて降り、戲作の流れにしたがうて降れば、降ること彌〻遠くして巧と緻とは彌〻加はれり。化政度の草双紙に於ける變幻と錯綜とに通じたる者は誰れか老近松が脚色の淺露單純なるを思はざらん。曲亭が半主觀的叙事詩にくはしき者は、誰れか老近松が構思の野俗にして其主張の

卑しきに呆れざらん。蓋し近松が其時代物中に用ひたる幾多得意の落想は、爾後二百年の間に、幾回となく襲用せられ、或ひは洗練せられ、或ひは鍛冶せられ、或ひは化合せられ、或ひは鑄き分けられ、或ひは接木せられ、或ひは引き伸ばされ、千變萬化して、竟に我が傳奇類に必隨すべき尋常普通の材となりにき。されば今日より之れを見れば、近松が變幻自在の技倆も、敢て駭くに足らざるが如くなれど、試みに心を元祿の昔に置きて、其周圍の如何に肉慾の樂天地なりしか、其泰平と新文明とが如何に上下を惑溺し、華奢と蕩佚が靡然として風をなし、譬へば英國處女王朝の民俗が、遽然ルネサンスの巨濤に拍たれて駭喜狂喜せし折にひとしく、周圍の社會は殆ど演劇然たる社會、俚謠、俗歌然たる社會なりしことを思へば、此浮靡豪奢の世態の影を、殆どさながらに描寫したる松濤軒が浮世草子、近松が老後の心中淨瑠璃もしくは此世態に瞑悟して却りて幽寂に思ひを寄せし芭蕉一味の抒情詩は、寧ろ自然の產物にて、彼の談林の戲謔にひとしく、つまりは當社會の映像の濃淡に過ぎず。されども此さながらに寫してだに、詩を成し劇を成すべかりし大々的浮華にもあき足らずして、更に別に夢幻の世界を作り、夢をも現をも滅茶にして、縱橫自在の遊戲をなし、別仕立の橫着者は、ひとり門左衞門にとゞめたり。夫れ目に見ゆる此大世界を夢と見て、悉皆を現象と觀ずるは哲學者、詩人の境界にて、古くは浮屠氏、或ひはプレトー、近くは超絕哲學者らの證明せんとせし所、處女王朝の諸傑作にも歐洲近世の諸作にも、其例幾らもあるとなれど、珍らしきは

我が近松の逆觀なり。そも〳〵彼れは何といふ橫着者ぞや。うつゝの夢をくゞりぬけて夢のうつゝの無邊世界に七十餘年の長夜の夢、我が空想の傀儡箱が、興に乘じて操りいだす千變萬化の木偶人に、いつしか己れも同化して、怒り、泣き、笑ひ、狂ひ、勝手の寢言を書きちらして千萬人を狂はしゝは、古今に稀有の詩才にあらずや。見ずして這般の夢を綴るは今人に成し難からじ。眞に這般の夢を見て、忽ち泣き、忽ち笑ひ、斬られて些許の痛痒もなく、驚き覺めし夜被の襟に流石に涙痕を殘さんものは、古今に詩人多けれど、我が近松の外には稀なり。シェークスピヤの傳奇劇も、彼れ以前の夢幻劇も、希臘最古の荒唐なる作も、歐洲近時の樂劇も、夢といはゞ夢なれど、夢にも種種の種類あり。大矛盾、大驚愕、大變幻、大不合理を悉皆ごつちやに混淆して之れを數分時に緊縮し、泣かせ、笑はせ、怒らする一種異色の夢しばゐは、恐らく比類なかるべし。要するに、近松が時代物の傑作は醇乎たる夢のうつゝ、彼の道行の長文句は洒落れたミューズが絕美のねごとなり。されば之れを特稱して夢幻劇と名づけんこと不當にもあるまじ。

近松とシェークスピヤ

（明治四十二年十二月、『近松傑作全集』の序）

予曾て近松とシェークスピヤとを其位置、時代、境遇、閲歴等の上より比べて十餘條の相似點を得たり。曰く當時行はれつゝありし諸先驅の長所一切を攝取せし點相似たり、曰く飜案又は改作、添作もしくは合作を嫌はざりし點相似たり、曰く劇の原始時代に出でゝ、爲に益し爲に損したる點相似たり、曰く好協力者を得たりし點相似たり、曰く競爭者の侮るべからざる者ありし點相似たり、曰く當時既に其作を刊行せしのみか種々に版を重ねたりし點相似たり、曰く當代にも無雙の作家として歡迎せられ、後世に至りては更に一段の推重を受けたる點相似たり、曰く時勢の推移と共に輓近反動の起らんとしつゝある點も相似たり、曰く虛と實と相半するの境に立脚して不易の實世相を髣髴せしむると同時に、理窟もしくは敎訓を與ふるといふよりも寧ろ一種の慰藉を供することを以て其藝術の目的となせるらしき點も相似たり、曰く詩人には稀有なる豐富の常識を具へて中和健全の人生觀、倫理觀に安住せし點も相似たり、曰く其修辭術の縱横無碍にして悲哀と滑稽と兼ね到り、詞藻の富贍なる點も相似たりと。

されどかくの如きは或ひは偶然の類似たるに外ならざるべし。今改めて之れを作者たるの稟賦と

才能とに就いて見るに、二家の間には一段と意味深き相似點のあるものゝ如し。

古今内外を問はず、作家の賦性に本來二大區別あるかと思ふ。先づ作するに當り、想と筆と同時に働く作家あり。脚色も人物も詞藻も湧くが如くにして咄嗟の間に成る、自らも其如何にして然るかを知らざるものゝ如し。時としては筆の方が想よりも先きに働きしかと疑はるゝ場合無きにあらず。之れを半無意識にして作すと謂ふ。譬へて言へば、作の骨と肉と皮膚と服飾とが一時に立地に製らるゝなり。シェークスピヤの如きは其最も大いなる代表者なり。

然るに之れとは幾ど反對に、作の骨組十分に整ひたる後までも肉は尙ほ備はらず、皮膚の未だ布き及ばざるものあり。服飾は勿論なり。すなはち其想の悉く具體化せらるゝまでには一年、時としては二三年を要すると稀ならざる例十九世紀以來の名家に多し。徹頭徹尾自ら意識したる著作振なり。イブセンの如きを其著しき適例とす。

半無意識の作家は必ずの如くに健筆なり、一氣呵成なり。千篇立地に成るの概あり。隨つて出來不出來あり、杜撰、蕪雜、支離、無稽の失あり。飜案、改作に過ぎざる作あり。時としては更に一段名譽ならざる評判を蒙る場合も尠しとせず。

脚色にも前後辻褄の合はぬことあり、不自然を極めたる性格あり、不條理千萬の事件あり、かたはら痛き惡文あり、鄙陋至極の文句あり、駄洒落あり、無くて聊かも差支へぬ筋や人物や詞句が幾らもあり。其傑作にさへもムダやソツやアラやキズの無きことは無し。脚本は一小宇宙にして有機體に比すべきものなどゝ評することもあれど、此種の作家のは必ずしも然らず。其最大代表者たるシェークスピヤのすらが大分のムダ附にて、現に一幕幾場かを切取つてしまひても作の生命が絶ゆるでもなし。『ハムレット』や『オセロー』さへもさうなり。ほしいまゝに枝を繁らせたる老銀杏樹の如く、然らざれば來る者は拒まず、去る者は追はざる孟嘗君式の家庭組織などに比すべし。

之れに對して全意識に成れる近代の名作は截然たる別天地なり。例へばイブセンの作などには幾ど秋毫もムダといふものなし。目立ぬ樣に手を入れたる數寄屋好みの樹木などに比すべし。ふと見れば自然の儘の如くなれど、よく〳〵見れば一齣各段は言ふに及ばず、一句一字の末までも作家の周細明確なる自意識の奥書を經たるものにあらざるはなし。手拔け、不用意、勘違へ、見落しなどいふ意味の瑕疵は絶えてあらずといふも可なり。隅から隅までキチリシャンと行屆きて、些のスキなく、些のタルミなく、些のアソビなきを此類の作の特質とす。ゆとりに富める前類の作と引締りたる後類の作と、其佳なる者に至りては必ずしも優劣なし。只前者の傑出せるものを讀む時は、其形式や内容に不自然の箇所夥しきに係らず、案外にも心を山野、河海に遊ばせつゝあるが如くに感じ、後者の秀でたるを讀みては、其語も其事も其人物も如何にも實際あるらしく感じながら、不思

議にも狹き一室に靜坐せしめられて人生の疑問を沈思せしめらるゝが如くに感ず。後者は人生を觀照して自我を深くするに宜しく、前者は忘我し遊神して天地と同化するに宜し。此作癖の相違は主として作家が稟賦の然らしむるところたるに外ならずと雖も、年毎に自意識の强烈ならんとする現代に於ては、前者に屬せしむべき大いなる作家を看出だすことは、次第に稀有になり行くべし。シェークスピヤに比すべき近松は此點より觀て趣味深き研究の對象なり。

次ぎに、作家の文致の上にも、是れも亦た稟賦の然らしむる所かと思はるゝ根本的二大別の存するを看るなり。自然にして節奏に巧みなる作家と然らざる者となり。修辭術は群を拔きながらも、詞調の何となく粗澁にして、佶倔聱牙に失し、そこに一種の面白みの有るにも拘らず、朗潤諧暢の趣味に乏しく、隨つて一字一句を嚙みしめさする特質はあるも、陶然として人を醉はしむる魔力を缺く文あり。智に愬ふるを主とする作は斯くの如くにして非なること更に無し、但しそれと他の音樂的なる者とは全く質を異にせる文才の所產たることは爭ふべからず。而して此音樂的文才は、何れかと言へば、之れを彼の半無意識的の作家が天稟と見做すを當然とするものゝ如し。近世の能く意識せる作家中にも此特長を備へたる者は勿論あり。近くは獨のワグネルの專門家的なるは言ふまでも無く、現存の小說家中にも現にダンヌンチョの如き有名なるがあり、其他象徵派など名宣れる

詩人中にも多く其例を看出だすことを得べし。されど予が知れる限りにていへば、專門詩人、音樂家、乃至自意識の强烈なる作家の筆に現はるゝ音樂は餘りに規律が有り過ぎて、キチリシャンと整ひ過ぎ方附過ぎたるが何となく窮屈にて、他の半無意識の作家らが無規律に自然に興に乘じて奏で出づる韵語ならざる韵語、音樂ならざる音樂の趣味には似ず。此自然の音樂趣味は、到底彼の七五、八六と初めより字數を限り、或ひは種々に字配りを工夫し、行毎に餘白を剩し、句讀法其他の助けによりて、言はゞ機械的に一種の節奏を釀し出ださんとする或詞章家らの能くせざる所なるが如し。

シェークスピヤ又は近松の之れをなすは、春林に春鳥の囀るが如し。此點もまた二家の相似たる所なり。蓋しこゝに謂ふ音樂的とは單に朗潤諧暢にして流麗なるをのみ指すにあらず、緩急疾徐、剛柔清濁のあらゆる變化を曲盡して不即不離に臨機應變に不羈自在の節を奏で出づるを謂ふ。是れ一はシェークスピヤが韵語の詩人たり、近松が準樂劇の作者たるに原因するものたるや勿論なりと雖も、一はまた其作家としての先天性にも基けるものたることは、他の同境遇の作家らと比し來るに及んで明かなり。

然れどもシェークスピヤと近松との相似の點は略以上の比較にて盡きたり、一段深く其作の內容に立入るに及びては、近松は到底シェークピヤの對敵にあらず。彼れは湖海の如くにして、之れは